

楠・荒田町遺跡第54次発掘調査報告書

2014

神戸市教育委員会

楠・荒田町遺跡第54次発掘調査報告書

2014

神戸市教育委員会

序

楠・荒田町遺跡は昭和53年度に神戸市営高速鉄道の建設工事によつてはじめて確認された遺跡です。当時市街化が進んだ地域での遺跡の存在は、ほとんど不明と言ってよい状態でした。

しかし、この遺跡の発見以来、市街地の遺跡の存在に対する意識が高まり、中央区でも雲井遺跡や生田遺跡などの存在が次々と知られるようになりました。

のことによって、六甲山南麓平野部の弥生時代における生活の実態と、社会の進展を解明する手掛かりを得ることができ、国史跡の処女塚古墳や、多数の銅鏡などが出土した西求女塚古墳などの出現の背景を考える上で、貴重な史料を提示することができるようになりました。

今回で楠・荒田町遺跡の発掘調査は54次を数えることとなりました。この報告書が少しでも市民をはじめとする皆様方の、神戸の歴史に対するご理解に役立つことを願います。

平成26年3月

神戸市教育委員会

例言

1. 本書は神戸市兵庫区荒田町2-1-5、2-1-10において、平成24年度に実施した楠・荒田町遺跡第54次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は神戸大学医療センター建設工事に伴い、神戸市教育委員会が実施した。
3. 現地調査は諸般の都合により3回に分け、I区を平成24年10月22日～平成24年11月14日、II区を平成24年12月10日～平成25年1月17日、そしてIII区はそれに先立ち平成24年9月25日～平成24年9月26日に実施した。
出土遺物の整理作業は、写真撮影も含め神戸市埋蔵文化財センターで行った。
4. 調査面積は計約808m²（I区約456m²、II区約320m²、III区約32m²）である。
5. 現地での調査担当は教育委員会文化財課の黒田恭正（I、II区）・と井尻格（III区）である。
6. 本書の写真図版のうち遺構写真は黒田、遺物写真は杉本和樹（西大寺フォト）による。
7. 本書の記述、遺物実測、トレースなどは黒田が行ったが、第VI章の文化財科学による調査のうち赤色顔料については当教育委員会文化財課の中村大介が、動物遺存体に関しては独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 客員研究員の丸山真史氏のご教示を受け中村が執筆した。
8. 本書に使用した標高は東京湾平均海水面（T.P.）、方位座標は平面直角座標系第V系（世界測地系）である。
9. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」、神戸市発行の2,500分の1地形図「神戸駅」を使用した。
10. 現地調査に当たっては、国立大学法人神戸大学、兵庫県健康福祉部健康局医務課、兵庫県国土整備部住宅建築局の御協力を得た。
11. 発掘調査で出土した遺物及び図面・写真などの記録は、神戸市教育委員会が保管している。

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 遺跡の位置と環境	3
1. 地理的位置と歴史的環境	3
2. 楠・荒田町遺跡の弥生時代を中心とするこれまでの調査	7
III. 遺構と遺物	10
1. 調査区の設定と基本層位及び遺構・遺物の時期	12
2. I期（弥生時代中期）の遺構と遺物	12
3. II期（平安時代～江戸時代）の遺構と遺物	24
4. III期（明治時代以降）の遺構と遺物	30
IV. 神戸市域に於ける弥生時代中期の土器編年試案	47
1. 基準資料と土器の編年（西摂第Ⅲ～Ⅳ様式）	47
2. 楠・荒田町遺跡第54次出土土器の位置づけ	59
V. 明治期の煉瓦構築遺構の性格と刻印瓦	72
VI. 文化財科学による調査	75
1. I区SD01出土壺形土器に付着する赤色顔料	75
2. 動物遺存体	75
VII. まとめ	76

挿図目次

図1. 楠・荒田町遺跡位置図.....	3
図2. 周辺遺跡分布図.....	3
図3. 調査地位置図.....	7
図4. I区～III区弥生時代～江戸時代遺構全体図.....	10
図5. I区弥生時代～江戸時代遺構図.....	11
図6. I区SD01出土遺物実測図（1）.....	13
図7. I区SD01出土遺物実測図（2）.....	14
図8. I区SD01出土遺物実測図（3）.....	16
図9. I区SD01出土遺物実測図（4）.....	17
図10. II区弥生時代～江戸時代遺構図.....	18
図11. II区SD02遺物出土状態図	19
図12. II区SD02出土遺物実測図（1）.....	20
図13. II区SD02出土遺物実測図（2）.....	21
図14. II区SD02出土遺物実測図（3）.....	22
図15. III区SD03出土遺物実測図	23
図16. I区SD01出土古墳時代以降遺物実測図	23
図17. I区SK01出土遺物実測図	24
図18. 遺構外出土遺物実測図.....	25
図19. 石器・石製品実測図.....	26
図20. II区SE01断面図	27
図21. 金属器実測図.....	27
図22. 江戸時代遺物実測図.....	28
図23. I区～III区明治時代以降遺構全体図.....	30
図24. I区煙突・煙道遺構図.....	31
図25. I区八角形煙突平面図.....	33
図26. II区明治時代以降建物基礎・煙道平面図.....	34
図27. II区明治時代以降建物基礎立面図（部分）	35
図28. II区煙道7平面・立面図.....	35
図29. 近代以降遺物実測図（1）	36
図30. 近代以降遺物実測図（2）	37
図31. ガラス製品実測図.....	39
図32. 煉瓦実測図（1）	40
図33. 煉瓦実測図（2）	42
図34. 瓦類実測図（1）	44
図35. 瓦類実測図（2）	45
図36. 西拱第III-1、第III-2様式土器編年図（1）	61
図37. 西拱第III-1、第III-2様式土器編年図（2）	62
図38. 西拱第III-1、第III-2様式土器編年図（3）	63

図39. 西拱第IV-1、第IV-2様式土器編年図（1）	64
図40. 西拱第IV-1、第IV-2様式土器編年図（2）	65
図41. 西拱第IV-1、第IV-2様式土器編年図（3）	66
図42. 西拱第IV-1、第IV-2様式土器編年図（4）	67
図43. 西拱第IV-3、第IV-4様式土器編年図（1）	68
図44. 西拱第IV-3、第IV-4様式土器編年図（2）	69
図45. 西拱第IV-3、第IV-4様式土器編年図（3）	70
図46. 西拱第IV-3、第IV-4様式土器編年図（4）	71

挿図写真目次

挿図写真1.	75
挿図写真2.	75
挿図写真3.	75

写真図版目次

図版1. SD02出土土器	
図版2. I区全景（西から）	
I区全景（南西から）	
図版3. SD01（東から）	
SD01（西から）	
SD01土層断面（西から）	
SK01土層断面（北から）	
SK01（東から）	
図版4. II区全景（北から）	
SD02（東から）	
図版5. SD02土器出土状態（南から）	
図版6. I区八角形煉瓦煙突・煙道（西から）	
I区八角形煉瓦煙突（西から）	
図版7. II区煉瓦積建物基礎（東から）	
同上（西から）	
図版8. II区煙道7（東から）	
煙道7残存部分（東から）	
図版9. II区建物南辺の基礎及び雨落ち溝（南から）	
同上雨落ち溝除去後状態（南から）	
図版10. SD01出土土器（1）	
図版11. SD01出土土器（2）	

- SD02出土土器（1）
図版12. SD02出土土器（2）
図版13. SD02出土土器（3）
図版14. SD02出土土器（4）
SD01出土須恵器
弥生時代中期石器類
図版15. 緑釉陶器・青磁・白磁
金属器
平安時代軒瓦
図版16. 近世・近代磁器
タイル
図版17. 煉瓦（1）
図版18. 煉瓦（2）

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

楠・荒田町遺跡は、昭和53年の神戸市営地下鉄山手線の建設工事に伴う調査で初めて確認された遺跡である。遺跡の範囲は兵庫区荒田町、西橋通、中央区楠町と上橋通に拡がる。発掘調査は今回で54次を数える。これまでの調査で楠・荒田町遺跡は、弥生時代前期から中期を中心とする当該地区における中核的集落址であることが判明している。

また平安時代末ころの遺構・遺物も主として神戸大学構内において多く検出されており、平家、福原京関係の遺跡として、祇園遺跡と共に重要な位置を占めている。

明治14（1881）年の『兵庫神戸実測図』では当該地は田圃となっているが、昭和12（1937）年の地形図には「大同辯寸荒田工場」の記載が見られる。解体前の建物は兵庫県埋蔵文化財調査事務所として使用されていたものである。

今回当該地に神戸大学医療センター建設工事の計画が起り、平成24年4月と同年10月に試掘調査を実施したところ、弥生時代の遺構面や明治時代以降の煉瓦積建物の基礎などが確認されたため、発掘調査を行うこととなった。現地調査は既存建物の解体作業および、発掘調査に伴う残土置き場の確保などの都合により、調査区をI～III区の3回に分割して実施した。調査期間はI区が平成24年10月22日～平成24年11月14日、II区が平成24年12月10日～平成25年1月17日そしてIII区が平成24年9月25日～平成24年9月26日である。調査面積は計約808m²（I区約456m²、II区約320m²、III区約32m²）である。

2. 調査組織

発掘調査に伴う調査組織は以下のとおりである。

平成24年度（現地調査）

神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

工楽 善普通 大阪府立狭山池博物館長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	水井 秀憲	保存科学担当学芸員	中村 大介
-----	-------	-----------	-------

社会教育部長	東野 展也	遺物整理担当学芸員	池田 穎
--------	-------	-----------	------

文化財担当部長	安達 宏二		内藤 俊哉
---------	-------	--	-------

（文化財課長事務取扱）			藤井 太郎
-------------	--	--	-------

埋蔵文化財担当課長	千種 浩		阿部 功
-----------	------	--	------

（埋蔵文化財係長事務取扱）			
---------------	--	--	--

文化財専門役	丸山 潔
--------	------

文化財課担当係長	丹治 康明
----------	-------

同	安田 滋
---	------

埋蔵文化財センター担当係長	斎木 嚴
---------------	------

事務担当学芸員	佐伯 二郎
---------	-------

井尻 格

中谷 正

小林さやか

平成25年度（報告書作成）

神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

工楽 普通 大阪府立狭山池博物館長

和田 晴吾 立命館大学名誉教授（平成25年7月14日まで）

菱田 哲朗 京都府立大学文学部教授（平成25年7月15日から）

教育委員会事務局

教育長 雪村 新之助 保存科学担当学芸員 中村 大介

社会教育部長 東野 展也 遺物整理担当学芸員 山口 英正

文化財担当部長 安達 宏二 藤井 太郎

（文化財課長事務取扱）

埋蔵文化財担当課長 千種 浩 阿部 功

（埋蔵文化財係長事務取扱）

文化財専門役 丸山 潔

文化財課担当係長 丹治 康明

同 前田 佳久

埋蔵文化財センター担当係長 斎木 嶽

事務担当学芸員 井尻 格

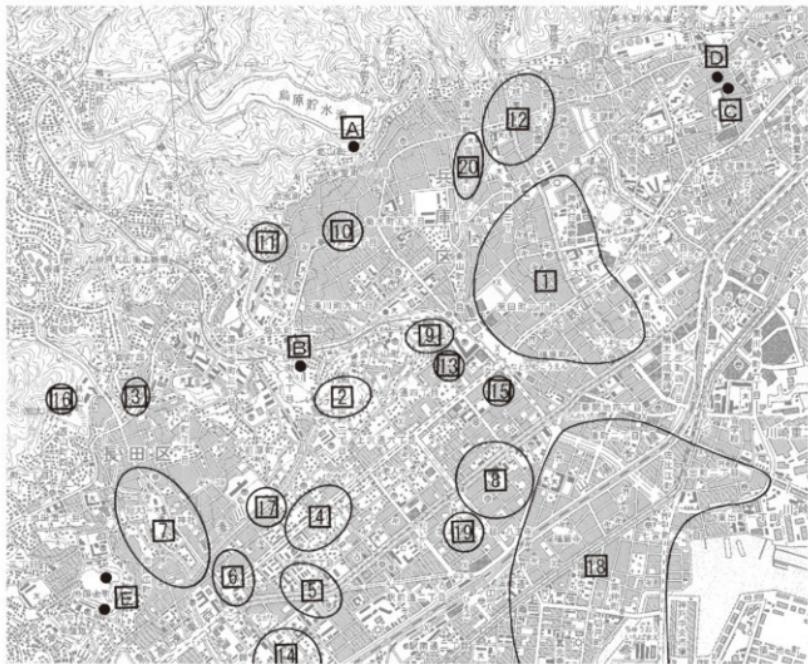
中谷 正

II. 遺跡の位置と環境

1. 地理的位置と歴史的環境（図1・2）



図1. 楠・荒田町遺跡位置図



1: 楠・荒田町 2: 会下山 3: 名倉 4: 上沢 5: 三番町 6: 五番町 7: 長田神社境内 8: 大間 9: 東山 10: 熊野
11: 河原 12: 祇園 13: 兵庫松本 14: 倭藏 15: 渡川 16: 林山案址 17: 室内 18: 兵庫津 19: 塚本 20: 雪御所
A: 夢野丸山古墳 B: 会下山二本松古墳 C: 中宮古墳 D: 中宮黄金塚古墳 E: 池田古墳

図2. 周辺遺跡分布図 (S=1:25,000)

楠・荒田町遺跡は六甲山南麓に拡がる平野部の西半部、旧湊川によって形成された扇状地と、中位段丘上に立地する遺跡である。六甲山南麓の平地にある他の多くの弥生時代集落が扇状地上に立地するのを基本とするに対し、集落の東半部を中位段丘上に占地する点で、当遺跡はやや特異な存在となっている。1992年から93年にかけて実施した第16次調査で検出した弥生時代中期の南北方向の溝は、縄文時代以来の自然流路の跡を踏襲するもので、調査範囲内ではこれを境に東に向かって緩やかに上っていく地形を示していたことから見て、この溝より西側が旧湊川による扇状地性の低地、東側が中位段丘に相当するものと考えられる。

今までの楠・荒田町遺跡の調査は、第16次調査地とこれの南方で行った第20次調査地以外は六甲山から南に延びる中位段丘上の調査である。弥生時代前・中期の集落は基本的に段丘上を占地し、可耕地を南に拡がる沖積地に求めたものと考えられる。

今回の第54次調査地もこの段丘上に立地している。

周辺で最古の遺跡は会下山遺跡⁽¹⁾で、サスカイト製国府型ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代では中期の土器片が名倉遺跡⁽²⁾で採集され、楠・荒田町遺跡第16次調査⁽³⁾でも土器片が少量出土している。後期では楠・荒田町遺跡第6次調査⁽⁴⁾で土坑を、楠・荒田町遺跡第38次調査⁽⁵⁾で、後期中頃の土坑から土器類と共にサスカイト製石鏃が出土した。楠・荒田町遺跡第16次調査⁽⁶⁾では、晚期の貯蔵穴を計4基検出し、アベマキ果実、アカガシ果実、イチイガシ果実、トチノキ果皮や黒色磨研浅鉢などが出土した。このほか上沢遺跡⁽⁷⁾、三番町遺跡⁽⁸⁾、五番町遺跡⁽⁹⁾や長田神社境内遺跡⁽¹⁰⁾などで土器類が出土している。

弥生時代前期では大開遺跡⁽¹¹⁾で前期前半の環濠を伴う集落址を調査し、堅穴建物や貯蔵穴を検出した。楠・荒田町遺跡第1次調査⁽¹²⁾では前期末から中期初頭の貯蔵穴が、第5次調査⁽¹³⁾でも同時期の貯蔵穴を検出している。このほか上沢遺跡⁽¹⁴⁾で流路内から前期前半の土器類が出土した。中期では東山遺跡（第Ⅲ様式）⁽¹⁵⁾、熊野遺跡⁽¹⁶⁾、会下山一本松遺跡（現会下山遺跡、第Ⅲ様式）⁽¹⁷⁾で土器類が出土し、河原遺跡（第Ⅳ様式）⁽¹⁸⁾では約40個のゴホウラ貝輪が入った壺が出土している。楠・荒田町遺跡第16次調査⁽¹⁹⁾ではこの期の掘立柱建物、壺棺、東西方向の2条の溝、南北方向の溝を検出した。後期では上沢遺跡⁽²⁰⁾や長田神社境内遺跡⁽²¹⁾、祇園遺跡⁽²²⁾で堅穴建物などを検出している。

古墳時代前期の古墳としては夢野丸山古墳⁽²³⁾と会下山二本松古墳が知られている。夢野丸山古墳⁽²⁴⁾は直径約20mの円墳とされ内部に特殊な堅穴式石室があった。副葬品として重列式神獣鏡、銅鏡、鐵鏡、刀劍類、鎌、斧、鉸などが出土した。会下山二本松古墳は全長約55mの前方後円墳（帆立貝式古墳）で、堅穴式石室が調査されている。副葬品には銅鏡、刀劍類、板状鐵斧、鐵鎌、刀子、滑石製琴柱形石製品などがあった。また会下山二本松古墳からやや南に下がった地点に未発掘の会下山古墳があったと言われているが、詳細は不明である。古墳時代初頭～前期の集落址も兵庫松本遺跡⁽²⁵⁾、上沢遺跡⁽²⁶⁾、長田神社境内遺跡⁽²⁷⁾や御歳遺跡⁽²⁸⁾で調査され、長田神社境内遺跡では堅穴建物が埋没する過程で投棄された多量の土器類と共に倭鏡が出土した。また楠・荒田町遺跡⁽²⁹⁾でもごく少量の遺物が出土している。中期の古墳は周辺では発見されていない。集落址は湊川遺跡⁽³⁰⁾や三番町遺跡⁽³¹⁾で確認されており、三番町遺跡では堅穴建物が検出され、近接する南北方向の溝中から直径5cmの小型倭鏡が出土している。後期の古墳については少ないながら確認され、中宮古墳⁽³²⁾、中宮黄金塚古墳⁽³³⁾や池田古墳⁽³⁴⁾が知られている。中宮古墳からは須恵器類、鐵刀、鐵鏡、鐵斧、耳環と共に楕円鏡板付簪などが出土している。林山町の須恵器窯址⁽³⁵⁾は採集資料ではあるが6世紀後半のもので、市内の古墳時代の

窯址として稀有な例である。

飛鳥～奈良時代の遺跡では室内遺跡⁽³⁶⁾で白鳳期の軒丸瓦・軒平瓦及び塑像片などが出土した。上沢遺跡⁽³⁷⁾でも同期の瓦片、奈良時代の重圓軒丸瓦や錢貨、銅鏡、銅製巡方・絞具、平安時代の京都築窯産の須恵器鉢など多彩な遺物が出土している。また御蔵遺跡⁽³⁸⁾でも重郭文軒平瓦、奈良三彩の火舎ないし盤の脚片、越州窯磁器、綠釉陶器、灰釉陶器、土馬や鈎帶などを検出した。

平安時代以降では、楠・荒田町遺跡の範囲内にある神戸大学付属病院内⁽³⁹⁾から二重堀、掘立柱建物が検出された。第16次調査⁽⁴⁰⁾では石帶が、第53次調査⁽⁴¹⁾では綠釉陶器、灰釉陶器や和鏡を伴う木棺墓が確認されている。祇園遺跡⁽⁴²⁾では園池遺構とそこに投棄された多量の京都系土師器小皿が出土した。またこの遺跡からはこの外青磁、白磁、吉州窯系玳瑁天目茶碗、京都産・播磨産の瓦類、常滑焼、渥美焼や石帯などが出土している。

兵庫津遺跡⁽⁴³⁾は中世～近世を中心時期とする遺跡である。近年の調査で奈良時代の遺構・遺物も確認したが、多くは14世紀以降のものが多い。

註

- (1) 喜谷美宣『新修神戸市史 歴史編Ⅰ 自然・考古』神戸市 1989年
- (2) 直良信夫「神戸市名倉町出土の縄文式土器片」『近畿古代文化叢考』革牙書房 1943年
- (3) 黒田恭正・阿部敬生「楠・荒田町遺跡第11次調査」「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1995年
- (4) 丸山潔「楠・荒田町遺跡Ⅲ」神戸市教育委員会 1990年
- (5) 浅谷誠吾「楠・荒田町遺跡第38次調査」「平成18年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2010年
- (6) (3) に同じ
- (7) 阿部敬生編『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1995年
- (8) 口野博史・水嶋正稔「三番町遺跡第2次調査」「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994年
- (9) 川上厚志「五番町遺跡第7次調査」「平成12年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2003年
- (10) 黒田恭正・佐伯二郎「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1990年
- (11) 前田敦久「大開遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1993年
- (12) 丸山潔・丹治康明「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1980年3月
- (13) 丹治康明「楠・荒田町遺跡」「昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1988年
- (14) (7) に同じ
- (15) 太田陣郎「神戸市の史前遺跡」「考古学」第3巻第2号 東京考古学会 1932年
- 小林行雄「神戸市東山遺跡彌生式土器研究1」「考古学」第4巻第4号 東京考古学会 1933年
- (16) 小林行雄「神戸市東山遺跡彌生式土器研究1」「考古学」第4巻第4号 東京考古学会 1933年
- (17) 太田陣郎「神戸市の史前遺跡」「考古学」第3巻第2号 東京考古学会 1932年
- (18) 濱田耕作「貝輪を容れた素焼壺」「人類学雑誌」第36巻第9～12号 東京人類学会 1921年
- 小林行雄「神戸市東山遺跡彌生式土器研究1」「考古学」第4巻第4号 東京考古学会 1933年
- (19) (3) に同じ
- (20) (7) に同じ

- (21) (10) に同じ
太田陞郎「神戸市の史前遺跡」「考古学」第3巻第2号 東京考古学会 1932年
- (22) 富山直人「祇園遺跡第5次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2000年
内藤俊哉・中村大介「祇園遺跡第14次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2013年
阿部功「祇園遺跡第15次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2013年
- (23) 梅原末治「神戸市丸山古墳と発見の遺物」「考古学雑誌」第14巻第5号 日本考古学会 1924年
梅原末治「神戸市夢野丸山古墳」「兵庫県史跡名勝天然紀念物調査報告書」第2輯 兵庫県 1925年
今尾文昭「備忘の呉鏡－夢野丸山古墳出土鏡の複製品」「三国志の時代－2、3世紀の東アジア－」特別展図録第77冊 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2012年
- (24) 吉井太郎・辰馬悦蔵他「会下山二本松古墳及び経塚」「兵庫県史跡名勝天然紀念物調査報告書」第5輯 兵庫県 1928年
北野耕平「祇津会下山二本松古墳における内部構造の考察」「兵庫史学」65 兵庫史学会 1974年
黒田恭正「会下山二本松古墳」「昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1987年
- (25) 中谷正「兵庫松本遺跡第2～4・12・17・19次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2005年
- (26) 小林さやか・中村大介「上沢遺跡第55次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2009年
谷正俊・富山直人「上沢遺跡Ⅲ第38・46・50次調査」神戸市教育委員会 2004年
- (27) (10) に同じ
- (28) 安田滋・富山直人・石島三和「御藏遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2001年
- (29) (12) に同じ
- 菅本宏明「楠・荒田町遺跡」「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1995年
- (30) 西岡巧次「湊川遺跡」「昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1989年
- (31) 山仲進「三番町遺跡第1次調査（1987・1988年度）」妙見山麓遺跡調査会 2006年
- (32) 梅原末治「神戸市中宮古墳とその遺物」「古墳址記」山口力編 1926年
小林行雄「技術からみた古墳の様式」「考古学」第5巻第6号 東京考古学会 1934年
- (33) 菅本宏明・松林宏典「中宮黄金塚古墳」「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994年
- (34) 森田稔「長田区親音山古墳の出土遺物」「神戸市立博物館だより」No.23 神戸市立博物館 1988年
- (35) 植沢正行・渡辺伸行「神戸市长田区林山窯について」「神戸古代史」3-1 神戸古代史研究会 1986年
- (36) 高井悌三郎「六甲山南麓の奈良時代遺跡」「伊丹市史」第1巻 伊丹市 1971年
水口富夫・平田博幸他「室内遺跡」「平成9年度年報」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998年
- (37) 斎木巖・奈良康正（県支援）「上沢遺跡第16次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2000年
- (38) 谷正俊「御藏遺跡V第26・37・45・51次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003年
- (39) 別府洋二編「楠・荒田町遺跡Ⅱ」兵庫県教育委員会 2008年
- (40) (3) に同じ
- (41) 2012年9月～11月、神戸市教育委員会調査
- (42) (22) に同じ

口野博史「祇園遺跡第3次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998年

(43) 阿部功「兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2008年

黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉「兵庫津遺跡発掘調査報告書第14・20・21次調査」神戸市教育委員会

2009年

2. 楠・荒田町遺跡の弥生時代を中心とするこれまでの調査（図3）

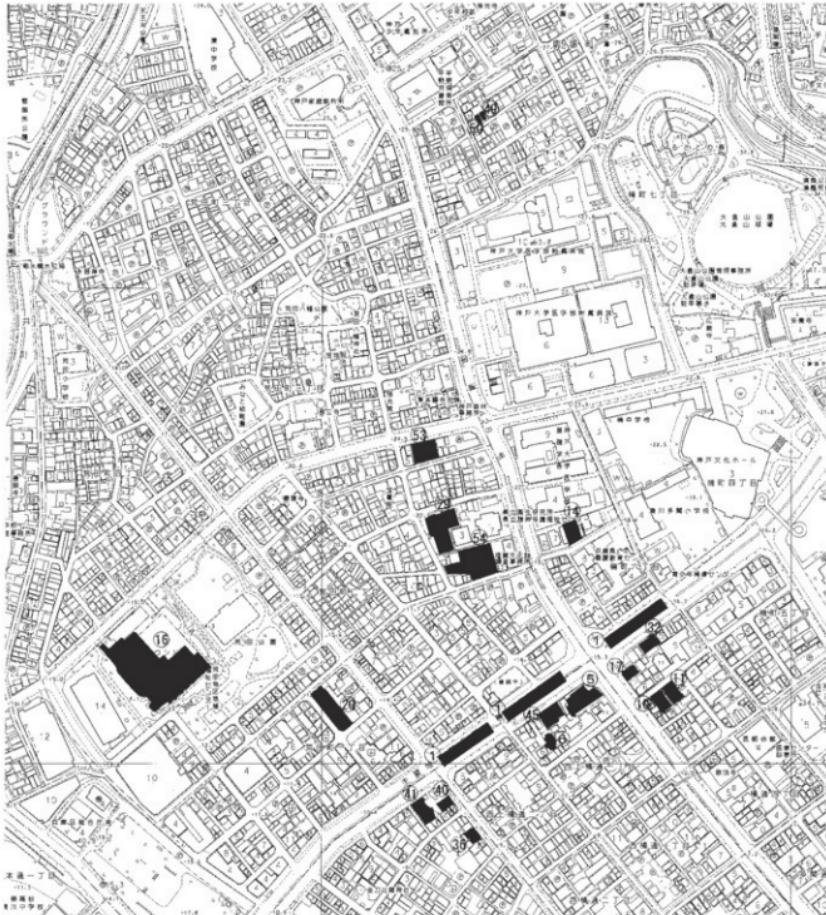


図3. 調査地位置図 (S = 1 : 5,000)

桶・荒田町遺跡は縄文時代中期から江戸時代に及ぶが、今回の第54次調査で弥生時代中期の溝を検出したことから、当遺跡の弥生時代を中心としたこれまでの調査地について概観しておきたい（括弧内の数字は旧次数）。

第1次調査地₍₁₎では第I様式から第III様式期を中心とする遺構・遺物が出土した。調査区は東西に長く、その中央地区から前期の貯蔵穴30基、第III様式期の竪穴建物、方形周溝墓や第IV様式期の木棺墓などを検出している。木棺墓は木口穴を持つもので、太い頸部の撫津型広口壺や水差形土器などが出土した。東側の地区からは第III-1様式期の溝（SD02）を、西端では第III様式期の竪穴建物が営まれていることが確認された。

第5（2）次調査地₍₂₎は第1次調査地の中央調査区の南に位置し、ここでも第I様式期の貯蔵穴を16基検出した。第1次と同じく第I様式でも新しい段階のものである。

第6（3）次調査地₍₃₎は第5次調査地の南西にあり、ここでも第I様式期の貯蔵穴を検出している。すぐ北にある第45次調査地でも前期の貯蔵穴と見られる土坑があり、これらの成果から直径約100mの範囲内に前期の貯蔵穴が集中して営まれたと判断される。また第IV-2様式期の方形周溝墓と土坑を検出し、出土土器は当該様式の基準の1つとなっている。

第10（8）次調査地₍₄₎では、中期の円形竪穴建物と「墓址状土壙」が出土し、後者から胴部穿孔の壺や未完成の管玉などが出土している。

第11（5）次調査地₍₅₎では、長さ約2.5mの楕円形土壙から第III様式の遺物が出土した。

第14（7）次調査地₍₆₎では検出長約15m、幅約1.5~2.2m、深さ0.5~0.8mの南北方向の溝から第III様式の土器が出土した。

第16（11）次調査地₍₇₎では、縄文時代中期から江戸時代の遺構・遺物を検出した。弥生時代中期では、第IV-1様式期を中心とする掘立柱建物、ピット、壺棺、サヌカイト剥片埋納遺構のはか生活空間の南限を示すと考えられる東西方向の2条の溝と、調査区中央部で南北方向の溝（SD02）を検出した。掘立柱建物には8.5m×3.8mの規模を有し、独立棟持ち柱を持つ建物が含まれる。SD02からは多量の土器と共に、石器、木製品、動物形土器製品などが出土した。また包含層から軟玉製の小玉を1点検出した。

第17（12）次調査地₍₈₎では方形周溝墓の一部を検出し、溝内から完形を含む第III-1様式の土器類と石包丁、石鏃などの石器類が出土した。

第20（13）次調査地₍₉₎は、第16次調査地の南約100mの地点で、方形周溝墓を4基検出した。方形周溝墓2には1基の、方形周溝墓4には4基の主体部がある。供獻土器は第IV-3様式に属するものである。

第29（27）次調査地₍₁₀₎は今回報告する第54次調査地の北側の隣接地で、弥生時代の溝や室町時代の井戸などが出土した。弥生土器は第III-2様式と第IV-1様式以降のものである。石器も石鏃、石包丁、砥石などが出土している。

第32次調査地₍₁₁₎では弥生時代中期の方形周溝墓を1基検出した。溝中の出土遺物は未整理状態でかつ小片が多く詳細不明ではあるが、第III様式のものと思われる。

第36次調査地₍₁₂₎では縄文時代～弥生時代の自然流路から弥生時代前期、第I様式の新しい段階の土器と、第III様式以降の土器が出土した。

第40次調査地₍₁₃₎でも弥生時代の遺物が出土している。前期末から中期初めのものが中心で、中に第III-2様式と思われる壺が含まれる。

第41次調査地₍₁₄₎では弥生時代～古墳時代の自然流路を検出し、前期末あるいは中期初めの小

型壺が完形の状態で4点出土した。

第45次調査地⁽¹⁵⁾では、東西方向の溝を約5m検出し、溝内から完形の土器類が出土した。方形周溝墓と考えられる。出土土器には壺2点、甕2点と水差形土器1点があり、第IV-3様式に属するものと考えられる。またごく少量ながら庄内期の遺物も存在する。

第49次・第50次調査地⁽¹⁶⁾でも弥生時代中期の土器が出土しているが、小片が多く、その量はごく僅かである。

第53次調査地⁽¹⁷⁾は第29次調査地の北側に位置し、第III-2様式の壺などが出土した。また古墳時代前期の土器も検出しておらず、なかに吉備系甕の破片も見られる。

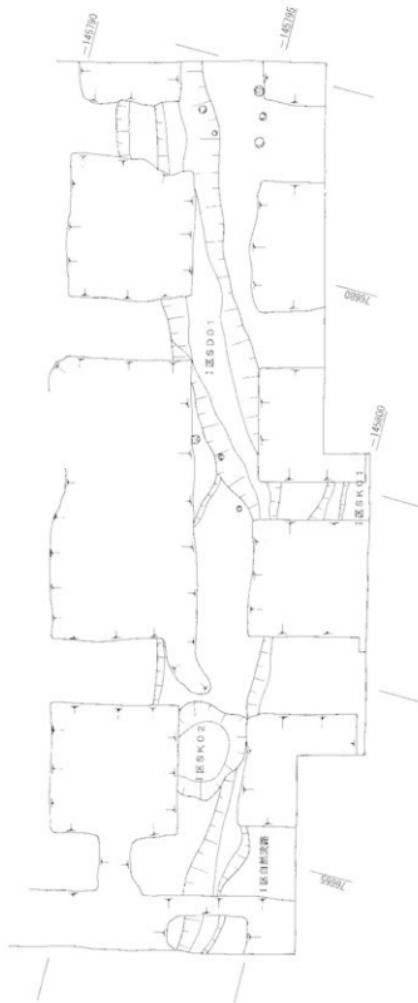
註

- (1) 丸山潔・丹治康明『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980年
- (2) 丹治康明『楠・荒田町遺跡』『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988年
- (3) 丸山潔『楠・荒田町遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会 1990年
- (4) 河本健介・平田博幸・山下史朗『楠町マンション建設に伴う楠・荒田町遺跡発掘調査実績報告』楠・荒田町遺跡調査会 1988年
- (5) 濱野修『楠・荒田町遺跡発掘調査概報－第5次－』神戸市教育委員会 1990年
- (6) 仲道裕『共同住宅建設に伴う楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』妙見山麓遺跡調査会 1996年
- (7) 黒田恭正・阿部敬生『楠・荒田町遺跡第11次調査』『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995年
- (8) 浅谷誠吾『楠・荒田町遺跡第12次調査』『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995年
- (9) 丸山潔・中村大介『楠・荒田町遺跡第13次調査』『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997年
- (10) 藤田淳・別府洋二他『楠・荒田町遺跡Ⅲ』兵庫県考古博物館編 2008年
- (11) 浅谷誠吾『楠・荒田町遺跡第32次調査』『平成16年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2007年
- (12) 阿部功『楠・荒田町遺跡第36次調査』『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2008年
- (13) 川上厚志『楠・荒田町遺跡第40・41次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2008年
- (14) (13) に同じ
- (15) 石鳥三和『楠・荒田町遺跡第45次調査』『平成21年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2012年
- (16) 池田毅『楠・荒田町遺跡第49次調査』『平成22年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2013年
池田毅『楠・荒田町遺跡第50次調査』『平成22年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2013年
- (17) 2012年9月～11月、神戸市教育委員会調査、調査担当閔野豊

III. 遺構と遺物

図4. I区～III区弥生時代～江戸時代遺構全体図 S=1:200

図5. I区弥生時代～江戸時代遺構図 S=1:125



1. 調査区の設定と基本層位及び遺構・遺物の時期

前記のように、発掘調査は建物解体作業及び残土置場の確保などの都合により、3回に分けて実施した。調査対象地の東半をⅠ区、西半をⅡ区とし、Ⅱ区の北東隅に当たる地区をⅢ区とした。

調査地は近代以降の建物などにより削平が激しく、近世以前の包含層は全く残存していないかった。現表土面下10~20cmで近代の遺構が存在し、調査区北部ではT.P.約19.0m、同南部ではT.P.約18.5~19.0mで近世以前の遺構面となっていた。

検出遺構は大きく3時期に分けられ、弥生時代中期をⅠ期、平安時代~江戸時代をⅡ期そして明治時代以降をⅢ期とした。なお検出したⅠ期の溝の最上層から古墳時代後期を中心とする時期の遺物が少量出土しているが、これもⅠ期の中で説明を加える。

2. Ⅰ期（弥生時代中期）の遺構と遺物（図4）

I区～Ⅲ区で、弥生時代中期の溝とピットを検出した。

I区SD01（図5）

弥生時代の溝は東西方向で、調査区南半で検出した。検出長約16m、幅約2~2.5m、深さ約0.8mである。溝の最上層には古墳時代後期の須恵器やごく少量の瓦器を含む土層が堆積し、溝が最終的に埋没するのは古墳時代後期以降と考えられる。

溝埋土からは土器のほかサスカイト製削器、砥石やサスカイト剥片が出土した。土器類は破片状態で出土しており、完形のものを含まないのは、後述のⅡ区SD02との大きな相違点である。また、溝の周辺で計8基のピットを検出したが、溝との関係は不明で、かつ建物としても織らなかつた。

I区SD01出土遺物（図6～9・19）

I区SD01から出土した土器には壺・甕・鉢および高杯がある。壺には弥生時代前期、西摂第I様式の37（以下「西摂」を略す）、弥生時代中期初頭、第II様式の1・38があり、これ以外は口縁端部に凹線文を施す段階の弥生時代中期後半、第IV-1様式に属するものである。壺の頸部には断面三角形凸帯を巡らし、口縁端部にはクシ書き波状文、綾杉文刻目文などや貼付円形浮文で加飾するものが多い。壺の頸部に凹線文を施す第IV-2様式のものは含んでいない（西摂第III様式～第IV様式の設定については第IV章で詳述する）。

1～7・39～43は広口壺である。8は大型で口縁部が太く短い直口壺、9は細頸壺である。10～14・28～36は甕口縁部である。15・16は鉢、17・57は高杯、18～27は底部、44～56は壺の頸部～体部上半である。

1は第II様式の壺で口縁端部を肥厚させその外面にクシ書き波状文、頸部をハケのちナデ調整し、6本のクシ書き直線文を描く。口径29.4cmである。

2～8は第IV-1様式で2は口縁端部を肥厚させハケ原体による刻目文を施し、頸部にハケ調整後、断面三角形凸帯を3条巡らす。口径21.0cmである。

3は口縁部を上下に肥厚させ9～10本のクシ書き波状文で加飾する。外面はナデ調整である。口径22.6cmである。

4も口縁端部を上下に肥厚させ、外面に不明瞭な弱い凹線文を1条入れている。口径23.0cmである。

5は口縁端部を上下に拡張しハケ原体によると思われる刻目文と2個1対の円形浮文を貼り付ける。刻目文は一部斜格子状となる部分があるが、残存状態が不良で全てが斜格子文となる

かは不明である。頸部外面に現存1条の断面三角形凸帯を巡らす。口径27.2cmである。

6は口縁端部を大きく下方に拡張し、外面にハケ原体による綾杉文を施し、円形浮文を上下2段に密に貼り付けている。口径24.8cmである。

7は口縁部が水平方向に外方に延びた後、端部が大きく垂下する壺で、垂下面に5条の凹線文を巡らし、凹線文間に原体不明の刻目文と12個1対で推定6対の貼付円形浮文を飾る。また

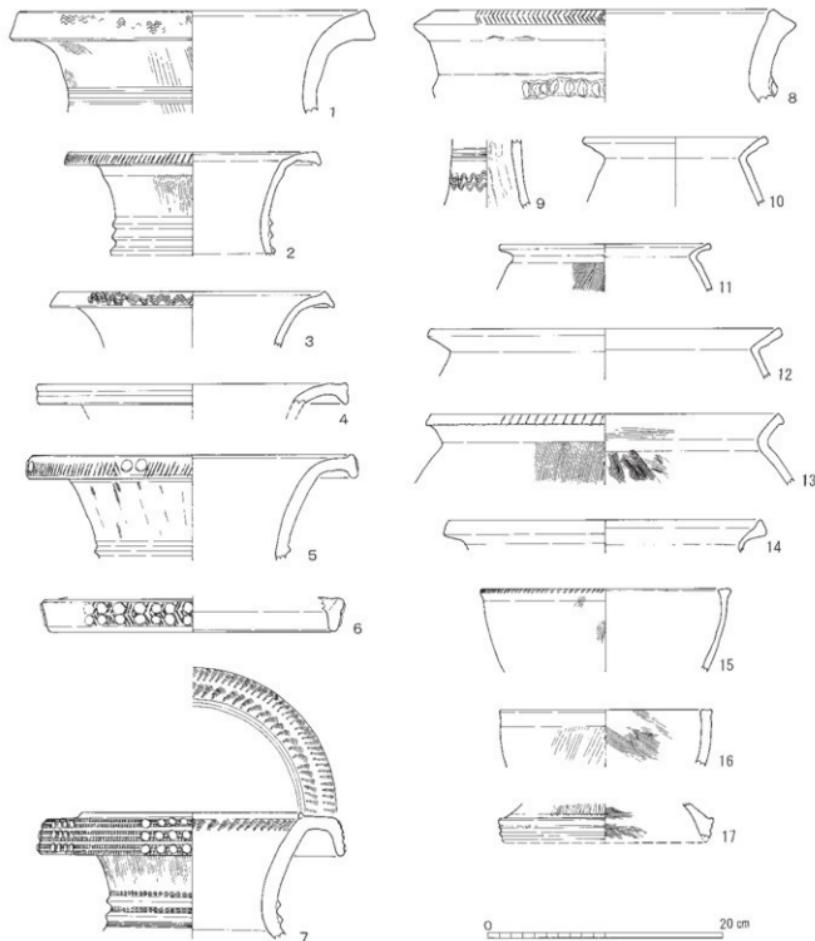


図6. I区SD01出土遺物実測図(1)

口縁部内面には断面三角形の凸帯を1条巡らし、その両側にクシ描き扇形文を密に配置している。頸部には2条の断面三角形凸帯があり、各凸帯の上縁に竹管文を、下の凸帯の下縁にも5本のクシ描き直線文を施している。頸部外面はハケ調整を施す。西播磨系の土器と推定される。

また口縁部に赤色顔料が僅かに付着しており、当初は口縁部内面から外面にかけ赤彩されたいたと思われる。顔料は観察の結果、朱であると判断されておりこの土器が本来特殊な用途を持っていた可能性がある（VI-1参照）。口径18.4cmである。

8は大型壺の口頸部で口縁端部を肥厚させ、ハケ原体による綾杉文を入れる。頸部には指頭圧痕文付凸帯を巡らす。口径28.6cmである。

9は細頸壺で7~8本のクシ描き直線文と波状文が見られる。内面にユビナデとシボリ目が見られる。頸部の残存部での最大径は7.3cmである。

10~14は壺の口縁部で10・11は単純くの字口縁、12は口縁端部に面を持つ。10は口径15.0cm、11は7~8本/cmのタテハケを体部外面に施し、口径17.8cm、12は口径29.6cmである。

13は口縁端部を下方に肥厚させ原体不明の刻目文を施している。体部外面は7~8本/cmのタテハケ、内面は14~15本/cmのハケ調整を施す。口径29.4cmである。

14は口縁端部を上方に跳ね上げている。口径は小片のため不確実だが26.4cmである。

15の鉢は口縁端部の内外を水平方向に肥厚し、外側の端部に原体不明の刻目文を加える。体部外面は7~8本/cmのタテハケ、内面は磨滅により調整不明である。口径21.0cmである。

16も15とはほぼ同形の鉢で、口縁端部を外方にわずかに肥厚させる無文のものである。外面を板ナデ、内面を9~10本/cmのハケ調整で仕上げる。口縁端部に穿孔がある可能性があるが小片のため確定できない。口径16.4cmである。

17は高杯の脚裾部で端部を拡張し、外面はタテヘラミガキ、拡張部に3条の凹線文を施している。内面は11~12本/cmのハケ調整でヘラケズリは見られない。裾径は推定17.0cmである。

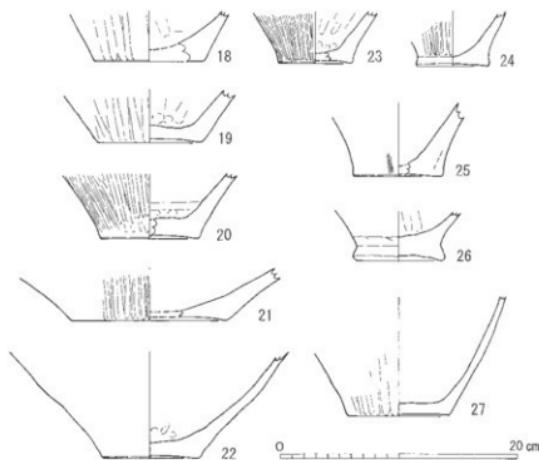


図7. I区SD01出土遺物実測図 (2)

18～27は底部で、18～24が壺、25～27が壺である。

18は外面をヘラミガキする。内面は板ナデである。底径9.0cmである。

19はやや上底気味のもので外面ヘラミガキ、内面はナデである。底径8.4cmである。

20もやや上底気味のもので外面ヘラミガキ、内面はナデである。底径8.2cmである。

21は胴部が大きく膨らむタイプの壺の底部である。やや上底気味のもので外面ヘラミガキ、内面は磨滅のため調整不明である。底径13.0cmである。

22もやや上底気味のもので外面は磨滅のため調整不明、内面は板ナデである。底径8.0cmである。

23もやや上底気味のもので外面はヘラミガキ、内面はユビナデ、ユビオサエである。底径6.0cmである。

24もやや上底気味のもので外面はヘラミガキ、内面はナデである。底径6.0cmである。

25は磨滅により調整が不明の部分が多いが、一部板ナデが残る。底径7.4cmである。

26は胎土に結晶片岩を多く含み第Ⅰ・Ⅱ様式の紀伊産甕の底部と考えられる。上底のもので、内面にナデ痕を残す。底径7.2cmである。

27は外面ヘラミガキ、内面は磨滅により調整不明である。底径8.4cmである。

28～36は壺の口縁部の断面図である。SD01出土の壺は単純くの字口縁が多い。端部は面をもつものが大半を占めるが、端部をわずかに跳ね上げるものも含んでいる。また丸く取めるものも少量存在している。

28・29は口縁端部を丸く取るタイプである。30・31は口縁端部に面を作るものである。32～34は口縁端部を上方に跳ね上げるタイプで、33は端面に、34は端部下縁部にヘラ刻目文を付加する。35・36は口縁端部を上下に肥厚させるものである。

37は第Ⅰ様式の壺で頸部にヘラ書き直線文が5条残っている。

38は第Ⅱ様式の直口の壺と思われ、外面にクシ書き直線文が2帯残る。

39～43は広口壺の口縁端部の断面図である。7本のクシ書き波状文(39)、原体不明の刻目文(40)、ヘラによる斜格子文と刻目文(41)、ハケ原体による綾杉文と刻目文(42)、やヘラによる刻目文(43)がある。

壺頸部は断面三角形凸帯(2・5・7・44・45・53)および指頭圧痕文付凸帯(8・46)を持つものが見られ、前者の中には縦位の棒状浮文を付加するもの(44)もある。

壺体部の文様はクシ書き直線文、波状文を主としているが、斜格子文も見られる。

44は4条の断面三角形凸帯に2本の棒状浮文を付加する。内外面の調整は磨滅により不明である。

45は現存3条の断面三角形凸帯を貼り付ける。外面はハケ(板ナデ)調整、内面はナデ、ユビオサエ調整である。

46は内外面をナデ調整した後、頸部に指頭圧痕文付凸帯、その直下に8本のクシ書き直線文を施す。

47は内外面をハケ調整した後、外面に13本のクシ書き直線文を施す。

48は外面をハケ調整した後、外面に10本のクシ書き直線文を現存5帯施す。内面は縦方向の強いユビナデ調整である。

49は9本のクシ書き直線文を現存2帯施す。内面調整はたて方向の板ナデである。

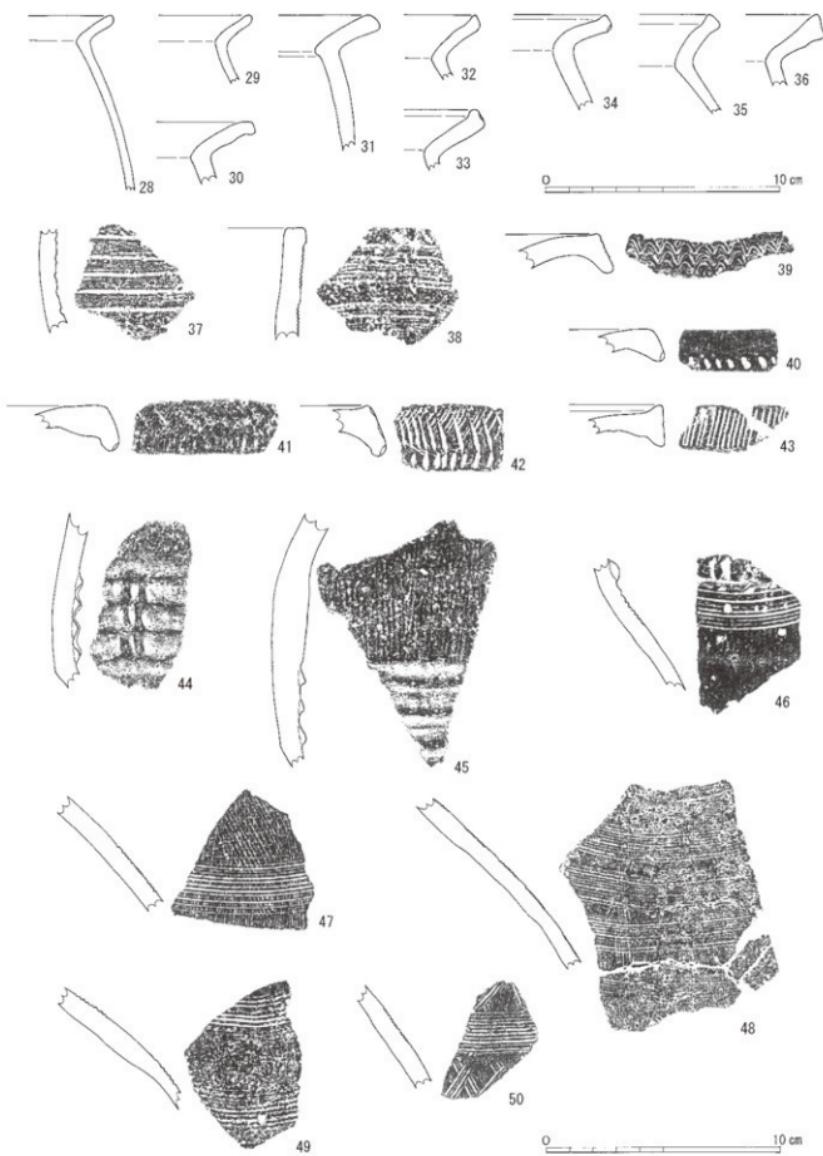


図8. I区SD01出土遺物実測図(3)

50は内面をハケ調整、外面をナデ調整した後、4本のクシによる斜格子文と12本のクシ書き直線文を描く。

51は内外面をナデ調整した後、10本のクシ書き直線文を2帯と、本数不明のクシ書き波状文を施している。

52は内外面をナデ調整した後、本数不明のクシ書き直線文と8～9本のクシ書き波状文を施している。

53は頸部外面に断面三角形凸帯が1条残るもので、内外面をナデ調整後、6本のクシ書き直線文と6本のクシ書き波状文を施している。

54は内面をたて方向の板ナデ、外面をハケ調整後10本のクシ書き直線文と8本のクシ書き波状文を施している。

55は内外面をナデ調整後、本数不明のクシ書き波状文と8本のクシ書き直線文を施し、直線文より下はヨコヘラミガキとしている。

56は外面に9本のクシ書き直線文を4帯施している。外面の調整は磨滅のため不明、内面はナデ調整である。

57は高杯の脚裾の破片で、円形のスカシが1か所残り、上部に2条の凹線文が見られる。内面はヘラケズリである。

図19-112・115は石器で112はサヌカイト製削器、115は砂岩製の砥石である。

112は両側縁に細かな調整を加えている。長さ56.88mm、幅19.98mm、厚さ6.65mmである。115は使用面をわずかに残すものである。現長7.8cm、現幅4.5cmである。

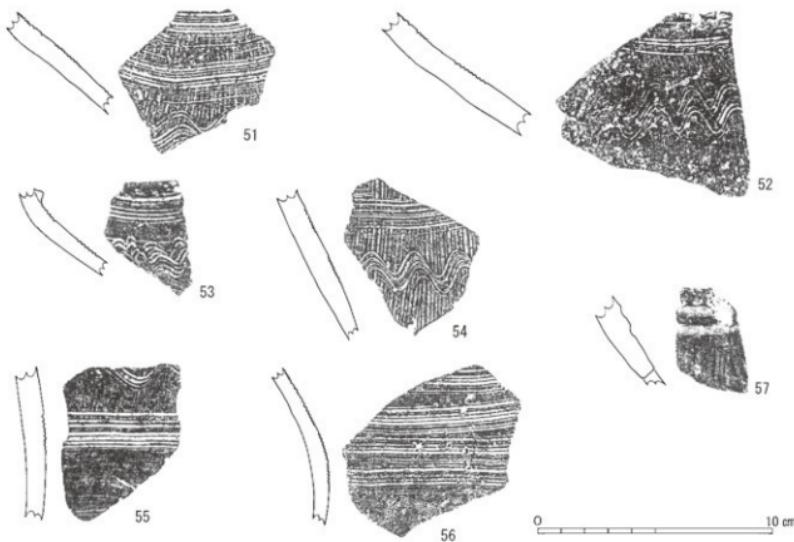
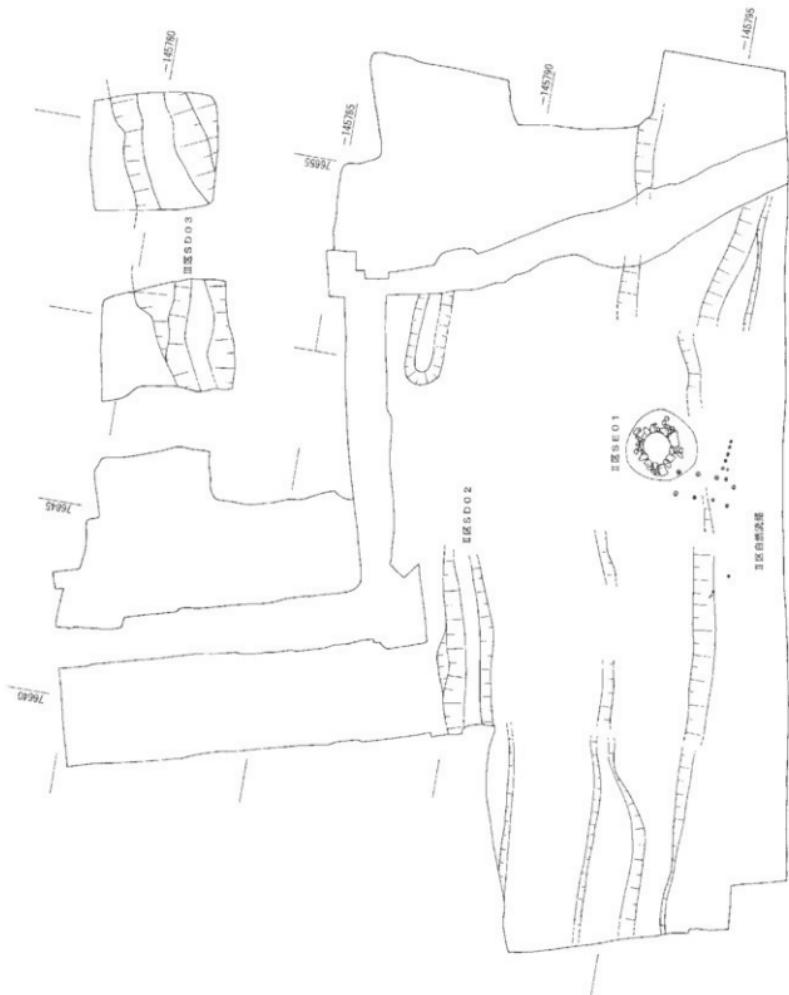


図9. I区SD01出土遺物実測図(4)

図10. II区弥生時代～江戸時代遺構図 S=1:125



II区SD02 (図10・11)

II区中央部の西端で検出した東西方方向の溝である。幅約1.2m、深さ約0.6mで西は調査区外、東は搅乱によって破壊されており、全長は不明である。検出長4.5mである。埋土上層から完形の壺・甕が5個体と、焼成後の穿孔がある高环坏部が1個体出土した。北側から落ち込んだ状態で出土している。

土器類と共にサスカイト製石錐・楔形石器の他、サスカイト剥片が出土した。

II区SD02出土遺物 (図12~14・19)

II区SD02出土の土器には壺、甕、高坏、水差形および無頭壺がある。完形ないし完形に近い状態で検出したものが計6点含まれる点は、前記したSD01出土土器との違いとなっている。

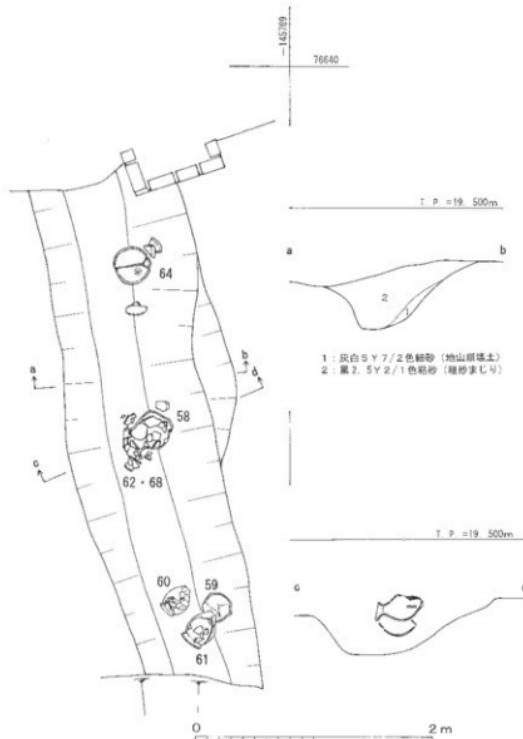


図11. II区SD02遺物出土状態図

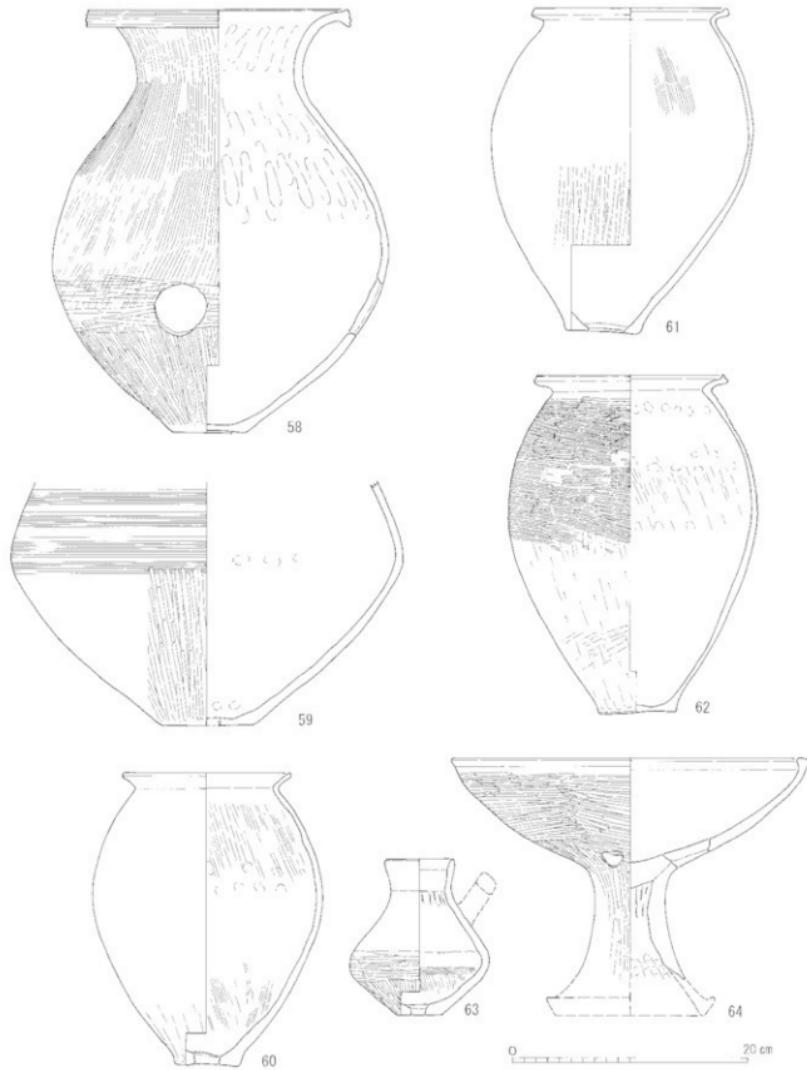


図12. II区SD02出土遺物実測図（1）

58は口縁部に3条の凹線文を施す以外無文の壺で、頸部～体部上半の外面はハケ、体部下半のみヘラミガキで調整する。体部内面はユビナデやナデで調整する。体部に径約4.5cmの外面から焼成後に開けられた穴がある。口径22.0cm、器高35.6cmである。

59は壺体部～底部で約20%の残りである。体部外面に9本のクシ書き直線文を4帯巡らしている。外面下半はヘラミガキ調整である。内面は摩滅により詳細不明である。胴部最大径は33.9cmである。

60～62は壺で60の口縁部は単純くの字で端部を丸く収めている。後2者は端部を上方に摘み上げている。

60の底部には径約2cmの外面からの焼成後穿孔が見られる。外面の調整は摩滅のため不明である。体部内面はハケ調整を施す。口径14.0cm、器高24.8cmである。

61の底部には径約3cmの外面からの焼成後穿孔が見られる。内外面の調整は摩滅のため一部のみ残存し、体部外面はヘラミガキ、体部内面は板ナデが見られる。口径16.2cm、器高27.6cmである。

62の体部外面の上半には左上がりの4条/cmのタタキが残り、下半は浅いヘラケズリが見られる。体部内面上半は板ナデ、ユビオサエで調整し、下半はナデのみである。体部外面の上半部にヘラによる刻目文が5本見られる。

63は小型の水差形土器で、この底部にも径約1cmの焼成後穿孔がある。取手部分は欠損している。体部外面下半にヘラミガキ、同内面にナデ、ハケ調整が見られ、頸部内面にシボリ目が残る。口縁部の抉りの有無は欠損のため不明である。口径5.6cm、器高13.2cmである。

64は壺部径29.5cmを測る無文の高壺で、外面はヘラミガキ調整されている。脚裾部を欠失するが人為的なものか不明である。壺部外面に径約3cmの外面からの焼成後穿孔を持つのは、58、60、61及び63と共通する特徴である。脚内面下半はヘラケズリで仕上げ、上半にシボリ目が残る。現高18.7cmである。

65は広口壺の口縁部で、端部を上下に肥厚させクシ原体による綾杉文と円形浮文を貼り付ける。端部からやや下がった箇所に2個1対の穿孔がある。口径34.4cmである。

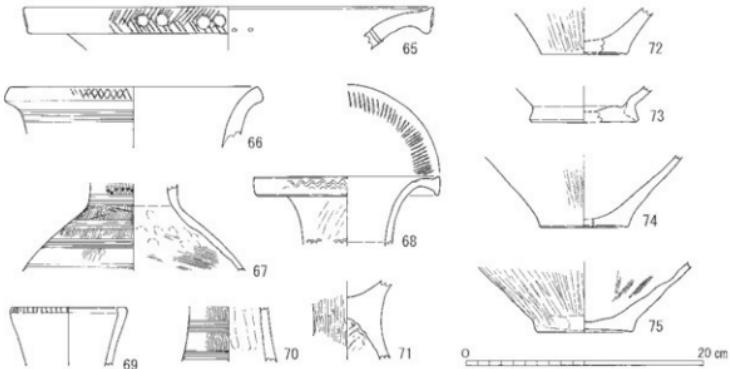


図13. II区SD02出土遺物実測図 (2)

66は第II様式と思われる壺の口頸部で口縁端部に原体不明の斜格子文、頸部に7本のクシ描き直線文が残る。口径20.8cmである。

67は壺の頸部～体部で外面はタテハケ調整の後、頸部下端に竹管文、それ以下に6本のクシ描き直線文が4帶見られる。内面にはユビオサエ、ハケ調整が残る。頸部径7.4cmである。

68は広口壺の口頸部で、口縁端部を上下に拡張し本数不明のクシ描き波状文、口縁部上面にクシ原体による列点文を加える。頸部にはクシ描き波状文が一部残る。頸部外面にはハケ調整痕が一部残る。口径15.6cmである。

69は細頸壺で口縁端部外面にヘラによる刻目文がある。内外面の調整は磨滅のため不明である。口径9.4cmである。

70は細頸壺の頸部で外面をハケ、内面をユビナデ調整後、8本のクシ描き直線文を2帶巡らす。残存頸部の径は8.0cmである。

71は高杯の脚柱部で外面はヘラミガキ、内面は粗いケズリが残る。

72～75は底部である。

72は壺底部と思われるもので外面をやや粗いタテヘラミガキ、内面はナデと思われる。底径7.2cmである。

73も壺底部と思われるもので内外面をナデ調整する。底径8.8cmである。

74も壺底部で外面はタテヘラミガキ、内面は磨滅のため調整不明である。底径7.4cmである。75も壺底部で外面はタテヘラミガキで、下端付近によこ方向のナデを加える。内面は板ナデ・ナデ調整である。底径8.0cmである。

76～78は広口壺の口縁端部の断面図である。

76は口縁端部が上下に肥厚するタイプで、内外面をヨコナデ調整後、端面にヘラによる斜格子文を描く。

77は口縁端部を上方に肥厚させ、下方に大きく拡張させるタイプのものである。内外面をヨコナデ調整後、端面にヘラ描き綾杉文と現存3個の貼付円形浮文で加飾する。

78は77とはほぼ同様の口縁部形態のものである。内外面をヨコナデ調整後、端面に6本のクシ描き波状文と口縁部上面にクシ描きの扇形文を飾る。

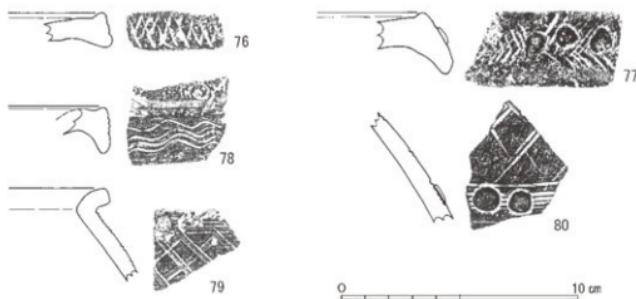


図14. II区SD02出土遺物実測図（3）

79は無頸壺の口縁部～体部上半である。頸部直下に10本のクシ書き直線文、体部に3本のクシ書き斜格子文がある。内面はナデで調整する。

80は壺体部で2本のクシ書き斜格子文、5本の直線文と貼付円形浮文が2個残る。内面調整はナデと思われるが、剥離が激しい。

図19-113・114は石器で113はサヌカイト製楔形石器、114はサスカイト製石錐である。113は長さ25.92mm、幅17.29mm、厚さ6.52mmである。114は長さ37.87mm、幅17.55mm、厚さ7.23mmで先端部には使用痕が見られない。

SD02出土土器は66など第Ⅱ様式の壺片も混入し、破片状態のものも多いが、その全体的な様相はSD01のそれとほとんど変化はない。

III区SD03（図10）

東西方向の溝で幅2.5m以上、検出長8m、深さ約0.4mである。埋土から弥生土器の他、土師器、須恵器、中国製青磁片なども出土し、混入が見られる。

III区SD03出土遺物（図15）

81・82は弥生時代中期ころの底部である。

81は壺の底部である。外面をタテヘラミガキし内面はナデ調整する。底径6.0cmである。

82は壺の底部と思われる。内外面の調整は磨滅のため不明である。底径11.4cmである。

このほか弥生時代に属す遺物として石包丁の破片が出土しているが、遺構検出中のものである。穿孔部を2か所残す小片である（図19-116）。弥生時代中期のものと思われるが所属時期は明確ではない。石材は結晶片岩で、現長27.5mm、現幅21.1mm、厚さ7.13mmである。

I区SD01出土の古墳時代遺物（図16）

SD01からは前述のとおり埋土最上層から古墳時代後期の須恵器類とごく少量の瓦器が出土している。

83は須恵器坏身で内外面をロクロナデし、底部の小範囲にロクロケズリを加える。口径12.8cm、器高4.3cmである。TK209型式のものである。

84も須恵器坏身で内外面をロクロナデし、底部にロクロケズリを加える。口径11.4cmである。底部は欠損するが推定の器高3.4cmである。TK209型式のものである。

85は壺体部で、外面の肩部に1条の沈線が巡る。外面はロクロナデ、内面の上半はロクロナデ、下半にやや粗いカキ目が残る。外面の一部にオリーブ色の自然釉が掛かる。

86は瓦器小皿で14世紀前半のものである。口縁部の内外面をヨコナデし、底部外面にユビオサエを加える。内面はナデの後ヘラ暗文を施す。口径9.0cm、器高1.9cmである。

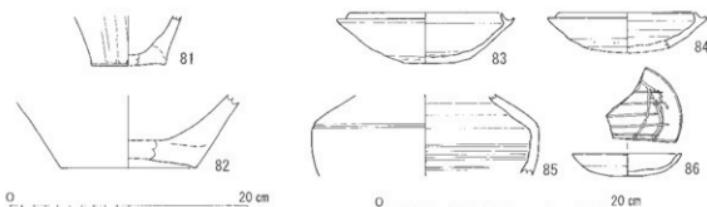


図15. III区SD03出土遺物実測図

図16. I区SD01出土古墳時代以降遺物実測図

3. II期（平安時代から江戸時代）の遺構と遺物（図4）

I区では、平安時代の土坑（溝か）と江戸時代の自然流路・土坑を検出し、II区では江戸時代の自然流路と井戸を検出した。

I区SK01（図5）

I区の南辺中央部で検出したが、江戸時代以降の流路や現代の建物のフーチングなどの搅乱によって破壊され、全体が明らかではない。土坑または溝になるものと推定される。規模も明確ではないが、長さ乃至径は2m以上になるものと思われる。平安時代の土師器、須恵器、獸齒（VI-2参照）などが出土した。なお、周辺の搅乱中からではあるが、縄文陶器の破片（105）も出土している。

I区SK01出土の遺物（図17）

87～90は土師器小皿である。

87は所謂コースター形のものである。内外面の調整は磨滅のため不明である。口径8.0cm、器高1.2cmである。

88は口縁部にヨコナデを加える。底部外面はナデ調整である。内面は磨滅のため不明である。口径8.0cm、器高1.8cmである。

89も口縁部にヨコナデを加える。底部外面にユビオサエを加える。内面はナデ調整である。口径9.0cm、器高1.4cmである。

90はやや大型のものである。口縁部にヨコナデを、底部外面にユビオサエを加える。内面はナデ調整である。口径15.0cm、器高1.9cmである。

91～93は瓦器である。

91は小皿で口縁部にヨコナデを施す。底部外面はユビオサエである。内面にやや雑なヘラ暗文が残る。口径9.6cm、器高1.5cmである。

92は和泉型の塊で、口縁部内外面にヨコナデを施す。体部外面はユビオサエ、ナデ調整で、内面はナデの後断続的なヘラ暗文を加える。12世紀末から13世紀初めごろのものである。口径16.4cmである。

93も塊である。口縁部外面にヨコナデ調整が残る。体部下半はユビオサエである。内面にヘラミガキを施すが、やや残りが悪く詳細不明である。口径13.0cmである。

94は中国製白磁碗の底部片である。外面及び高台内にロクロケズリを加える。高台は露胎である。見込にクシ描き文が6単位見られる。12世紀代のものとみられる。高台径5.6cmである。

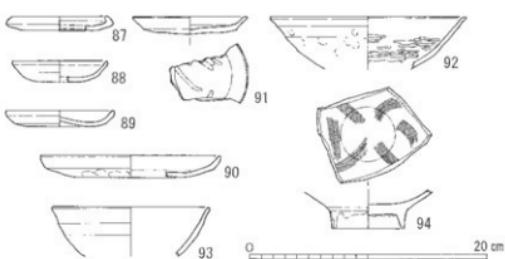


図17. I区SK01出土遺物実測図

平安時代から室町時代の出土遺物（図18・34）

現地は明確な遺物包含層は後世の建築工事などにより削平されていたが、近代以降の盛土層や後述する江戸時代以降の自然流路中から当該時期の遺物が出土している。

95は土師器壺である。口縁端部の内側を肥厚させる。内面はヨコナデであるが、外面は磨滅のため調整不明である。口径16.2cmである。平安時代、9世紀代と思われる。

96は黒色土器壺の底部で内面のみ黒色のA類である。内面はヘラミガキが残るが、外面は磨滅のため調整不明である。底径7.8cmである。

97～104は須恵器である。

97は東播系の壺である。内外面をロクロナデで調整する。口径11.4cmである。

98も東播系の壺である。内外面をロクロナデで調整する。口径15.8cmである。

99は高台付壺である。高台は貼付け成形である。内外面をロクロナデで調整する。底径6.0cmである。

100は鉢と思われる。内外面をロクロナデで調整する。口縁端部は変色し重ね焼きされたことがわかる。口径14.0cmである。

101は近世の自然流路から出土した東播系の捏鉢で、口縁端部に面を作る。内外面をロクロナデで調整する。11世紀代のものである。

102は高台付壺の底部片であるが、内面は平滑で、墨痕は残らないが転用硯と考えられる。高台は貼付け成形である。底部外面に糸切り痕を残す。内外面をロクロナデで調整する。底径6.6cmである。

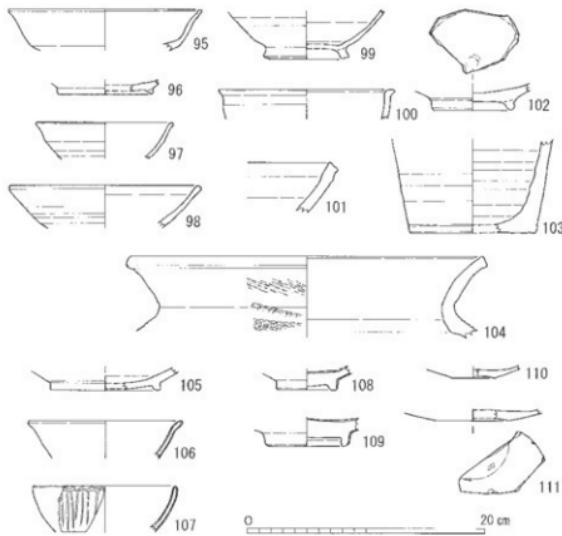


図18. 遺構外出土遺物実測図

103も近世の自然流路出土の壺底部で、内外面をロクロナデで調整し、底部外面に糸切り痕を残す。底径10.4cmである。平安時代のものと思われる。

104は口径29.6cmの甕の口縁部である。体部外面に格子タタキ痕がある。内外面をロクロナデで調整するが、口縁部外面にもタタキ痕が残る。

105は緑釉陶器の壺底部である。胎土は須恵質で内外全面に施釉する。釉色はグレイミのオリーブグリーン色である。体部外面と底部外面をロクロケズリする。底径9.2cmである。

106~109は中国製青磁である。

106は外反口縁皿の口縁部と思われる。全面に明オリーブ灰色の釉を施す。15世紀と考えられる。口径12.8cmである。

107は碗口縁部で全面に施釉し、外面に細蓮弁文が刻まれる。釉色はオリーブ灰色である。15世紀後半のものと思われる。口径12.0cmである。

108は碗の底部片で高台内はロクロケズリで、露胎である。釉色は明オリーブ灰色である。底径4.0cmである。

109も碗の底部片で高台内はロクロケズリで、露胎である。釉色は灰オリーブ色である。底径6.0cmである。

110は中国製白磁の碁笥底の底部片である。底部外面は露胎、それ以外は全面施釉で、釉には貫入がある。底径3.6cmである。

111は磁器の皿で全面施釉され、碁笥底の外面に砂目が2ヶ所残る。釉色は灰オリーブ色である。色調などの特徴から越州窯青磁の可能性があるものである。底径6.0cmである。

図34~185・186は平安時代末の軒丸・軒平瓦である。II区の近世以降の自然流路から出土した。文様・成形手法からいずれも東播系の瓦と判断される。

185は2片に分かれるが単弁六葉蓮華文軒丸瓦で、弁には子葉が見られる。内区の中房は凸線の輪郭をもち、内部に蓮子が1個残るが、本来の蓮子数は不明である。周縁の側面に粗いヘラケズリを加える。瓦当裏面はナデ調整し、丸瓦との接合部が一部残る。

186は瓦当の左端の一部を残す破片である。唐草文が残るが残存状態が悪く全形は不明である。裏面に平瓦との接合痕が残る。

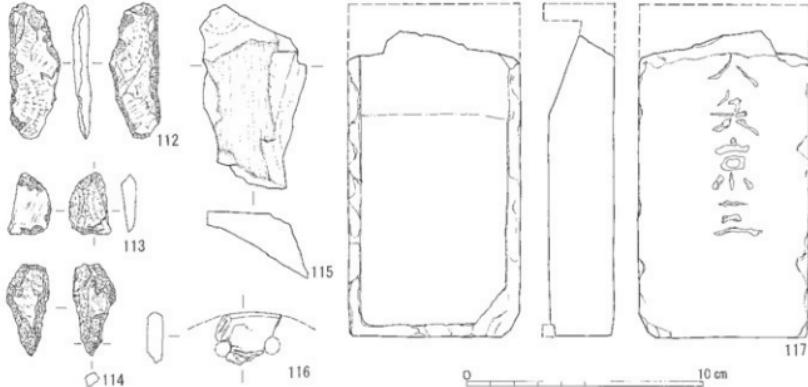


図19. 石器・石製品実測図

I 区自然流路・SK02（図5）

I区の自然流路は南辺中央部で弥生時代中期の溝、平安時代の土坑（溝）を切る状態で検出した、東西方向の江戸時代のものである。検出長約13m、深さ約0.7mである。

SK02は径2.5m、深さ約0.7mの不整円形土坑で性格不明である。

自然流路からは近世の陶磁器類、土師器、須恵器などが出土した。SK02からはごく少量の伊万里片のみ出土した。

II 区自然流路・SE01（図10・20）

II区の東西方向の自然流路で、I区で検出した自然流路と同一のものと考えられる。調査区南辺に沿って東西方向に走る。北肩は検出されたが、南肩は調査区外となっている。溝肩の一部に杭を打っており人の手が加わっていることが確認された。埋土中から近世の陶磁器類が出土した。検出長約20m、深さ約0.6m、幅3m以上である。

SE01は上面に自然石による2段の石組を持つ内径約0.7mの井戸で、井戸側及び水溜は円筒形となるよう幅10cm前後の継板で構築されている。井戸側内部の埋土及び掘形から近世陶磁器の小片が少量出土した。深さは検出面から約2mまで確認したが、崩壊の危険があるためこれ以下は掘削していない。掘形の径は上面で約1.9mである。

江戸時代以降の出土遺物（図19・21・22）

近世の遺物は自然流路や井戸、土坑などから出土している。以下一部近代のものを含むと思われるが石器、金属器及び磁器類に対し説明を加える。

117は石硯で砂岩系の石材で作られている。硯背に「(大) 矢京三」の銘がやや粗く釿描きされている。現長12.8cm、幅7.8cm、厚さ2.3cmである。近世以降の盛土中から出土した。

118は中国明の洪武通寶で1368年初鋤である。直径21.52mmである。

119・120は江戸時代の寛永通宝である。119は1636年初鋤の古寛永で、直径25.65mmである。120は1697年初鋤の新寛永で、直径23.49mmである。

121はX線写真でも錢文不明であったが、四角の輪郭から1784年初鋤の仙台通寶の可能性がある。ただし残存状態が悪く加工錢の可能性も否定できない。一辺22.39mmである。出土した錢貨は4点とも盛土や搅乱土層中の出土で、遺構に伴うものではない。

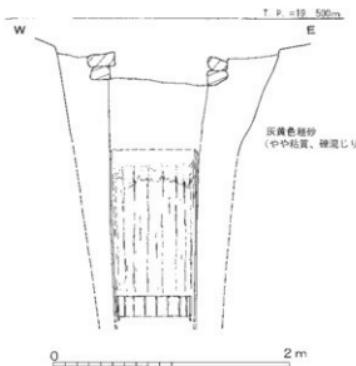


図20. II区SE01断面図

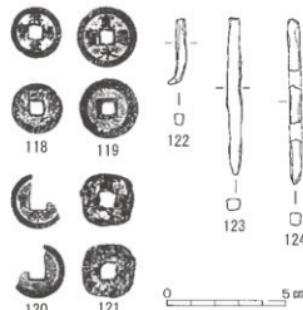


図21. 金属器実測図

122～124は断面四角形の鉄釘で、122は先端が釣り針状に湾曲している。

122は現長26.86mm、一辺3.68mm×4.43mm、123は現長65.42mm、一辺4.81mm×4.19mm、124は復元長69.17mm、一辺4.29mm×4.07mmである。いずれも遺構検出中の出土で時期は特定できない。

125～127・129は内湾する口縁部を持つ肥前系磁器の丸碗である。

125は外面上に梅花文、高台内面に渦福を描く。高台疊付の釉を拭き取り、露胎とする。口径10.2cm、器高5.2cmである。

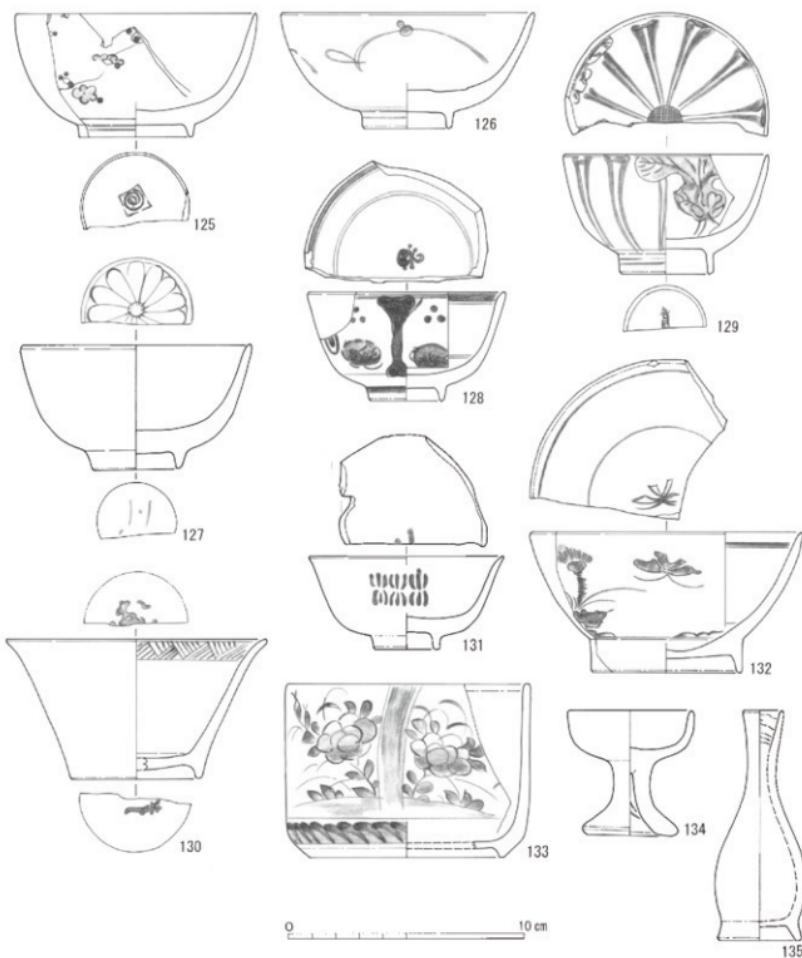


図22 江戸時代遺物実測図

126は外面に退化した草花文を描く。高台墨付を釉剥ぎし露胎とする。内面見込み部は蛇の目釉剥ぎとする。口径10.6cm、器高4.9cmである。

127は外面に青磁釉を施す丸碗で、見込みに菊花文、高台内に判読不可の銘を持つ。内面及び高台内は透明釉を施す。高台墨付の釉を拭き取り、露胎とする。口径9.6cm、器高5.3cmである。

128は近世～近代の瀬戸美濃窯製品と思われる磁器丸碗である。外面に手書き文様、見込みに不明文様を描く。口径8.2cm、器高4.6cmである。

129はII区の煙道7から出土した肥前系磁器の小型鉢で、見込みに蓮弁文、外面に蓮弁文と蓮葉を描き、蓮葉は一部口縁部内面に描かれる。高台墨付を釉剥ぎし露胎とする。高台内に銘を持つが文字は不明である。口径8.6cm、器高5.1cmである。

130は外面青磁釉の肥前系磁器の小型鉢で、見込みにコンニャク印の五弁花文、口縁端部内面に楕円文、高台内に手書きの推定「製」字が残る。内面の一部に釉ギレが見られる。高台墨付を釉剥ぎし露胎とする。口径11.0cm、器高5.9cmである。

131は磁器の端反碗である。128と共に近世～近代の瀬戸美濃窯製品と思われ、明治でも一桁台に属す可能性がある。外面に不明文字状の文様、内面にも文様があるが、全形は判らない。高台墨付を釉剥ぎし露胎とする。口径8.2cm、器高3.9cmである。

132は肥前系磁器の広東碗で江戸時代後期～末ごろと考えられる。見込みに蝶文、外面に草花と蝶の模様を描く。全面を施釉した後、高台墨付を釉剥ぎし露胎とする。口径11.4cm、器高5.9cmである。

133は肥前系磁器の蓋物である。外面に手書きの草花文、高台脇に波状文を描く。口縁端部上面と内面は露胎とする。高台は露胎でそれ以外の全面を施釉する。釉にはピンホールが見られる。口径10.0cm、器高7.3cmである。

134は肥前系磁器の仏飯具で脚部内面に渦状の成形痕を残す。坏部内面は透明釉で、脚部は露胎である。外面に瑠璃釉を施す。口径5.2cm、器高5.3cmである。

135も肥前系磁器の御神酒徳利で、口縁部内面に渦状の成形痕が見られる。高台部外面、底部外面はロクロケズリし露胎となる。口径1.6cm、器高9.7cmである。高台以外の外面と口縁端部内面に瑠璃釉を施す。

以上129以外は江戸時代以降の整地層中からの出土である。

4. III期（明治時代以降）の遺構と遺物（図23）

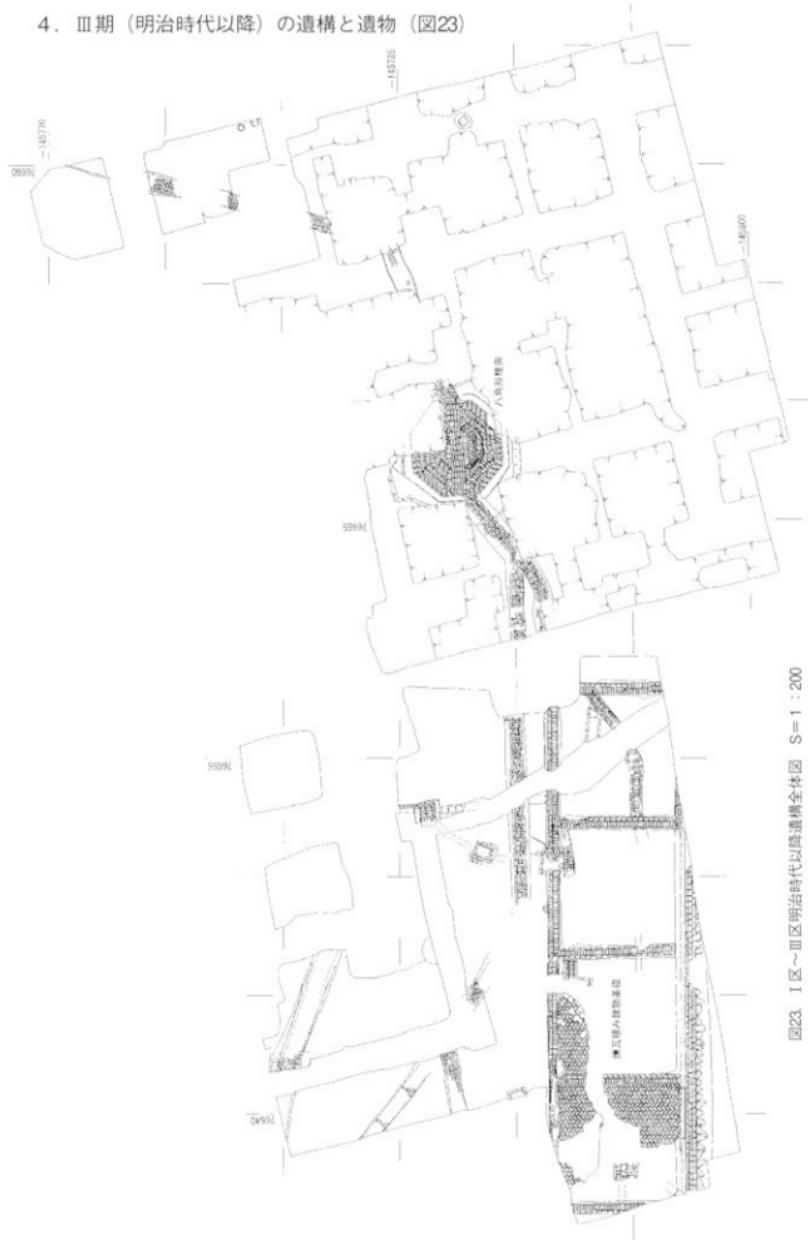


図23. I区～III区明治時代以降遺構全体図 S=1:200



图24. I区住宅、街道情况图 S=1:125

I 区では明治時代以降の八角形煙突の煉瓦積基底部と煙道を、II 区では明治時代以降の煉瓦積建物の基礎と煙道を検出した。

I 区の明治時代以降の八角形煙突・煙道（図24・25）

I 区北半部で検出した基底部平面形が八角形の煉瓦積煙突で最下段から7段分が残存していた。径4m、高さは現存約0.8mである。八角形の相対する2辺から東西両方に2本の煙道が延びる。煙突はまずセメント地業を行い、やや雑然と上下2段に煉瓦を敷いた後、その上に整然と煉瓦を配置し、八角形になるよう構築されている。組積法はオランダ積である。煉瓦は大半が普通の形状のものだが、コーナー部には2種類の五角形の煉瓦を組み合わせて使用している。煙突部の組積に際しては目地にモルタルを使用するが、煙道部には使用せず積み上げただけの構造を採っている。煙道の断面形は後述の煙道7以外は方形を呈する。

東の煙道9はI区北東隅にまで伸び全長約20mを測る。西の煙道は途中2本に分岐し（煙道3・4）II区に繋がる。煙道に使用される煉瓦は、壁部は基本的に普通煉瓦であるが、底面のそれは1コーナーが曲線を描く形状のものが目立ち、他の何らかの建築資材を転用したものと思われる。

II 区の明治時代以降の煉瓦積建物・煙道（図23・26～28）

II区南半部から東西方向に伸びる煉瓦積の建物の基礎を検出した。東西22.5m、南北6mで内部は約5mおきに南北方向の基礎（地中梁）があり、それにも2～3段の煉瓦積みが残っていたことから見て、建物内部は壁によって区切られていた可能性がある。

綾糸状に煉瓦を敷いた床面の一部が、西端近くで残存していた。この床面に使用された煉瓦は通常の厚みではなく7.2cmあり、使用による摩滅を考慮し規格外のものを採用している。南辺を除く基礎部は厚さ40cmほどのモルタル上に3段の煉瓦を積んで構築される。

南辺はコンクリート地業の上に3段の煉瓦を積み、その上に4段の切石積の石垣を構築している。組積法はイギリス（オランダ）積である。この切石上に煉瓦積が2段分残る箇所があり、切石の上は煉瓦壁が立ち上がっていたものと考えられる。

石垣外面の下には東西方向に煉瓦を3列に敷き並べ、中央列の煉瓦を低くして断面を浅いU字形として雨落ち溝としている。雨落ち溝は切石積の石垣の下辺の高さに設置されていた。この雨落ち溝の使用煉瓦もやや特殊で幅15.5cm、長さ24.5cmを測るものである。溝の南辺は三角形の割石を並べて補強し、入念な作りとなっている。この割石部分も上部に石垣が何段か構築されていたものと推定され、その上面が南側の東西方向の道路面のレベルと一致していたものと推定される。

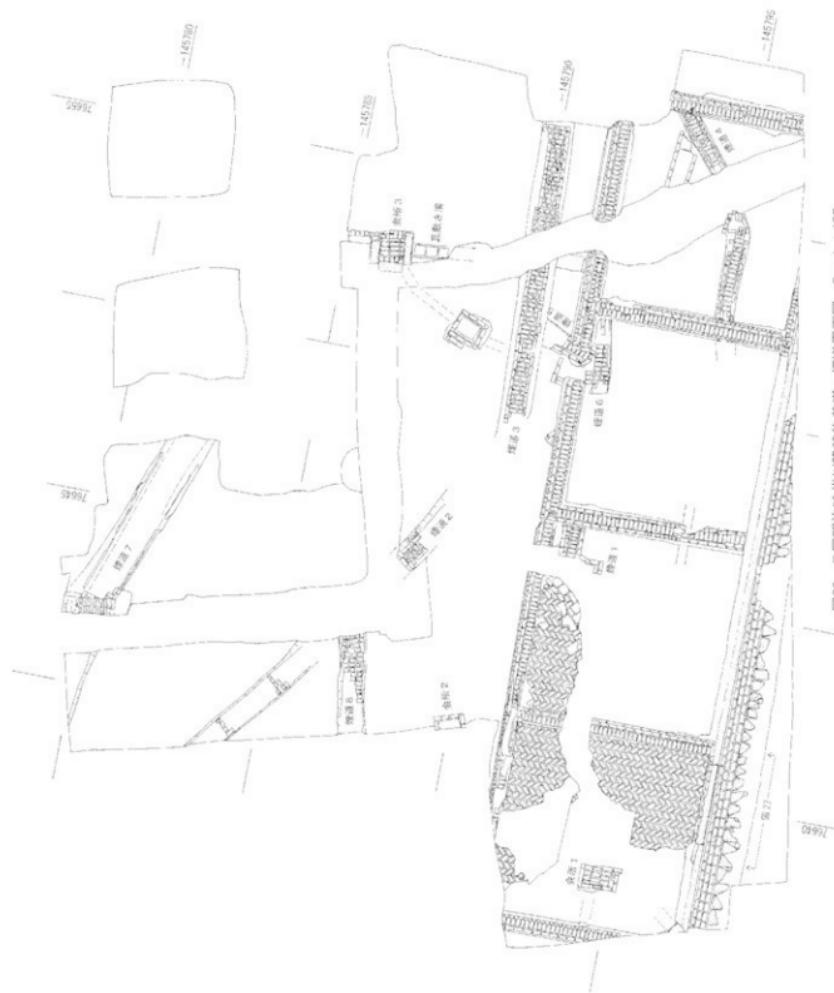
建物床面下の内部からは煉瓦積の煙道などを検出したが、建物と同時期のものや建物基礎構築以前のものもあり、複数回の煙道の作り替えが確認された。

煙道7は建物の北側（II区西北部）で検出したもので、その一部を残すのみだが他の煙道に比べ大型で、目地にモルタルを使用して断面形が円形となるよう煉瓦で構築している。内径0.6mを測る。後世のコンクリート製建物基礎と重なる部分のみ煉瓦が残存していた。それ以外の煙道部分はモルタルを一部残して破壊されていた。この煙道に使用された煉瓦は刻印などから判断して、他よりやや古い傾向のものが含まれ、明治20年代末～30年代前半のものと見られる。構造も上記のように他と相違しており、当工場が斐浜社、直木構造製造所と呼ばれていた時期の可能性がある。煙道7が伸びる方向には八角形煙突があり、この煙道が当初のものである可能性も考えられる。



图25. I区八角形窑平面图 S=1:50

图26. II区明治时代以降建物基础・管道平面图 S=1:125



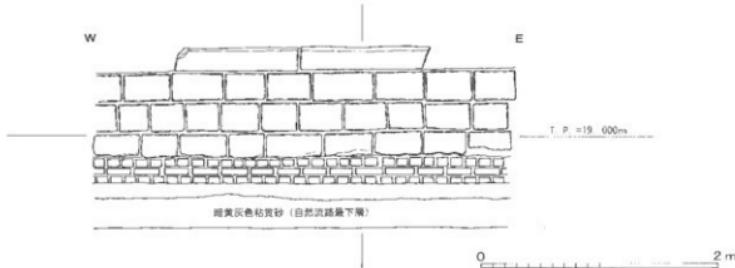


図27. II区明治時代以降建物基礎立面図（部分）

II区で検出した、煙道7以外の煙道および煉瓦積の会所と煉瓦積建物との関係は、煙道1・6が建物以前、煙道4・5と会所1は建物と同時期である。煙道3はI区で煙道4と分岐するものであることから煙道4と同様、建物と同時期と考えられる。これ以外の煙道・会所については建物との切り合い関係を持たず構築の前後は不明である。

また会所3によって破壊される南北方向の溝は、煙道3および煉瓦積建物の建築以前のものである。溝の性格は判然としないが、南北に主軸を持つ建物などの構築物に伴う雨落ち溝とも考えられる。この溝には底に平瓦が敷かれ、平瓦(195)にはクシ描きの菱形文と狹端面に刻印が見られる。以下遺構の変遷をまとめると、

八角形煙突 → 瓦敷き溝 → 煉瓦積み基礎建物

煙道7 煙道1・6 煙道3・4・5、会所1

と推定される。

明治時代以降の出土遺物（図29～35）

近代以降の遺物も一部煙道内の埋土中から出土したものがあるが、大半は整地層中から検出したものである。136～150及び153は磁器類、151・152・154は陶器、155は磁器質のタイルである。141及び144が煙道7の埋土中出土である。

136は外面全面および口縁部内面に型紙摺絵の桜文を持つ端反碗₍₁₎である。近代の瀬戸美濃窯製品と思われる。型紙摺絵は明治10年代半ば以降の技法であり、碗の形状と合わせて、その頃のものと考えられる。口径10.8cmである。

137～139は器高の低い平碗で、140から143にかけ器高は徐々に高く変化している。

137は型紙摺絵技法の丸形容の碗で、外面を微塵唐草文、内面口縁部に環珞文を描く。高台盤付を釉剥ぎし露胎とし、これ以外を全面施釉する。近代の瀬戸美濃窯製品である。口径11.6cm、器高4.7cmである。

138は平形碗で銅版転写技法の菊花文を持つ。高台盤付を釉剥ぎし露胎とし、これ以外を全面施釉する。口径10.0cm、器高4.2cmである。

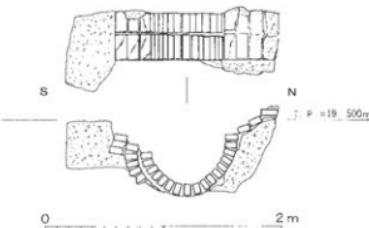


図28. II区煙道7平面・立面図

139も平形碗で外面の菊花部分はシルクスクリーンによるものである。高台豊付を軸拭き取りで露胎とし、これ以外を全面施釉する。高台内の一帯に砂が付着する。口径10.0cm、器高4.1cmである。

140は深形でもやや平形に近い形態の碗である。高台が僅かに外方に開く。外面に暗い緑色釉を施す。高台豊付を軸剥ぎし露胎とする。口径11.0cm、器高4.8cmである。

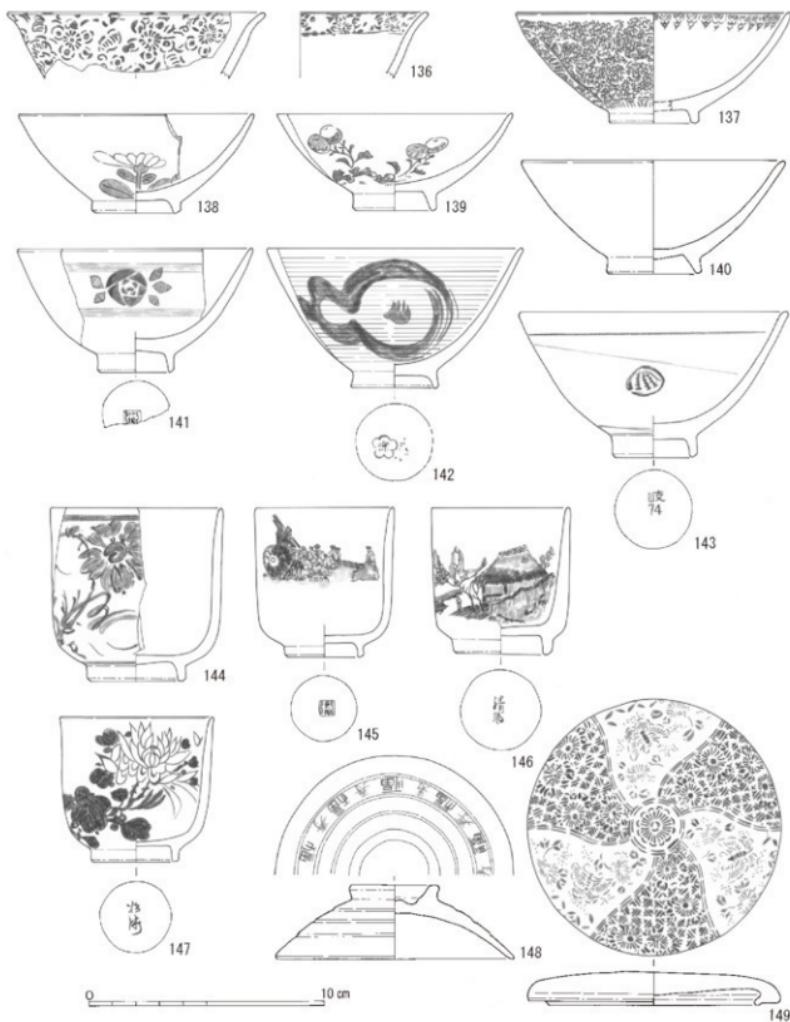


図29. 近代以降遺物実測図（1）

141は深形碗で薔薇の模様全体がゴム印で、透明釉の上に絵付けされている。高台内の銘も釉上彩で「竹陶」である。ゴム印は大正中期から昭和初期にかけ主流となった技法である。高台疊付を釉剥ぎし露胎とする。口径9.8cm、器高5.2cmである。

142も深形碗で外面に手描きの瓢箪を描く。高台疊付を釉剥ぎし露胎とし、これ以外を全面施釉する。高台内に桜の輪郭内に「深」の銘があり、その右側に文字があったものと思われるが殆ど消えて判読できない。高台内に砂が僅かに付着する。口径10.8cm、器高5.9cmである。

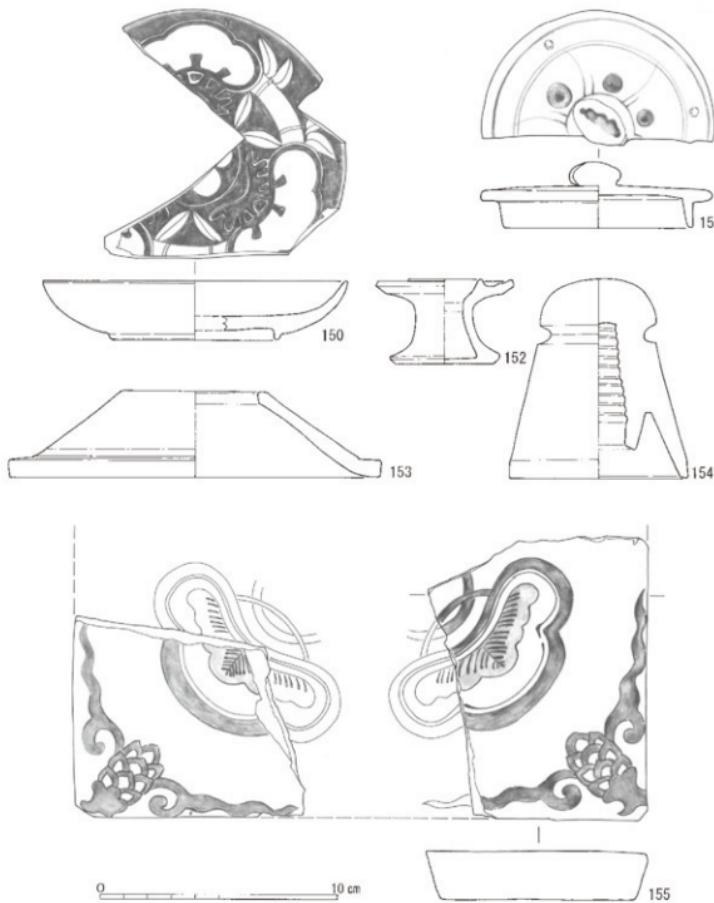


図30. 近代以降遺物実測図（2）

143も深形碗で、外面には蛤文があるがゴム印か手描きか判断できない。高台内に「岐74」の統制記号が見られ、142と同時期のものと見られる。高台疊付を釉剥ぎし露胎とし、これ以外を全面施釉する。口径11.2cm、器高6.2cmである。

144は湯呑茶碗（長筒丸腰湯飲）で外面は手描きで菊花を描く。口径7.2cm、器高7.3cmである。

145も湯呑茶碗（長筒丸腰湯飲）である。外面にシルクスクリーンで野砲と砲兵・砲手合わせて9人を描き、高台内に「東陶」銘を持つ。高台疊付を釉剥ぎし露胎とし、これ以外を全面施釉する。戦時中のものである。東洋陶器株式会社は1917年に北九州市小倉で設立された企業である。口径5.8cm、器高6.3cmである。

146も湯呑茶碗（長筒形坯）だが口縁部が直立氣味のものである。外面にシルクスクリーンで草葺屋根の民家と樹木の下に佇む人物を描く。高台疊付を釉剥ぎし露胎とし、これ以外を全面施釉する。昭和期と考えられるが時期は断定できない。口径5.8cm、器高6.2cmである。

147も湯呑茶碗（長筒丸腰湯飲）でやや端反りのものである。外面に手書きの菊花文を写実的に描く。菊花部の釉は盛り上がる。高台内に「松崎」銘を入れている。高台疊付を釉剥ぎし露胎とし、これ以外を全面施釉する。口径6.4cm、器高6.1cmである。

148は蓋で外面に手描きで呉須の「福」と朱彩の「寿」字を交互に配置している。摘み部上端面を釉剥ぎし露胎とし、これ以外を全面施釉する。口径10.0cm、器高3.1cmである。

149は段重蓋で型紙摺絵技法により菊花蝶文捺り文を描く。口縁部は露胎とする。近代の瀬戸美濃窯製品と思われる。口径8.6cm、器高1.4cmである。

150は銅版転写により松竹文を円形に描く皿で、中心の模様は梅とも考えられるが、大半欠損しており不明である。高台疊付を釉剥ぎし露胎とし、これ以外を全面施釉する。釉にピンホールが見られる。口径12.8cm、器高2.5cmである。

151は土瓶蓋である。鉄絵録彩で、上面にトチ痕が2ヶ所残る。上面は淡黄色釉、内面は錆釉を施す。口径7.6cm、器高2.8cmである。

152は灰釉燈明台である。底部外面をロクロケズリし露胎とする。底面以外を施釉する。口径3.0cm、器高3.6cmである。

153は白磁の電気傘である。上端部及び裾部上面は露胎とし、それ以外は全面透明釉を施す。口径15.6cm、器高3.7cmである。

154は陶器製の碍子で内面のネジ部分を除き黄褐色釉が掛かる。体部外面にロクロケズリ痕が見られる。口径7.4cm、器高8.5cmである。

155は磁器製のタイル₍₂₎で上面に手描きで笠松文、松毬などを描いている。呉須のダミ部にはムラがある。2片に割れ接合しないが、一辺24cm（8寸角）に復元できるものである。裏面は強い板ナデ（ケズリ）である。底面以外を施釉するが、釉に貫入、ピンホールが見られる。厚さ2.05cmである。

156～161はガラス製品₍₃₎である。156・157は酒類、158・160は化粧品関係、159はインク瓶、161は薬品関係と思われる。

156は透明で、口内径22.84mmである。両側面に成形痕の縦凸線がある。

157は暗褐色で、口内径16.70mmである。両側面に成形痕の縦凸線がある。

158は緑色のガラス製でII区煙道7の埋土から出土した。口径31.23mm、器高3.6cm、胴径3.8cmである。



図31. ガラス製品実測図

159は底部外面の「TRADE HIRO MARK」から中国製のインク容器と考えられる。口内径31.38mm、器高4.6cm、胴径4.7cmである。

160は乳白ガラス製で底部外面に「リリス」銘がある。口内径54.40mm、器高7.2cm、胴径6.8cmである。

161は明黄褐色で、両側面に成形痕の縦凸線があるが、体部と口縁部で位置がずれておりやや変則的な作りである。側面に「K.H.L.」銘がある。口内径16.58mm、器高7.7cm、胴長径5.4cm、胴短径2.75cmである。

162～184は近代以降の煉瓦及び耐火煉瓦⁽⁴⁾である。162・163・165はI区の八角形煙突、166～168はI区の西側煙道、169～171はI区の煙道4、172はII区の煙道1、173はII区の煙道5、174・175はII区の会所2、176・177及び179・180はII区の煙道7、181はII区の煉瓦積建物の床面使用煉瓦、182は同じくII区の煉瓦積建物の南側雨落ち溝の使用煉瓦である。

上記以外の164・178・183・184は、近代以降の盛土や遺構検出中に出土したものだが、164はI区の八角形煙突の使用煉瓦と同じものである。図32・33に掲げたものの内163・183・184が耐火煉瓦である。

162は上下面の判別が困難であるが、片面に社印或いは責任印を示すヘラ状工具による圧痕がある。長さ22.1cm、幅10.6cm、厚さ6.3cmである。

163は三重丸の刻印がある耐火煉瓦であるが、製造所は不明である。長さ22.9cm、幅10.8cm、厚さ6.2cmである。

164は平面五角形の煉瓦で、他の普通煉瓦と同様に下面に長軸方向の凹線状圧痕がある。長さ21.1cm、幅14.0cm、厚さ5.5cmである。刻印は見られない。

165は普通煉瓦の一短辺を三角形に切り落としたような形状を呈するもので、平面五角形を呈する。164と同じくI区の八角形煙突のコーナー部分に使用された特種なものである。長さ24.5cm、幅10.7cm、厚さ6.2cmである。刻印がないことも164と共通する。

166は上面に推定擗煉瓦の刻印を打ち、社印は中央部に「一」印を付加するものである。下面是無印で、長軸方向の凹線状圧痕・段がある。長さ23.6cm、幅11.5cm、厚さ5.6cmである。

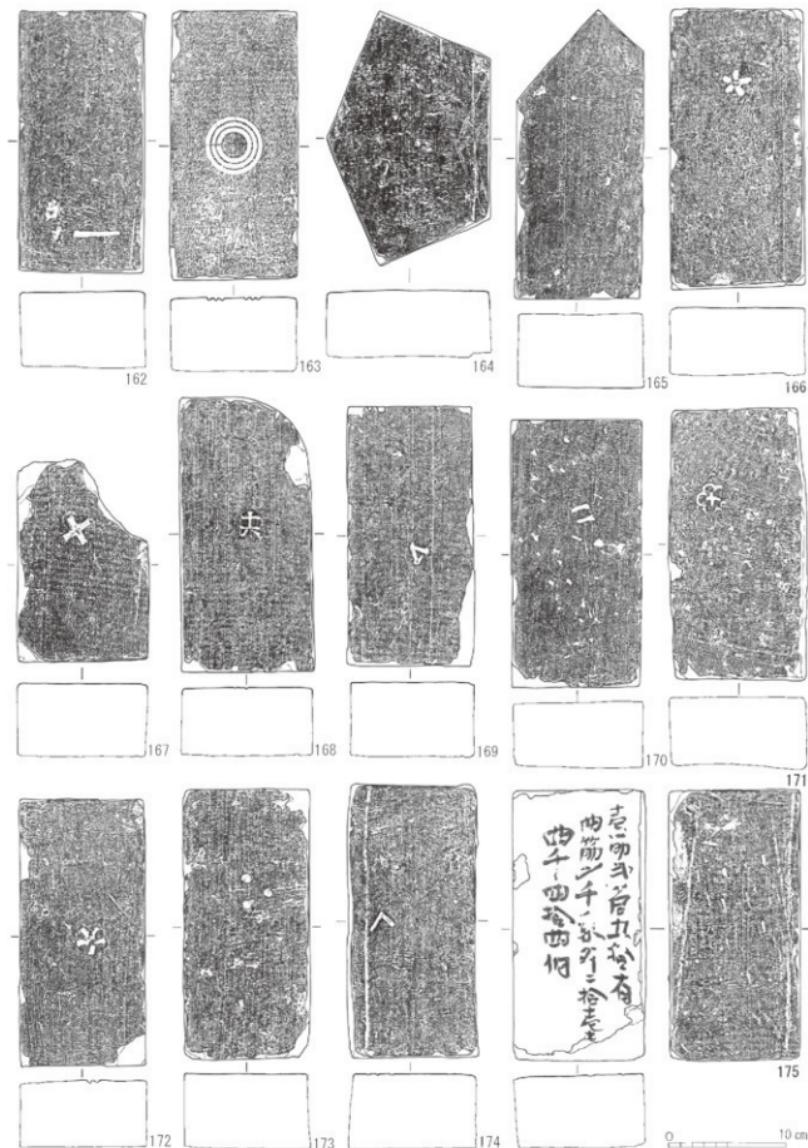


图32 煉瓦实测图 (1)

167は上面に岸和田煉瓦の社印「+」を打つ。下面の刻印の有無は不明である。下面に長軸方向の凹線状圧痕がある。現長17.1cm、幅11.1cm、厚さ6.1cmである。

168は普通煉瓦の1コーナーを丸く切り落としたような形状を呈す。主にI区の煙道底面に使用されていたもので上面に「十六」の刻印がある。下面是無印で長軸方向の凹線状圧痕があるのは他の普通煉瓦と異ならない。このタイプの煉瓦は確認できるすべてが「十六」の刻印を持っており、特定の企業あるいは工場での生産と思われる。長さ23.2cm、幅11.2cm、厚さ5.7cmである。

169は上面に「ム」の刻印を打つ。下面是無印で長軸方向の凹線状圧痕がある。長さ22.2cm、幅10.7cm、厚さ6.3cmである。

170は「=」の刻印を打つ。下面是無印で長軸方向の凹線状圧痕がある。長さ22.8cm、幅11.1cm、厚さ5.5cmである。

171は機械成形煉瓦である。今回の出土煉瓦中、機械成形煉瓦で刻印を確認したのはこれのみである。刻印は片面のみで、五弁の「桜花」文の中央に「ナ」の印である。長さ23.0cm、幅11.8cm、厚さ5.7cmである。

172は166と同じく上面に中央部に「一」印がある推定堺煉瓦の刻印を打つ。下面是無印で、長軸方向の凹線状圧痕がある。長さ22.5cm、幅10.6cm、厚さ5.6cmである。刻印は両者で異なり、打つ場所も相違する。

173は上下両面に三角形に配した浅い円形の窪みがあるものである。これも社印或いは責任印と思われる。長さ22.7cm、幅10.7cm、厚さ6.3cmである。

174は下面に「V」の刻印がある。上面はモルタルが付着し刻印の有無は不明である。下面是長軸方向の凹線状圧痕がある。長さ23.0cm、幅10.8cm、厚さ6.3cmである。

175は上面に建築に係る煉瓦の数量の計算をしたと思われる墨書きがあるもので、建築工事の実態を知る上で重要な史料となるものと思われる。上面に刻印はなく、下面も無印で長軸方向の凹線状圧痕がある。長さ22.8cm、幅11.3cm、厚さ6.0cmである。

毫筋式百五拾有
四筋ニ千□外ニ拾毫□
四千四拾四個

「煉瓦の墨書き文字（实物は縦書き）」

176・177及び179・180は前述のとおり内径約0.6mの断面円形の煙道7に使用されていた煉瓦である。使用煉瓦から他の煙道より時期的に遅る可能性を持つ。

176は上下面に大阪窯業の刻印を打つものである。下面には長軸方向の凹線状圧痕がある。長さ23.4cm、幅11.1cm、厚さ6.2cmである。

177は上下面に推定貝塚煉瓦の刻印「#」を打つものである。下面には長軸方向の凹線状圧痕がある。現長22.6cm、幅11.0cm、厚さ5.9cmである。

179は上下面に大阪窯業の刻印を打つものであるが、所謂責任印として「ヤ」及び大小2本の釘圧痕を付加する。下面には長軸方向の凹線状圧痕がある。長さ22.8cm、幅11.1cm、厚さ6.0cmである。

180も179と同じ大阪窯業の刻印を打つものであるが、社印は両者で異なり、責任印も1本の釘圧痕のみとなっている。長さ23.0cm、幅11.3cm、厚さ6.1cmである。

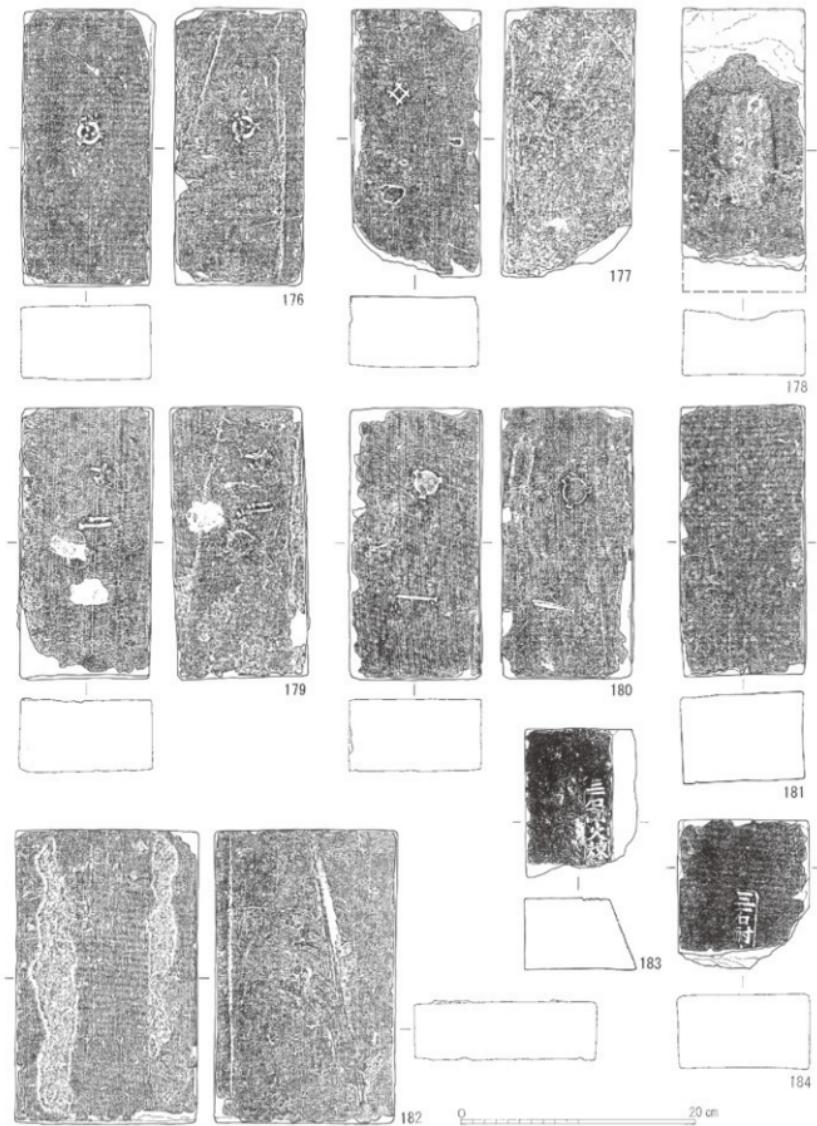


图33. 煉瓦実測図 (2)

178は窪み煉瓦である。小口面に残る粘土皺の状態から窪みは上面に施されていることがわかる。下面の長軸方向の凹線状圧痕については見られない。現長21.5cm、幅10.4cm、厚さ4.6cmである。

181はII区の煉瓦積建物の床面に使用されていた煉瓦で、工場の床という使用頻度の激しさや燐寸製造機具の重量などを考慮してか通常の煉瓦より約1cm厚く造られている。上下面に刻印は見られない。下面には長軸方向の凹線状圧痕がある。長さ22.6cm、幅10.7cm、厚さ7.3cmである。

182はII区の煉瓦積建物の南側雨落ち溝の使用煉瓦で、181と同様特別に製作されたものと思われる。長さ、幅共に普通煉瓦より大きく、厚みが薄いものとなっている。上下面に刻印は見られないのも前者と共通する。下面には長軸方向の凹線状圧痕がある。長さ24.8cm、幅15.6cm、厚さ4.8cmである。

183は耐火煉瓦で「三石耐火煉瓦株式会社」銘がある。右側が斜面になっているが、この面にも被熱が見られる。現長12.6cm、幅9.5cm、厚さ5.9cmである。

184も183と同じく「三石耐火煉瓦株式会社」銘がある。現長12.6cm、幅11.2cm、厚さ6.1cmである。

187～198は明治時代以降の瓦で、199～210は確認した主な刻印を集めたものである。

187は鬼瓦の左上部の破片で側面に「淡路 中山為吉 津井」銘がある。上縁部裏面に緩やかな抉り部が残る。厚さ5.2cmである。

188は江戸時代以来の唐草の瓦当文様を持つ軒平瓦で、右外縁部に「明石 | 那月」銘がある。瓦当部の接合は顎貼り付け手法である。188は平瓦部が欠損し凸面の状況を知りえないが、他の個体のものに凸面の一部にクシ書き直線文を残すものがある。ただし後述するような菱形文があるかは不明である。

189は無文の軒平瓦で、瓦当右上隅に三角形の斜面を作る特徴がある。瓦当右寄りに「明石 | 那月」銘がある。瓦当部の接合は顎貼り付け手法である。

190も無文の軒平瓦で、これも瓦当右上隅に三角形の斜面を作る特徴を持つ。瓦当右寄りに「明石 舞子 | 瓦弥」銘がある。瓦当部の接合は顎貼り付け手法である。

191は190と同じ銘を有する軒平瓦で、凸面のクシ目パターンを知りうる資料である。クシ目は10本の原体で狹端に近く菱形文とほぼ中央付近に直線文を描く。また狹端に近い位置に釘穴を穿つ。全長27.5cmである。

192も無文の軒平瓦で、瓦当中央に「別府 | 小林製」銘を持つ。瓦当部の接合は顎貼り付け手法である。

193も無文の軒平瓦で、瓦当中央に「明石 | 製造」銘を持つ。凸面の一部が残存しており192と同様のクシ目パターンが見られるが、狹端近くにもう一帯の直線文を持つか否かは不明である。

194も無文の軒平瓦で、瓦当中央付近に「明石 山田 | 瓦浅」銘を持つ。また189・190と同様、瓦当右上隅に三角形の斜面を作る特徴を持つ。これも凸面のクシ目パターンを知りうる資料で、クシ目は14本の原体で狹端に近く菱形文とほぼ中央付近に直線文を描く。釘穴の有無は不明である。瓦当部の接合は顎貼り付け手法である。全長27.7cmである。

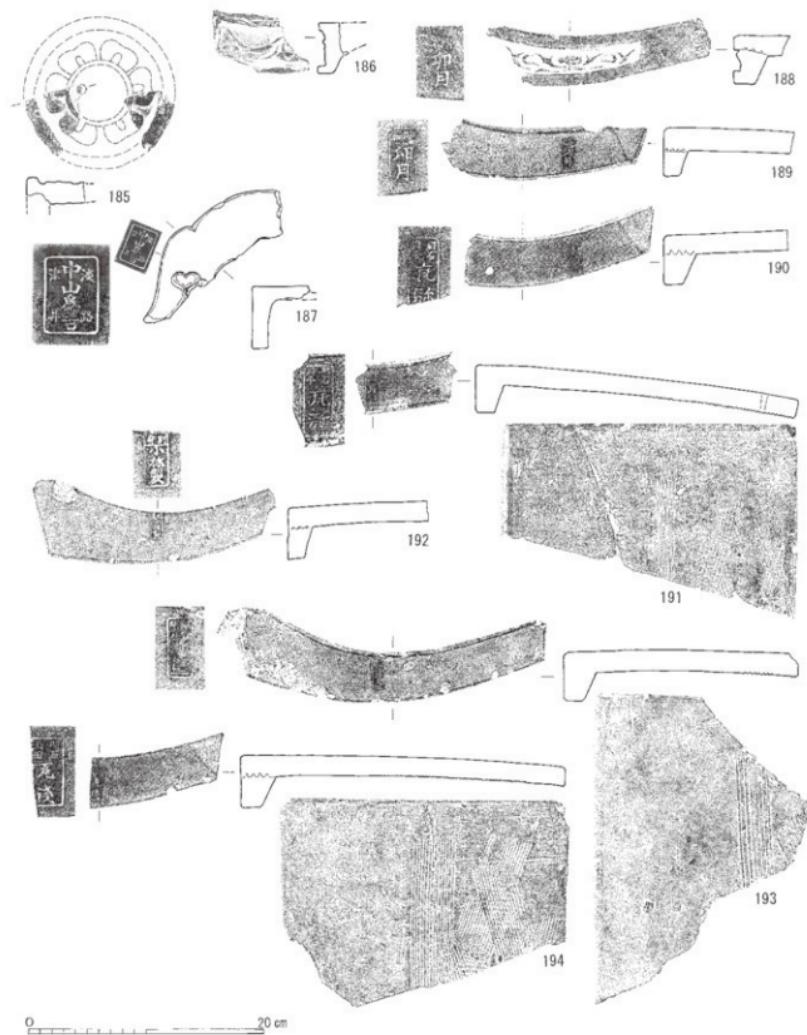


图34. 瓦類実測図（1）

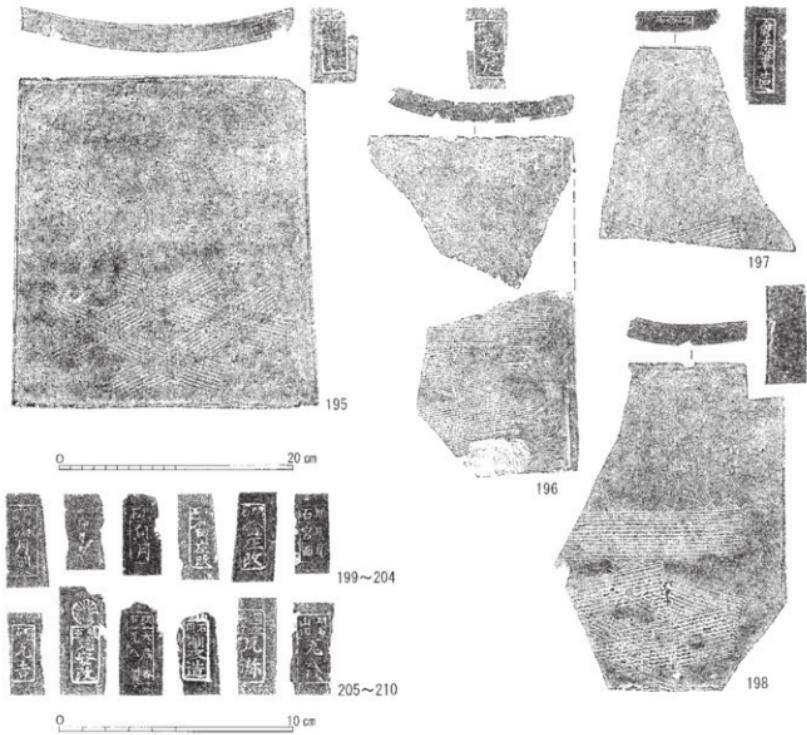


図35. 瓦類実測図 (2)

195は会所3によって破壊される南北方向の溝の底に敷かれていたものである(図26の「瓦敷き溝」)。完形の平瓦で凸面に菱形文を9本のクシ原体で描く。確認できる他の文様の多くが「菱形文と1帯の直線文」をパターンとしているのに対し、より省略した文様となっている。文様の位置は広端に近い範囲である。狭端面に「淡路 □□ | 橋本製」銘を持つ。全長27.6cm、広端幅25.9cm、狭広端幅23.5cmである。

196は2片に割れるが、側縁や胎土の特徴から同一個体と考えられる。凸面の広端に近く菱形文とほぼ中央付近に直線文を描く。狭端面に「明石 瓦定」銘がある。

197は平瓦で全体の約四分の一の破片である。凸面に7本のクシ原体による菱形文の一部が残る。端面に「倉本筆造」銘が残る。これも195と同様クシ書きの菱形文のみで、1帯の直線文は伴わないものと思われる。

198は平瓦で凸面にクシ目があり、12本の原体で端部に近く菱形文とほぼ中央付近に直線文を描く。端面に「□□ | □□□ □八製」銘がある。銘は他の資料(207)から「明石 | 大蔵谷 八八製」と復元できる。全長28.2cmである。

199は「明石 | 卯月製」銘、200は「明石 | 卯月セ」銘そして201は「明石 | 卯月」銘で「卯月」は少なくとも3種の刻印が見られる。

202は「明石 | 山田庄改」銘、203も同じく「明石 | 山田庄改」銘だが刻印が異なるものである。

204は「明石 | 中尾 宮西」銘、205は「明石 | 瓦吉」銘、206は半裁菊花文又は旭日文「明石 | 瓦安改」銘で半裁菊花文又は旭日文の下半には文字があるものと思われるが、残存状態が悪く明確ではない⁽⁵⁾。207は「明石 | 大蔵谷 瓦八製」銘、208は「明石 | 製造」銘、209は「明石 舞子 | 瓦弥」銘、210は「明石 山田 | 瓦浅」銘である。このうち208の「明石」文字は左から右に書かれており他のものより時代が下る可能性がある。

註

- (1) 仲野泰裕「19世紀の窯業－伝統と西洋技術の受容－」『化学史研究』第21巻第2号 化学史学会 1994年
長佐古真也「続・お茶碗考－近代・現代の中形碗に飯碗を探る」『考古学が語る日本の近現代』ものが語る歴史14 小川望・小林克・両角より編 株式会社 2007年
- (2) 日本のタイル工業史編集委員会「日本のタイル工業史」株式会社INAX 1991年
文殊省三・伊藤純・酒井一光『煉瓦のまちタイルのまち－近代建築と都市の風景－』大阪歴史博物館 2006年
- (3) 桜井準也『ガラス瓶の考古学』六一書房 2006年
- (4) 水野信太郎『日本煉瓦史の研究』法政大学出版社 1999年
水野信太郎「国内煉瓦刻印集成」「産業遺産研究」第8号 中部産業遺産研究会 2001年
黒田恭正『御影郷古酒蔵群第4次発掘調査報告書－共同住宅建設に伴う発掘調査－』神戸市教育委員会 2007年
- (5) 明石市高家寺本堂で旭日文・明石「瓦安改」銘の軒丸瓦が検出されている。「瓦当文は無紋で球状に盛り上がる」と報告されている。年代に関する記載はない。
池田征弘「第4章第3節建物調査2. 部材調査（5）瓦」「高家寺本堂修理報告書」神戸大学大学院工学研究科准教授黒田龍二監修 宗教法人太寺山高家寺 2008年

IV. 神戸市域に於ける弥生時代中期の土器編年試案（図36～46）

1. 基準資料と土器の編年（西摂第Ⅲ～Ⅳ様式）

神戸市域の弥生時代中期の土器に関しては、当地の第Ⅲ様式の基本的資料として小林行雄が1933年『考古学』誌上に発表した「神戸市東山遺跡弥生土器研究」⁽¹⁾や、ゴホウラ製貝輪が第Ⅳ様式の壺に入れられた状態で出土した河原遺跡⁽²⁾、第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が報告された熊野遺跡⁽³⁾、第Ⅳ様式の器台などが出土した布引遺跡⁽⁴⁾など著名なものが多い。その後同期の資料については、楠・荒田町遺跡第16（IH11）次調査⁽⁵⁾で多量の遺物が出土したものの、「年報」でそのごく一部を紹介するに留まっているのが現状と言える。そのため長らく当遺跡が位置する六甲山南麓部の中期の土器編年は、1990年に森田克行氏が発表された、東摂を含む「摂津地域」の編年案⁽⁶⁾をそのまま引用してきたのが現状と言える。

そこで今回は、楠・荒田町遺跡第54次のI区SD01、II区SD02出土土器の編年の位置づけの前提操作として、楠・荒田町遺跡第16次調査やこれ以外の調査地及び他遺跡の出土土器などを基準として、六甲山南麓部における西摂第Ⅲ～Ⅳ様式の土器編年案を、前述の森田克行氏の編年案に依拠しつつ、提示を試みたい。なお「西摂」は神戸市域のみではなく、より広い地域を指すが、ここでは当市域の六甲山南麓地域の名称として使用しておきたい。

また、中期の編年案としては第Ⅱ様式から提示するのが本来であり、当該地域の第Ⅱ様式も楠・荒田町遺跡第1次及び雲井遺跡第28次調査でやや纏まった資料が得られてはいるが、今回、紙幅及び筆者の力量不足から検討が加えられなかつた。

以下、編年の基準と主な資料の概要を記すこととする。

＜第Ⅲ－1様式＞（図36～38）

第Ⅲ様式の一括資料はまだ少なく、その位置づけや細分には多くの問題点を抱えている。ここでは壺の口縁部に凹線文が採用されないこと、壺の口縁端部は丸く収めたり、面を作って終わるものが多いこと、橢形の坏部に水平に延びる口縁部を持つ、所謂木器形の高坏（以下、水平口縁高坏と記す）の垂下部がまだ発達していないこと、高坏脚部内面にヘラケズリが採用されないことなどを一応の目安として第Ⅳ－1様式と分離し、その中で古相、新相を判断した。

第Ⅲ－1様式は、壺・甕の形態に前代の第Ⅱ様式の影響が残る段階である。広口壺の口縁部は大型品を除き、大きく肥厚または拡張するものが少なく、刻目文や綾杉文などで加飾し、凹線文は採用しない。

甕の口縁部は大和型の第Ⅱ様式甕の頸部が屈曲度を増したような形状を呈する。口縁端部は丸みを持って終わるタイプが主である。

この段階の高坏は資料に恵まれていない。

楠・荒田町遺跡第1次、SB05・SD02⁽⁷⁾

前述のように神戸市営高速鉄道（地下鉄）建設工事に伴い始めて確認された遺跡で、昭和53年度に発掘調査を行った。弥生時代前期の貯蔵穴、中期の竪穴建物・溝などを調査した。SB05は推定径3.2mの円形竪穴建物で、第Ⅱ様式と考えられる甕と共に第Ⅲ様式の壺が出土している。SD02は南北方向の溝で、検出長約2m、深さ0.55mである。土器類は溝底からやや浮いた状態で人為的に打ち欠かれて出土しており、埋葬或いは何らかの祭祀に関連するものと推定されている。壺の中には第Ⅱ様式のものがある。

SB05出土の広口壺は、筒状の頸部から水平に近く屈曲して伸びる口縁部を持つもので、口縁

端部を上方に拡張し端面にハケ原体による刺突文を巡らす。

壺体部は最大径が胴部のやや下方にあるもので、クシ描き直線文3帯と最下部にクシ描き波状文を施している。

SD02出土の第Ⅲ様式の壺は2点あり、頸部に2・3条の断面三角形凸帯を巡らすものである。

壺は完形で口縁端部に面を作るものである。口縁部は直線的に外方に延びるものではなく、第Ⅱ様式の口縁部形態の系譜をひくもので、典型的な第Ⅲ様式の口縁部形態との中間的な、ゆるやかに外湾しながら聞く形態を呈す。

SB05・SD02共に個体数が少なく明確ではないが、凹線文出現以前の段階と考えられる。両者とも第Ⅱ様式に属す壺と壺が出土しているが、「報告書」で既に指摘されている様に、これらもこの段階で共存しているものと考えられ、SB05・SD02出土土器が第Ⅲ様式の最古段階であることの1つの根拠となっている。

楠・荒田町遺跡第17(旧12)次、方形周溝墓⁽⁸⁾

第17次は兵庫区楠町6丁目での調査で、平成4年度に実施した。調査地が狭小のため全形は知り得ないが、1基の方形周溝墓を検出した。東西12m以上、南北4m以上の規模を持つ。供獻土器類は溝底から若干浮いた状態で出土した。土器と共にサヌカイト製の石鏃、石包丁片が出土した。方形周溝墓及び包含層出土土器は第Ⅱ様式のものを少量含むが大半は第Ⅲ-1様式のものである。出土した広口壺の胴部下半に焼成後の穿孔が見られる。

大型の広口壺は完形で、口縁部端面にヘラによる綾杉文と2個1対の貼付円形浮文で飾る。頸部に6条の断面三角形凸帯を巡らし、以下クシ描き直線文-斜格子文-直線文-斜格子文-直線文を描き、2個1対の貼付円形浮文、その下にヘラによる列点文を加える。

他の完形の広口壺は、口縁端部が内側よりやや下がる形態のものである。口縁端面は無文、口縁部上面にクシ描き扇形文がある。頸部にはクシ描き直線文-1条の断面三角形凸帯-クシ描き直線文が巡る。体部はクシ描き波状文2帯、直線文2帯を交互に配して飾る。

また広口壺で口縁部を下方に肥厚させ、端面にクシ描き波状文、頸部に2条のクシ描き直線文を残す破片がある。第Ⅱ様式の系譜を引くものと思われる。

壺は全形を知りうる資料に欠くが、口縁端部は丸く取めるものが大半である。口縁部の形状は前記のSB05・SD02とはほぼ同様のものである。

方形周溝墓出土土器は前記した第1次調査のSB05・SD02と同じく、凹線文採用以前の段階と考えられる。また当資料も第Ⅱ様式に属す土器が出土しており、第Ⅲ様式でも最古段階と考えることができる。

<第Ⅲ-2様式> (図36~38)

第Ⅲ-2様式は、壺の口縁端部が肥厚拡張され、クシ描き文、貼付円形浮文などが盛んに採用されるようになるが、凹線文は第Ⅲ-1様式同様見られない。口縁部が上方に立ち上がる有段口縁壺はこの時期から資料が得られるが、立ち上り部分は内傾している。長頸壺には外面をハケ、ミガキ調整し殆ど文様を加えないものと、断面三角形凸帯やクシ描き直線文、波状文で飾るものが確認でき、加飾するタイプは第Ⅳ-1様式まで継続する。

壺の口縁部は、くの字口縁となり端部に明確な面をもつものや、端部をわずかに上方に摘み上げるもののが出現している。

水平口縁高环は、口縁端部が短く垂下するか、垂下部がなく面を持って終わるものである。

高坏脚裾部内面はナデ調整でヘラケズリは行わない。

大手町遺跡第4・6次、SD01₍₉₎

大手町遺跡は須磨区大手町を中心とした縄文時代早期から江戸時代に及ぶ集落遺跡である。第4・6次調査は都市計画道路に伴う調査で、平成11・13年度に実施した。古墳時代後期の掘立柱建物、弥生時代中期の溝（SD01）、弥生時代後期から庄内期の竪穴建物などを検出した。

SD01は検出長19.0m、幅2.0m、深さ1.5mの断面V字形の溝である。溝底よりやや浮いた状態で壺、甕、高坏、鉢や台形土器などが出土した。

壺には広口壺、細頸壺があり、広口壺の口縁端部は刻目文、クシ描き波状文や貼付円形浮文などで飾られる。頸部は断面三角形凸帯や指頭圧痕文付凸帯を持つものがある。胴部はクシ描き直線紋・波状文が主であるが、ハケ調整後にハケ原体による刺突文を巡らせるものもある。口縁端部に凹線文を飾る小片が1点含まれるが、全体的には凹線文採用以前の様相と思われる。細頸壺は頸部外面にクシ描き波状文と直線文を飾るものである。

壺にはこのほか、口縁部が屈曲して立ち上る複合口縁壺の破片がある。口縁部はやや内傾するものと推測され、外面にクシ描き斜格子文が残る。

甕はほぼ直線的に外方に伸びる口縁部を持つもので、口縁端部が僅かに上方に摘み上げられるか、面をなして終わる。端部を大きく拡張するものや、端面に凹線文を巡らすものは見られない。外面上半はハケまたはナデ調整し、下半はヘラミガキまたはヘラケズリで調整している。

水平口縁高坏は口縁端部の垂下部が見られないものである。

鉢には外面にハケ原体による刺突文を巡らせる、所謂バケツ形のものが出土している。

以上SD01出土土器は、既述のように壺の口縁端部に凹線文を飾る破片が1点含まれるが、その他は凹線文出現以前の段階とみてよく、第Ⅲ-2様式でも第Ⅳ-1様式に近い資料と位置付けておく。

本山遺跡第21（旧22）次、SB01₍₁₀₎

本山遺跡は東灘区本山中町・本山南町・田中町に所在する弥生時代前期から中期を中心とする遺跡である。平成2年度に実施した第12次調査₍₁₁₎では、復元高21.8cmの小型の扁平鉢式四区製表櫛文銅鐸が出土している。

第21次調査は震災復興事業に伴う調査で、県教育委員会の支援を受け実施したものである。弥生時代の前期・中期の溝、平安時代の溝と共に弥生時代中期の円形竪穴建物を1棟検出した。竪穴建物は中央炉を持つ7本柱のもので、火を受け廃絶しており、床面や埋土中に石器、鉄製品と共に多量の土器類が残されていた。

大型の広口壺は第II様式の系譜上にあるもので、口縁端部を下方に拡張しクシ描きの扇形文を加える。頸部に指頭圧痕文付凸帯を1条巡らし、口頸部外面にクシ描き直線文を4帯、体部上半に直線文を8帯施文する。大型の広口壺はもう1個体出土しているが、口縁部を欠く。頸部に指頭圧痕文付凸帯が1条残るのみで、体部外面に文様はなく、ハケで調整して終わる。

広口壺は多く、口縁端部を下方に拡張させ外面に貼付円形浮文を加えるものや、口縁端部に面を作つてクシ描き波状文、刻目文、綾杉文などを入れているものがある。壺頸部には断面三角形凸帯や指頭圧痕文付凸帯が見られ、断面三角形凸帯に棒状浮文を加える破片もある。体部文様はクシ描き直線文、波状文、斜格子文が主である。

長頸壺は口頸部がやや短いもので、外面をハケ調整するだけのものや、後述する都賀遺跡と同様な断面三角形凸帯、クシ描き波状文などで加飾するタイプがある。壺にはこのほか、口縁

部が屈曲して立ち上る複合口縁壺の破片がある。口縁部はやや内傾する。

甕は口縁端部を丸く収めるもの、上方に拡張するもの、上方に摘み上げるものや面を作つて刻目文を巡らすものなどがある。また頸部の屈曲が緩やかで口縁部から体部にかけ、タテハケを施す第Ⅱ様式の系譜上にあると考えられる個体も存在する。

椀状坏部を持つ高坏には口縁端部に刻目文がある。外面はハケ、ミガキ調整で凹線文は見られない。水平口縁高坏には短い垂下面に綾杉文、貼付円形浮文で加飾するものがある。

SB01出土土器の中には、鉢の口縁部に凹線文を巡らす破片が含まれ、やや新しい様相を呈するが、他は第Ⅲ-2様式の中で把握でき、ここでは第Ⅲ-2様式でも後半のものと位置付けておく。

楠・荒田町遺跡第1次、SD01・SD05⁽¹²⁾

第1次調査のSD01は東西方向の溝で検出長約10m、深さ1.2mで断面V字形のものである。SD05は東西方向と南北方向の溝で、直交するものと考えられており、方形周溝墓の可能性がある。その場合の一辺は推定で14~15mとなる。幅2.1~2.5m、深さ0.9~1.1mである。

SD01出土土器には広口壺、甕がある。壺は口縁端部を上下に拡張し、ハケ原体による刻目文がある。甕は口縁端部を上下に肥厚し面を作るか、上方に拡張するものである。

SD05出土土器には広口壺、細頸壺、甕、鉢と高坏がある。広口壺の口縁端部にはハケ原体による刺突文、ヘラ刻目文、クシ描き波状文などがある。大型で口頸部が太く短い直口壺は頸部に指頭圧痕付凸線を巡らし、口縁端部は下方へ拡張させた面にヘラ描き斜格子文を施している。細頸壺は外面にクシ描き波状文が残る。

甕はくの字口縁で、口縁端部に面を作るものである。

水平口縁高坏は口縁部先端に垂下部がなく、端部に刻目文が巡る。

都賀遺跡第1次、溝2（方形周溝墓1）・溝5⁽¹³⁾

都賀遺跡は灘区神前町3・4丁目に所在する縄文時代早期から江戸時代に及ぶ遺跡である。第1次調査は住宅改良事業伴う調査で、重複して営まれた方形周溝墓を計2基検出した。

溝2・11と土坑1・3で構成される方形周溝墓1と、溝7・9・10と土坑12で構成される方形周溝墓2である。溝の切り合い関係から方形周溝墓1→方形周溝墓2の変遷が確認されている。この方形周溝墓1と、2基の方形周溝墓とはやや離れた位置にある溝5から出土した土器が第Ⅲ-2様式に当たる。

方形周溝墓1（溝2）からは広口壺、長頸壺と甕が出土している。広口壺は口縁端部が下方に下がるタイプのもので、端部が上方に肥厚し、クシ描き波状文で飾る。頸部にはクシ描き直線文が1帯残っている。長頸壺は3点あり2点はハケ、ナデ調整のみのもので、2点の内1点には肩部にヘラ描き斜格子文がある。加飾する長頸壺が1点あり、口縁部及び頸部に2条の断面三角形凸帶を巡らし、口頸部にクシ描き直線文-波状文-直線文、頸部以下にクシ描き直線文-波状文-列点文の組合せを上下に2組飾る。

溝5からは広口壺が出土している。頸部から斜め上方に伸びた口頸部が水平方向に拡がるもので、口縁端部が僅かに下がるタイプである。口縁端部にはヘラ描きの刻目文があり、体部はクシ描き直線文4帯と波状文3帯を交互に施文する。

森北町遺跡第1次、溝5⁽¹⁴⁾

森北町遺跡は東灘区森北町1~6丁目を中心とする弥生時代から江戸時代に及ぶ遺跡で、第2次調査では前漢代の重圓文異体字銘帶鏡の破片を検出した。

第1次調査は森北町4丁目での日本放送協会世帯収集建設伴う調査である。弥生時代に属す溝を数条確認している。その内溝5から完形の壺4点、高坏1点が出土しており、方形周溝墓と考えられる。

壺の内訳は広口壺3点、長頸壺1点で広口壺の内2点はいずれも外面をハケ、ミガキで仕上げるのみで無文である。広口壺の1点は口縁端部を下方に拡張し、ハケ原体による綾杉文と貼付円形浮文で加飾する。頸部に2条の断面三角形凸帯を巡らし、以下クシ描き直線文・波状文2帯・直線文+貼付円形浮文・斜格子文・直線文+貼付円形浮文で飾り、最下にクシ原体による刺突文を加える。長頸壺は口縁端部を欠いている。外面はハケ、ミガキ調整のみで無文である。

高坏は水平口縁高坏で、垂下部がなく口縁端部に面を作つて終わる。坏の内面の凸帯は断面三角形で口縁端部より内側に下がった位置にある。坏部の内外面はハケで調整しミガキは施さない。脚部内面はハケ、ナデ調整でケズリは行わない。

<第IV-1様式> (図39~42)

第IV-1様式は壺の口縁端部に凹線文が採用される段階である。頸部は断面三角形凸帯、指頭圧痕文付凸帯が多く、凹線文はない。口縁部が上方に立ち上がる有段口縁壺の立ち上り部分はまだ、内傾している。凹線文や貼付円形浮文で加飾するものがある。播磨西部系の広口壺がみられるのも現時点ではこの様式からである。また広口壺では筒状のやや短い頸部と、それから外方に聞く短めの口縁部を持つ壺が見られるが、少量に留まる。長頸壺には断面三角形凸帯やクシ描き直線文・波状文で飾るものが確認できるが、ハケやミガキのみで仕上げるものも目立つようになる。後者の壺には口縁端部に凹線文を巡らすものも存在するが、主流ではない。

壺の口縁端部は上方に拡張しない摘み上げるものが大半を占めるが、小型壺は端部に面を作つて終わるものがある。口縁端部に凹線文を巡らすものはこの段階には存在しない。大型壺の体部にタタキを残すものがあるが、ごく稀な存在である。

水平口縁高坏は口縁端部が垂下し、貼付円形浮文や凹線文を巡らすものがある。高坏脚据部の内面はナデか、端部以外をヘラケズリするものが主流で、内面全面をヘラケズリで仕上げるものは、この段階では少数派である。

楠・荒田町遺跡第16(旧11)次、SD02・ST02₍₁₅₎

楠・荒田町遺跡第16次は、兵庫区荒田町2丁目で地下駐車場建設に伴つて実施した調査である。縄文時代中期から江戸時代の遺構・遺物を検出した。弥生時代中期の掘立柱建物、ピット、壺棺(ST02)、サスカイト剥片埋納遺構のほか生活空間の南限を示すと考えられる東西方向の2条の溝と、調査区の中央部で南北方向の溝を検出した。南北方向の溝(SD02)内には多量の土器類が投棄された状態で出土している。掘立柱建物、ピット、壺棺、サスカイト剥片埋納遺構はこの溝の西側にあるが、土器の出土状況は溝の東側から投棄、流入した状態を示していた。この事からSD02の東側に集落のもう一つの中心が存在した可能性が極めて高いと判断されたが、諸般の事情から調査を実施することはできなかった。SD02は幅約7m、検出長約45mを測る。

SD02からは壺、甕、鉢、高坏、水差形土器などが出土している。壺では第II様式の系譜上にある長頸の広口壺がこの様式まで残存している。第IV-2様式以降でこの型式の壺は現時点では確認できない。口縁端部を上下に肥厚させ波状文、凹線文を巡らすものが多い。他の広口壺は頸部に断面三角形凸帯を持ち、口縁端部を下方に大きく拡張し凹線文、貼付円形浮文、クシ

描き波状文などで飾り、体部外面はクシ描き波状文、斜格子文を加えるものがある。また、筒状の頸部から斜め上方、水平方向に近い角度で短い口縁部が付く広口壺が、この様式以降確認されるようになり、時期的に下るに従いその数が増える傾向にある。

太い頸部を持つ浜津型の広口壺は口縁端部を上方或いは上下に拡張し、主としてクシ描き波状文で加飾する。中には凹線文を巡らすもののが存在するが、主流ではない。体部外面はクシ描き直線文、波状文で飾るのを基本とする。その中でST02の壺棺として使用された同型の壺は、口縁端部に凹線文が巡り体部外面を斜格子文で飾る、やや異例のものである。

長頸壺の大半は無文の口縁部を持つ。口頸部、肩部にヘラ刺突文や波状文、貼付円形浮文を付加するものもあるが、ごく稀な存在である。肩部にヘラ描きの鹿があるものがあるが、調整などは他と大きな違いはない。長頸壺には口頸部に断面三角形凸帯、クシ描き直線文、波状文で加飾するものがあり、中に断面三角形凸帯のみのものが含まれる。

有段口縁壺の立ち上り部分は内傾する。口縁部外面に凹線文を巡らし、貼付円形浮文を密に付加する例があるが、多くは無文である。頸部に指頭圧痕文付凸帯を巡らすのを基本とする。

壺は小型、大型両者とも口縁端部を上方に跳ね上げるか、拡張するものが殆どである。口縁端部に面を作つて終わるものもあるが、少数派である。また肥厚させた口縁端部に凹線文を巡らすものもあるが、これもごく稀な例である。

高环には椀状の坏部を持つものと、水平口縁の2種がある。前者は口縁部外面に凹線文を巡らすものが多いが、やや大型の浅い坏部を持つタイプは無文のものや貼付円形浮文で加飾するものがある。後者は口縁端部に垂下部を持つが、垂下部分の大きさは様々で、第Ⅲ様式的な殆どないものも含まれる。明確な垂下部を持つものは外面に凹線文、貼付円形浮文を巡らすものがあるが、無文が多いようである。脚裾部内面は端部を除いてヘラケズリする例があるが、ナデ調整で終わるもののが主である。

<第Ⅳ－2 様式> (図39~42)

第Ⅳ－1 様式は壺の口縁端部の凹線文と共に、頸部にも凹線文が出現する段階である。長頸壺はハケやミガキのみで仕上げるものが主流となる。口縁端部に凹線文を施す長頸壺の割合は不明だが、一定程度存在するものと思われ、雲井遺跡第1次出土土器では、半数以上のものに凹線文を施している。長頸壺で断面三角形凸帯やクシ描き文で加飾するタイプのものは、この様式に属す確実な例を指摘できない。

壺は口縁端部が上下に拡張され明確な面となるものが主流である。この傾向は大型のみならず小型壺にも及んでいることが第Ⅳ－1 様式との違いである。中型及び大型壺の口縁端部には凹線文が採用される例もある。

水平口縁高环は口縁端部が垂下し、凹線文や棒状浮文で加飾されるものがある。高环脚柱部外面に太い凹線文が巡るものこの様式の特徴の1つで、次の第Ⅳ－3 様式ではこれが沈線に変化する。脚裾部内面は大半のものが端部までヘラケズリを施すようになり、端部にナデを残すものは稀な例に属す。

楠・荒田町遺跡第6（旧3）次、SD04（方形周溝墓）・SX01A₍₁₆₎

第6次は兵庫区西上橋通1丁目での調査で、昭和61年度に実施した。縄文時代後期の土坑のほか、弥生時代前期の貯蔵穴、中期の方形周溝墓や落込み造構などを検出した。SD04はSD02・05と共に1基の方形周溝墓を構成するものである。方形周溝墓の規模は溝の内側で8m×12m前後の長方形と推定される。溝の幅は2~3m、深さ0.5~0.8mである。供献土器は溝の両側か

ら完形の状態で出土している。

SD04からは第Ⅲ様式の壺と共に、第Ⅳ様式の壺が2点出土している。1点は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文を4条巡らし、頸部にも太い凹線文を4条施文するものである。口縁端部内面にはクシ描き扇形文がある。体部外面はクシ描き直線文と波状文で飾る。他方は太い頸部を持つ広口壺で、口縁端部を上下に拡張し端面にクシ描き波状文を加える。頸部から体部外面にクシ描き直線文と波状文を交互に描くものである。

SD02からは第Ⅰ様式を含む小片が出土したのみだが、SD05からはSD04と同様の壺が出土している。ただSD05出土の壺には頸部の凹線文は見られない。

SX01Aは長さ約2mの長方形の落込み遺構で、数cm～30数cm大の花崗岩や、砂岩製の玉砥石などと共に、破碎された多量の土器が出土した。

SX01Aからは壺、甕、高坏、鉢が出土地した。広口壺は口縁端部を大きく拡張し、凹線文を施すものである。凹線文と共に貼付円形浮文や棒状浮文を加えるものがある。頸部外面には断面三角形凸帯や指頭圧痕文凸帯を巡らし、後者の壺の口頸部には太い凹線文が9条件い頸部～体部にはクシ描き波状文、直線文、斜格子文、勾玉状浮文や貼付円形浮文で加飾する。細頸壺の口縁部には凹線文が巡る。

甕は個体数が少ないが、口縁端部を上方に拡張するタイプである。体部上半はどこ方向のヘラミガキを加える。

高坏は水平口縁高坏と、口縁部が立ち上る椀状の2タイプがある。前者の垂下部は大きく拡張され外面に6条の凹線文と棒状浮文で飾る。後者の口縁部外面にも4条の凹線文が巡る。高坏にはもう1つ浅い坏部を持つやや大型のものがあり、口縁端部は内側斜め上方に拡張される。高坏は脚部までの完形品がないが、脚部の破片では脚柱部外面に5条の太い凹線文を巡らすものがある。脚裾内面は端部までヘラケズリするものとナデで仕上げる2種がある。

鉢は小型のもので口縁端部外面に2条の凹線文を巡らす。

雲井遺跡第1次・SD02・方形周溝墓1・方形周溝墓2・方形周溝墓5⁽¹⁷⁾

雲井遺跡は縄文時代前期から弥生時代を中心とする遺跡で、中央区琴ノ緒町・旭通・雲井通を中心に拡がる。第1次調査は中央区東雲通6丁目で昭和62年度に実施し、弥生時代中期の方形周溝墓6基の外、木棺墓、溝を検出した。方形周溝墓は1から5号墓がほぼ南北方向に並び、次様式の項で述べる6号墓は2基の独立する木棺墓を挟んで、この列からやや南東にずれた位置に占拠している。SD02は方形周溝墓1の南辺溝の東で検出した溝で、これと主軸方向を一致させ、かつ完形の土器が出土している事から見て、これも方形周溝墓の可能性が高い。

SD02の広口壺は斜め上方に開く頸部から短く外方に延びる口縁部を持つもので、口縁端部が下がるタイプである。端部は上下に肥厚しクシ描き波状文で飾る。頸部に1条の断面三角形凸帯を巡らし、その上にクシ描き直線文を施す。凸帯下から体部中位にかけクシ描き波状文を3帯、直線文を3帯交互に施文する。

2個体ある長頸壺はいずれも口縁部外面に3条の凹線文を巡らしている。頸部以下はハケ、ナデ、ミガキやヘラケズリで仕上げている。

甕の口縁部は上方に摘み上げている。体部外面は上半をハケ、下半をヘラミガキで調整する。

3基の方形周溝墓からは広口壺、長頸壺、無頸壺、甕、高坏と水差形土器が出土している。方形周溝墓5の広口壺の中には頸部に凸帯または凹線文を施し、体部中位に貝殻刺突文を巡らすものがある。口縁端部は上下に拡張し、端面は内傾し4条の凹線文と3本1組の棒状浮文を

付加する。胎土などの特徴から西播磨系のものと推察される。また方形周溝墓2では筒状の頸部から斜め上方に短く口縁部が拡がる広口壺が出土した。このタイプの壺は第IV-1様式に散見されるが、第IV-3様式以降目立つ存在となる。口縁端部は上下に拡張するが無文である。頸部以下もナデ・ミガキで調整するのみである。

長頸壺は上記の遺構から計13点出土しているが、内9点に口縁部の凹線文が見られる。その中には、頸部に円形浮文を1か所貼付けるものや、長さ約6cmの指頭圧痕文付凸帯を付加するものが含まれる。

水差形土器は口縁部に4条の凹線文、体部上半に上下2列の貝殻刺突文を巡らせるものである。脚部内面は端部までヘラケズリを加えている。

高坏は椀状の坏部を持つもので、外面はヘラミガキ調整で仕上げ、凹線文などの装飾はない。脚柱部内面にシボリ目が残り、一部残る裾部内面にはヘラケズリが施される。周溝墓5から出土した高坏脚部は裾端部まで残存しており、裾内面は端部までヘラケズリが及んでいる。

壺は口縁端部を拡張し、内頸させるものである。体部上半をハケ、下半をヘラミガキで調整する。

祇園遺跡第14次、SB04⁽¹⁸⁾

祇園遺跡は兵庫区上祇園町・下祇園町・上三条町を中心に拡がる、繩文時代から平安時代の遺跡である。第14次調査は店舗建設に伴う調査で、12世紀後半～末の掘立柱建物や古墳時代前期の堅穴建物と共に、弥生時代中期・後期の堅穴建物を検出した。SB04は中期に属す直径約6mの円形堅穴建物で壺、甕、鉢、高坏、蓋が出土した。

広口壺には、雲井遺跡例と同様の筒状の頸部から斜め上方に短く口縁部が拡がるものがある。口縁端部は上下に拡張するが無文である。広口壺の中に3条の凹線文が巡る頸部から斜め上方に緩やかに開く口縁部を持ち、口縁端部を下方に拡張して3条の凹線文を加えるものもある。

壺は口縁端部を上方に拡張するもの、上下に拡張し2条の凹線文を巡らすものなどがある。また大型品で、短く屈曲させた口縁部を持ち、外面をハケ、内面をヘラミガキで仕上げるやや特殊なものを含む。

高坏は坏部外面に4条の凹線文が巡るものである。脚部外面に太い凹線文を加えるものがある。脚裾部内面はナデのみのものと、端部までヘラケズリが及ぶタイプがある。水平口縁高坏は出土しておらず、様相は不明である。

塚本遺跡第1次、SD201⁽¹⁹⁾

塚本遺跡は兵庫区大開通・塚本通を中心とする遺跡である。弥生時代前期の環濠集落跡として著名な大開遺跡の南西に位置する。塚本通6丁目での第1次調査で弥生時代中期の溝、土坑を検出した。溝（SD201）は検出長約25m、幅0.8m、深さ約26cmで溝底から中期の土器類が出土した。

水差形土器は口縁部外面に4条の凹線文を巡らすもので、低い脚が付く。口縁部の取手側の抉り部はない。脚裾部の内面は端部を除きヘラケズリする。

高坏はやや大型で浅い坏部を持つものと、小型で椀形の坏部を持つものがある。前者は、口径25.8cmで口縁部は外面に帯状の粘土を張り付けたような形状を示す。脚裾は楕円形のスカシで飾る。それ以外の装飾はなく、ヘラミガキで仕上げている。脚裾内面は端部を除きヘラケズリを加えている。後者は、口縁部外面に3条の凹線文を巡らすものである。脚内面はナデ仕上

げである。

甕は口縁部～体部上半の破片で、口縁端部は上方に僅かに摘みあげられる。

なお、「年報」不掲載の資料であるが、SD201からは高坏脚部片がもう1点出土している。脚柱部に現存2条の凹線文と、裾部に円形の小孔を巡らすものである。裾内面は端部近くを除き、ヘラケズリを加えている。

<第IV-3様式> (図43~46)

第IV-3様式は第IV-2様式同様、壺の頸部と口縁端部に凹線文が採用される段階である。頸部の断面三角形凸帯、指頭圧痕文付凸帯に関しては消滅するのではなく、この手法も存続している。ただし圧痕文付凸帯は「指頭」圧痕文と共に、ヘラ乃至ハケ原体による圧痕文が出現している。広口壺では第IV-1様式から見られる筒状のやや短い頸部と、それから外方に開く短めの口縁部を持つ壺が目立つようになり、第IV-4様式にかけて主流となるものと思われる。口縁部が上方に立ち上がる有段口縁壺の立ち上り部分は、前様式の第IV-2様式が不明であるがこの段階でも内傾している。

長頸壺は口縁部に凹線文を持たないものが目立つようになるが、凹線文で飾るものとの比率は明確ではない。

甕の口縁部形態は基本的に前様式と共通するが、体部外面の中位にハケ原体などによる刺突文を入れるもののが目立つようになる。このタイプの甕はまた外面にタタキを残す例が多い。

椀状坏部を持つ高坏では、坏口縁部が坏体部から屈曲して斜め外方に拡がる形態を示すようになる。口縁部外面の凹線文は上下の縁部に分かれ、口縁部全面に凹線文を施すものは見られない。脚柱部外面には以前の凹線文に代わって沈線が、上下に分かれて数条施文される。脚裾部内面は全面ヘラケズリである。

水平口縁高坏の良好な資料は、現時点で恵まれておらず様相は不明である。ただ、兵庫区熊野町に所在するゴホウラ製貝輪を入れた壺が出土した河原遺跡で、壺の蓋として使用されていた高坏は、発表された図では内面の凸帯が表現されないが、水平口縁高坏と判断され第IV-3或いは4様式の可能性がある。しかし、資料を実見できていないため可能性の指摘に留めたい。

なお、当様式の大手町遺跡第2次SD04には脚柱部外面に7条以上の沈線が巡る高坏片があるが、脚柱部の上下に分かれて施されているかは不明である。

生田遺跡第4次、ST4301(方形周溝墓) ⁽³⁰⁾

生田遺跡は中央区下山手通1丁目～中山手通3丁目に拡がる遺跡である。平成17年度に実施した第4次調査は、再開発事業に伴うもので、縄文時代後期から明治時代における遺構・遺物を検出した。特に縄文時代の遺物量は、市内では最多のものであり注目される。弥生時代中期の遺構は竪穴建物と方形周溝墓(ST4301)が各1基である。周溝墓は四隅が途切れるタイプで、北溝長10.3m、東溝長3.9mを測る。主体部は削平され検出されなかった。北溝の底面で壺、甕、水差形土器が出土している。

広口壺は算盤玉形の体部を有するもので、上下に拡張した口縁端部に3条の凹線文と貼付円形浮文を飾る。頸部～体部外面にクシ書き直線文2帯～波状文1帯～直線文5帯～波状文1帯を巡らし、最下部はハケ原体による刺突文で終わる。体部文様の上には更に、たて方向の同一原体のクシ書き直線文を加え、特異な装飾技法を示している。東方からの影響が感じられるものである。

他の広口壺は底部を欠くもので、口縁端部を上下に拡張させ、クシによる波状文を描く。頸

部下端から体部にかけクシ描き直線文4帯と、原体不明（棒状工具の小口？）の波状文4帯を交互に配して飾る。壺頸部～底部の個体も1点あり、頸部には3条の凹線文が巡る。頸部以下にはクシ描き波状文3帯、直線文2帯が交互に施される。広口壺になるものと考えられる。

壺は2個体あり、1点は口縁端部を上方に拡張し、2条の凹線文が巡る。体部外面をハケ、ヘラミガキ調整し、中位に原体不明（ヘラを2度刺突するか？）の刺突文を施す。タタキは残らない。他は口縁端部を肥厚させ2条の凹線文を加える。体部外面上半に3本/cmの平行タタキ、ハケ、下半にヘラケズリが残る。体部中位にヘラによる刺突文が巡る。

水差形土器は口縁部に抉りがあるので、口縁部外面に4条の凹線文が巡る。外面はナデ、ミガキで仕上げる。体部中位にタタキと思われる痕跡があるが、明確ではない。

雲井遺跡第1次、方形周溝墓6・ST04₍₂₎

前述の通り方形周溝墓6は方形周溝墓1～5とはその位置をずらして構築されたものである。ST04は方形周溝墓6に伴う主体部と考えられる木棺墓である。

方形周溝墓6から広口壺が2点出土している。1点は凹線文を3条持つ頸部から斜め上方に開く口縁部が伸びる壺で、口縁端部を上下に拡張し凹線文とクシ描き波状文で加飾する。頸部以下はクシ描き直線文3帯と波状文2帯を交互に配している。他方は頸部に指頭圧痕文付凸帯を1条巡らすもので、口縁端部は下方に拡張し3条の凹線文と棒状浮文を持つ。体部中位にヘラによる刺突文を施す。

台付鉢は口縁部下縁に凹線文を3条巡らすもので、脚部内面は裾端までヘラケズリを施している。

ST04からは広口壺2点と長頸壺3点が出土した。壺の1つには頸部に断面三角形凸帯を1条巡らし、斜め上方に開く口縁部を持つ。口縁端部は下方に拡張しクシ描き波状文で飾る。頸部以下はクシ描き直線文4帯と波状文3帯を交互に配している。他方の広口壺は頸部に指頭圧痕文付凸帯を1条巡らし、筒状の口頸部からほぼ水平方向に短い口縁部が取りつくものである。頸部以下はクシ描き直線文を4帯飾るが第3帯と第4帯の間にクシ原体による刺突文を巡らしている。

長頸壺はいずれもハケ、ナデとヘラミガキで調整するもので、内1点には口縁端部に刻目、体部中位にヘラによる三角文がある。また口縁部の凹線文が見られないのが1つの特徴となっている。

楠・荒田町遺跡第20（旧13）次、SD04・SD06₍₂₎

第13次は兵庫区荒田町1丁目での調査で、平成6年度に実施した。第16次調査区の南東にある。方形周溝墓を4基確認した。全形が知れる方形周溝墓2の規模は8.5m×12.0mである。方形周溝墓2では中央部から1基の、方形周溝墓4では4基の主体部を検出している。SD04は方形周溝墓3と4が共有する溝、SD06は方形周溝墓2に伴う溝である。SD04では壺2点、壺2点が間隔をおいて出土した。SD06では壺4点、水差形土器1点と高坏を2点検出した。

SD04の壺は広口壺で、3条の凹線文を持つ筒状の頸部と短く外方に拡がる口縁部を持つもので、口縁端部にクシ描き波状文が巡る。体部にはクシ描き波状文4帯と直線文3帯が交互に施文される。他の壺は胴～底部のみ残存するもので無文である。

壺の1点は口縁端部を上方に拡張し、外面に浅い凹線文を1条施す。体部外面はタテハケとヘラケズリで調整するが、中位に4本/cmのタタキが残る。他も口縁端部を上方に拡張し、やや不明瞭な凹線文を2条施す。前者と同様体部はタテハケ調整を施すが、上半に4本/cmのタ

タキが残る。中位にハケ原体による刺突文が巡る。

SD06の壺も広口壺で、2条の凹線文を持つ筒状の頸部と短く外方に拡がる口縁部を持つもので、口縁端部は上下に拡張し3条の凹線文が巡る。体部外面はハケ、ミガキ調整するが、肩部～中位に上下3列のハケ原体による刺突文が巡る。他の壺は胴～底部のみ残存するもので、外面にクシ描き波状文、直線文が施文されるものである。これらとは接合しないが口縁端部の破片が出土しており、内2点は端部を上下に拡張し2条・4条の凹線文を施している。

水差形土器は底部を欠くが、口縁部外面に3条の凹線文、体部外面の肩部にハケ原体による刺突文を上下2段に施文している。口縁部には取手側に抉り部がある。外面調整はタテハケ、ヘラミガキである。

高坏は坏体部と口縁部との境に3条の凹線文を巡らすもので、坏体部から僅かに屈曲して斜め上方に口縁部が伸びる。脚柱部外面には7条と6条の沈線が間隔を開けて施文される。裾部にヘラによる刺突文が巡る。裾内面は端部までヘラケズリを施している。もう1点の高坏は小型で椀状の坏部を持ち、口縁部外面に不明瞭な凹線文が2条ある。脚裾端部は肥厚し端面に2条の浅い凹線文が巡る。裾内面は端部までヘラケズリを施している。

<第IV-4様式>（図43～46）

第IV-4様式は資料数が少なく、所謂高地性集落からの遺物が主たるものである。広口壺の口縁部及び頸部には、凹線文が巡る。頸部から斜め上方に漏斗状に広がる口縁部を持つ前代からの広口壺は、口縁部の屈曲度が強くなり、やや硬化した印象を受けるものに変化する。これは筒状の短い頸部と、それから外方に聞く短めの口縁部を持つ壺からの影響とも考えられる。太い頸部を持つ折津型の広口壺はこの段階まで確実に存続しているが、口縁端部を大きく拡張し凹線文を施している。

長頸壺は口縁部が開く広口の直口壺や、口頸部が内湾する壺が見られる。両者とも外面に凹線文を施す。広口直口壺には形骸化した片口を持つものもある。この広口直口壺が前代からの長頸壺の系譜上にあるか別系統のものは、当該様式期の前代と変わらない形態の長頸壺の存在が不明で、いずれとも断定ができない。

口縁部が上方に立ち上がる有段口縁壺の立ち上り部分は、この段階で直立および外反するものが出現している。壺頸部のヘラ、ハケ原体の压痕文付凸帯は、その高さを減じ頸部から僅かに突出するのみとなり、粘土帶が付加されているのか不明瞭なものとなっている。

壺は口径の大小に関わらず、口縁端部が拡張され凹線文が巡るものが多い。

高坏は前代からの傾向が進み、坏口縁部の立ち上がりが垂直となり第V様式の高坏の口縁部形状に近づく。ただし口縁部の凹線文はこの様式になどても残存しており、口縁部下縁に施される。脚柱部外面の沈線は上下に分かれることなく、密に施されている。第IV-3様式および第IV-4様式の高坏は完形の資料数が限られ、脚柱部の沈線が上下に分かれれるか、連続して施文されるかを様式判別の基準として採用することが妥当か否か判断に苦しむ点もある。ただ、現時点では第IV-3様式と第IV-4様式の高坏部の形状と、脚柱部の施文方法とは対応関係にあることを重視しておきたい。この段階の水平口縁高坏の良好な資料も第IV-3様式同様、現時点では恵まれておらず様相は不明である。

台付鉢の口縁部も高坏同様、口縁部が坏体部から垂直に立ち上がる形態に変化している。

淹ノ奥遺跡第2・3次、SB01・C-b土器群など⁽²³⁾

淹ノ奥遺跡は灘区桜ヶ丘町・高羽町にある旧石器時代から室町時代に至る遺跡で、標高約140mの場所にある。昭和39年に銅鐸14、銅戈7を出した桜ヶ丘遺跡A地点遺跡は、当調査地の同一丘陵上で北方に位置する。また弥生時代中期の堅穴建物や壺棺を検出した桜ヶ丘B地点遺跡は、谷を挟んで南側の至近距離にあり、当調査区と一体の集落跡を構成するものと思われる。

平成2・3年度に実施した第2・3次調査では弥生時代中期の直径約8mの円形堅穴建物(SB01)1棟の外、土坑や土器だまり(土器群)を検出した。堅穴建物からは鉄製ヤリガンナ、土製紡錘車と共に壺、高坏が出土している。

SB01では広口壺を2点検出した。1点は4条の凹線文が巡る頸部から斜め上方に開く口頸部と、水平方向に近く屈曲して開く口縁部を持つ。口縁端部は上下に肥厚し3条の凹線文が巡る。頸部以下の外面にはクシ描き波状文-直線文-波状文2帯-直線文2帯-波状文が施文される。他の1点は太い頸部を持つ浜津系の広口壺で、口縁端部が主として下方に拡張され3条の凹線文が施される。頸部以下の外面にクシ描き直線文5帯-波状文2帯が巡る。

直口壺は口頸部から肩までの破片で、口頸部外面に10条の凹線文が巡る。口頸部が内湾するものである。

細頸壺の口頸部も1点出土している。頸部に現存2条、口縁部に2条の凹線文が巡る。

高坏は2点出土し、1点は完形、他は脚柱部の一部が欠損するが全形が知れる資料である。両者はほぼ同様のもので、坏部は口縁部がほぼ直立して立ち上がり、外面の下縁部に2条の凹線文が巡る。脚柱部には20条の沈線が巡る。裾部には小孔と3条の沈線が施される。脚裾部外面は端部までヘラケズリがある。

C-b地区の土器群からは壺5点、甕1点、台付無頸壺1点などが出土した。壺の1点は太い頸部の浜津型広口壺で口縁端部を主として下方に拡張し3条の凹線文を巡らしている。頸部から体部中位にかけクシ描き波状文-直線文-波状文一直線文を描き最下は波状文を2帯巡らす。細い頸部から漏斗状に広がる口頸部と、水平方向に短く伸びる口縁部を持つ広口壺は、口縁端部を上下に肥厚させ3条の凹線文を巡らしている。口縁部上面に扇形文が形骸化したクシによる刺突文がある。頸部-体部にかけクシ描き直線文と波状文を交互に配している。筒状の頸部と短く外方に拡がる口縁部を持つ広口壺は口縁端部が肥厚し3条の凹線文が巡るもので、体部上半に4本/cmのタタキが残る。タタキ成形後ハケで調整し、下半はヘラミガキで仕上げている。

有段口縁壺の口縁部は外反し、外面に3条の凹線文とヘラによる刻目文で加飾している。頸部はヘラ压痕文付凸帶があるが、凸帶の高さは殆どない。

甕は口縁端部を上方に拡張させ、3条の凹線文を巡らす。体部上半に3本/cmのタタキが残り、中位にハケ原体による刺突文がある。下半はヘラミガキ調整である。この他包含層から出土した大型の甕には、口縁端部を上下に肥厚させ3条の凹線文を加えるものがある。

なお、桜ヶ丘B地点遺跡では、口縁部がほぼ直立して立ち上がる坏部を持つ高坏片や、多条沈線を巡らす脚柱部の破片が確認できる。多条沈線は脚柱部全面に施されるものが現時点では確認できないが、9条と7+a条、10条と8条、13+a条と12+a条の沈線が間隔を置いて上下に施文される例が見られる。当遺跡の遺物は未整理状態で高坏坏部形状と脚部施文とのセット関係に不明な点を残すが、第IV-3或いは4様式段階での脚柱部沈線の多条化は確率が高いものと考えられる。

雲井遺跡第28次、SD401⁽²⁴⁾

第28次調査は、中央区旭通4丁目で実施した市街地再開発事業に伴うものである。縄文時代早期から鎌倉時代を中心とする遺構・遺物を検出した。弥生時代では第I～IV様式の遺物・遺構を検出し、第II～III様式の遺物包含層から武器型青銅器の鋳型が出土した。第IV様式に属す遺構はSD401のみである。全長37m以上、幅1.0～2.4m、深さ0.5～1.0mを測る断面U字形の溝である。検出範囲の中央付近で溝底から浮いた状態で砥石、鉄製ヤリガンナと共に壺、高坏、鉢が出土した。

壺には広口壺、広口直口壺、無頸壺と有段口縁壺があり、鉢には通常のものと台付鉢がある。広口壺は2点あり、1点は僅かに聞く頸部と水平方向に延びる口縁部を持つもので、端部は上方に摘み上げクシ描き波状文を加える。頸部から体部中位にかけ簾状文4帯－クシ描き直線文－波状文－直線文－波状文2帯が巡る。他の広口壺は筒状の頸部と斜め上方に延びる短い口縁部をもつもので、口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文を施す。

広口直口壺は口縁部に3条、頸部に3条の凹線文が巡る。体部外面はハケ、ヘラミガキ調整のみで、これ以外の文様は特に見られない。

有段口縁壺は口縁部下縁に1条の凹線文と、頸部に1条のハケ原体による圧痕付凸帯を巡らすものである。口縁部の立ち上がりは垂直～やや外反気味の形態を示す。頸部の圧痕付凸帯は厚みが殆どなく頸部と一体化している。肩部外面にタタキを残している。体部外面下半はヘラミガキを加える。

台付鉢は口縁部下縁に凹線文が2条めぐり、垂直に立ち上がる形態を示す。鉢部及び脚部外面はハケ、ヘラミガキで仕上げる。脚部内面は裾端部までヘラケズリを加えている。口縁部が垂直に立ち上る形は、同期の高坏坏部と共通するものである。

2. 楠・荒田町遺跡第54次出土土器の位置づけ

SD01の壺には第II様式に属す広口壺があるが、他は第IV様式の範疇で把握し得るものである。口縁端部を下方に大きく拡張し凹線文、貼付円形浮文を加え、上面にクシ描き扇形文で加飾する西播磨系の壺（図6-7）がある。壺の口縁部に凹線文があるものはこの7に限られるが、SD01出土土器が第IV-1様式以降であることを示すものとして重要である。壺頸部文様では断面三角形凸帯や指頭圧痕付凸帯で凹線文は見られない。この凹線文が見られないことは第IV-2様式に降らないことを示している。また指頭圧痕付凸帯もヘラやハケ原体による施文でないことも古い要素の1つと言える。

壺の口縁部は丸く収めるものも存在するが、明確な面をもつものや、上方に跳ね上げるものがある。

高坏では脚裾部の端部を拡張し、外面に凹線文を施すもの（17）や、脚裾部の破片で円形のスカシが1か所残り、上部に2条の凹線文が見られるもの（57）があり、この2片は第IV-2様式以降に見られる特徴を有するものである。ただし細片でもあり、これはSD01出土土器が第IV-1様式でも終わりに近い時期を示す資料と考えておきたい。

SD02出土土器は完形に近い状態で出土したものと、破片の状態で検出したものがある。58-60-64は完形に近く、かつ焼成後の穿孔を持つなど方形周溝墓の供献土器と特徴が一致するものである。壺は2点あり、内1点は口縁端部を上下に肥厚させ凹線文を巡らしている。頸部に凹線文がないことはこれが第IV-1様式に属することを示している。他の壺は口頸部を欠く資料で、クシ描き直線文を体部外面に巡らしている。破片資料の壺もごく少量出土しているが、頸

部に凹線文を持つものは見られず、第IV-1様式に属す考えを補強している。

甕には口縁端部を丸く收めるものもあるが、2点は跳ね上げ口縁をもつものである。62は体部外面にタタキを残し、第IV-1様式の中ではやや新しい様相を呈するものである。

以上SD02出土土器の様相は総じてSD01のそれとほとんど相違はない。これらの土器も、第IV-1様式の範疇で把握できるものと思われる。

以上SD01及びSD02出土土器は西摂第IV-1様式に相当するものと結論づけられる。

註

- (1) 太田陣郎「神戸市の史前遺跡」「考古学」第3卷第2号 東京考古学会 1932年
- 小林行雄「神戸市東山遺跡彌生式土器研究1」「考古学」第4卷第4号 東京考古学会 1933年
- (2) 濱田耕作「貝輪を容れた素焼壺」「人類学雑誌」第36卷第9~12号 東京人類学会 1921年
- 小林行雄「神戸市東山遺跡彌生式土器研究1」「考古学」第4卷第4号 東京考古学会 1933年
- (3) 小林行雄「神戸市東山遺跡彌生式土器研究1」「考古学」第4卷第4号 東京考古学会 1933年
- (4) 小林行雄「神戸市布引丸山の彌生式土器」「考古学」第6卷第4号 東京考古学会 1935年
- 徳永盛一「神戸市布引山に於ける遺跡及び遺物」「人類学雑誌」第30卷第8号 東京人類学会 1915年
- (5) 黒田恭正・阿部敬生「楠・荒田町遺跡第11次調査」「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1995年
- (6) 森田克行「摂津」「弥生土器の様式と編年」木耳社 1990年
- (7) 丸山潔・丹治康明「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1980年
- (8) 浅谷誠吾「楠・荒田町遺跡第12次調査」「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1995年
- (9) 中谷正・山本雅和「大手町遺跡第1~4・6次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003年
- (10) 神戸市教育委員会「本山遺跡第12次調査の概要」1991年
- (11) 岩田明広「本山遺跡(第22次調査)」「神戸市教育委員会 1998年
- (12) (7)と同じ
- (13) 徳原多喜雄・神崎勝他「都賀遺跡I 神前地区の調査(1988年)」妙見山麓遺跡調査会 1989年
- (14) 西岡巧次「森北町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1987年
- (15) 黒田恭正・阿部敬生「楠・荒田町遺跡第11次調査」「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1995年
- (16) 丸山潔「楠・荒田町遺跡III」神戸市教育委員会 1990年
- (17) 丹治康明「雲井遺跡第1次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1991年
- (18) 内藤俊哉・中村大介「祇園遺跡第14次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2013年
- (19) 浅谷誠吾「塚本遺跡」「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1995年
- (20) 中谷正「生田遺跡第4次発掘調査報告書 -中山手地区再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-」神戸市教育委員会 2006年
- (21) 丹治康明「雲井遺跡第1次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1991年
- (22) 丸山潔・中村大介「楠・荒田町遺跡第13次調査」「平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1997年
- (23) 黒田恭正「楠ノ奥遺跡」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994年
- (24) 西岡誠司・川上厚志「平成20年度雲井遺跡第28次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2010年

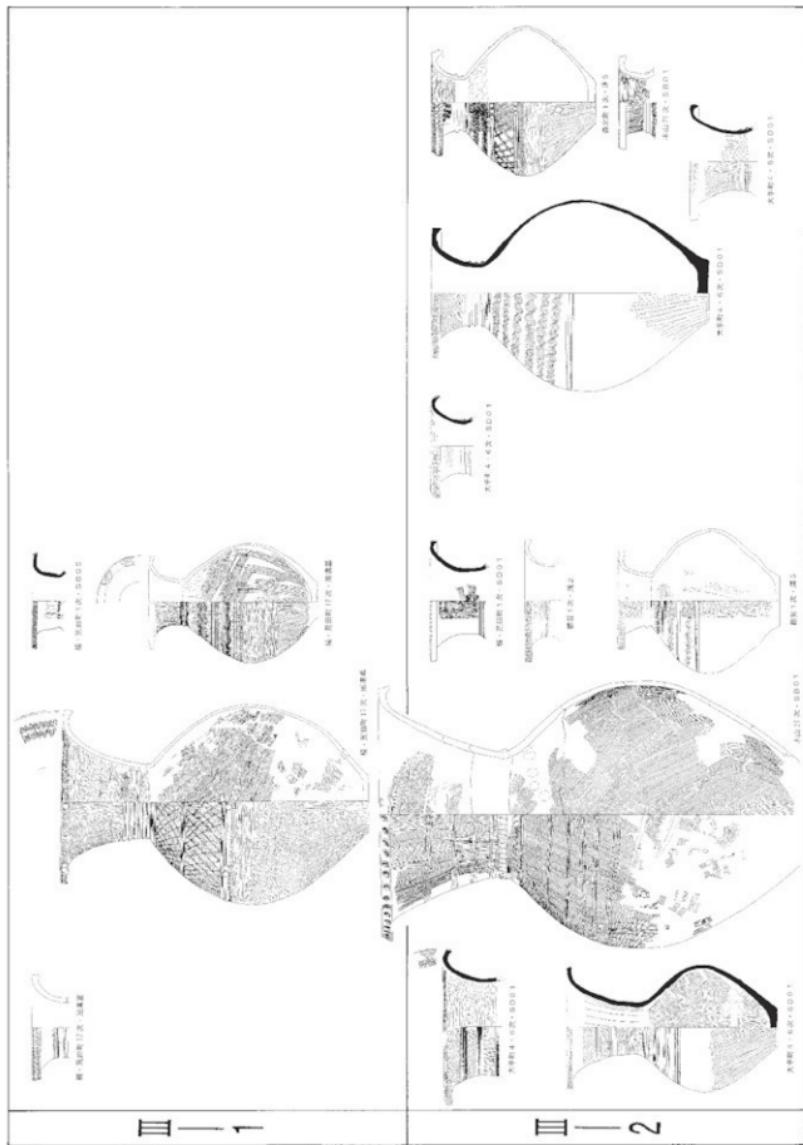


圖36. 西漢第III-1、第III-2樣式土器編年圖 (1)

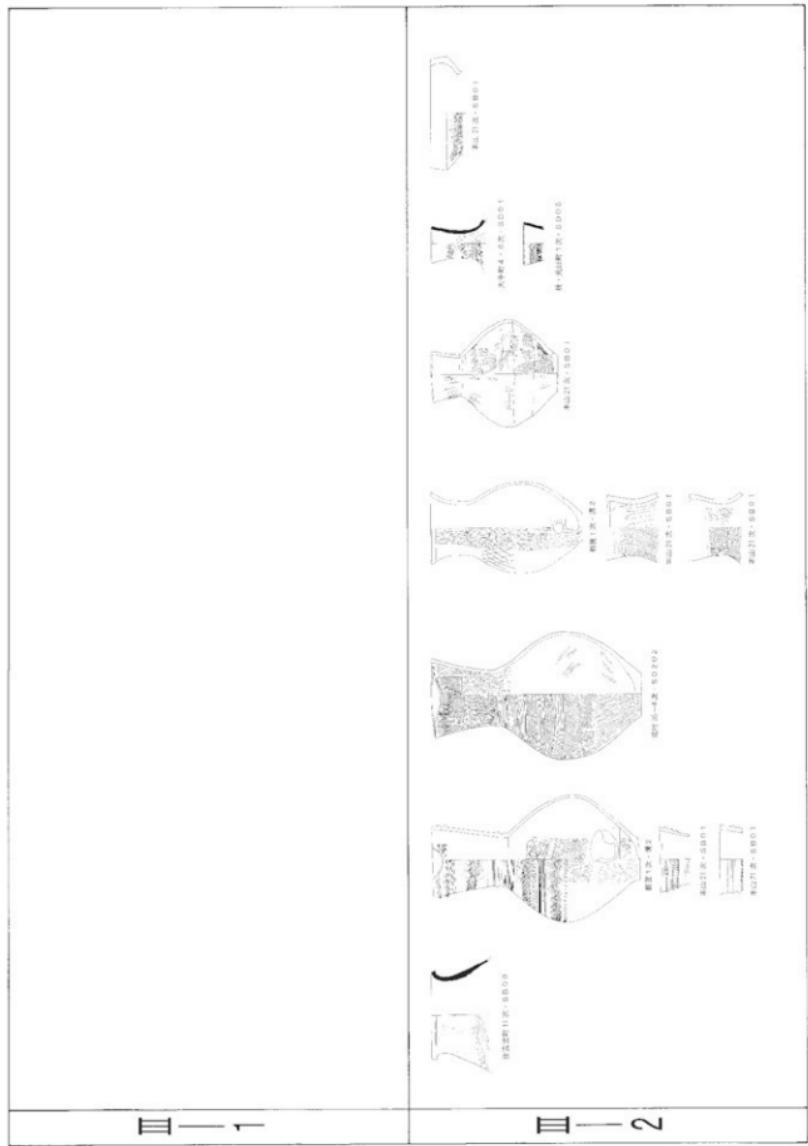


图37. 西周第III-1、第III-2様式土器編年図（2）

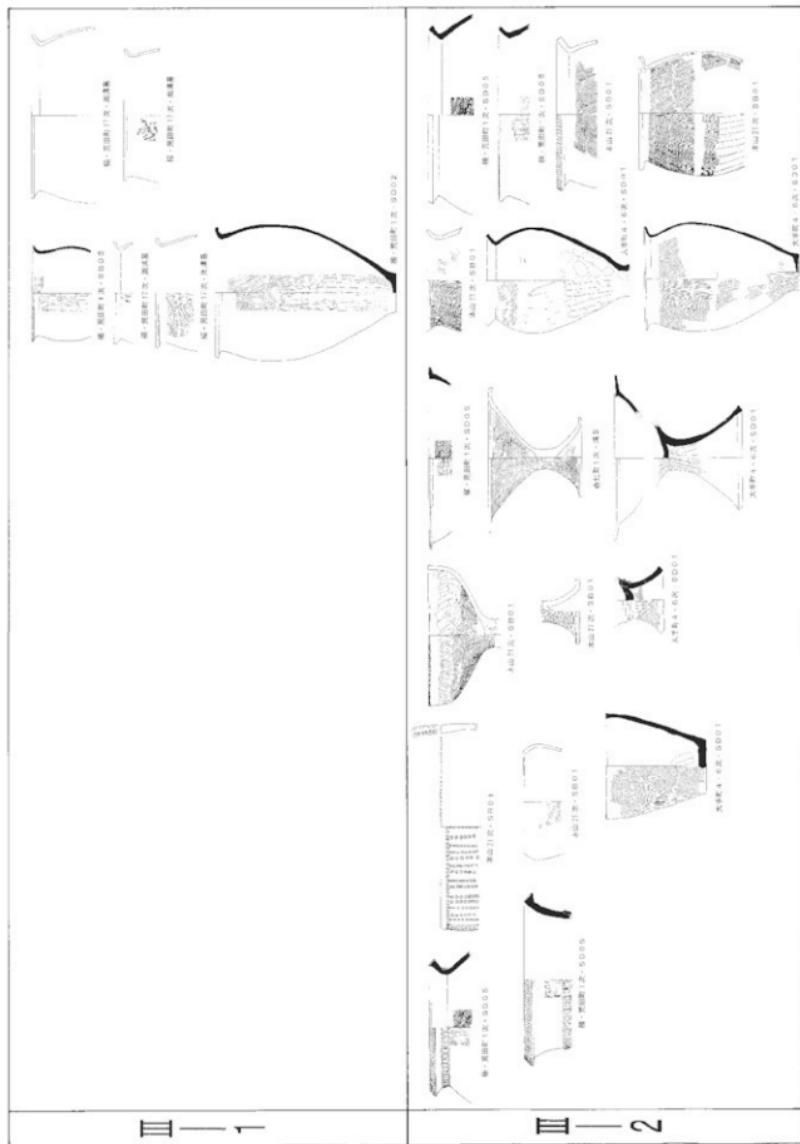


图38. 西樵山III-1、III-2号石器复原图 (3)

图39. 西拱第IV-1、第IV-2様式土器編年図(1)

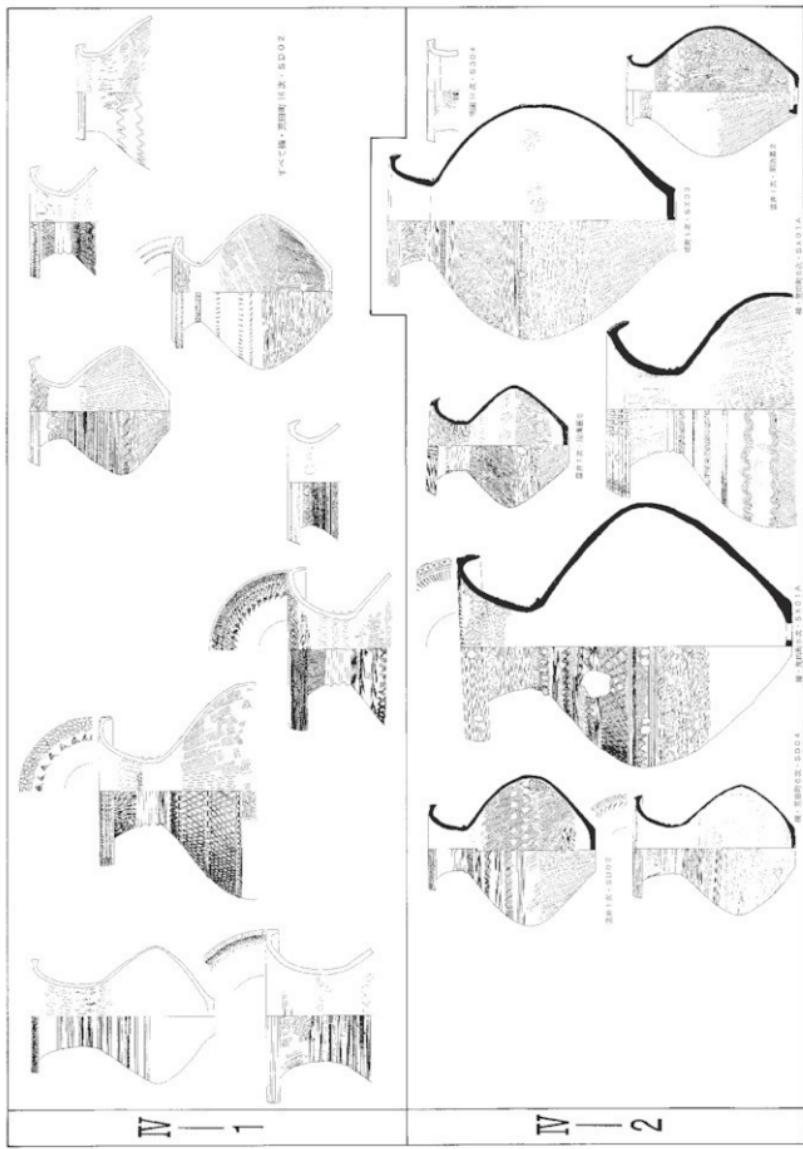
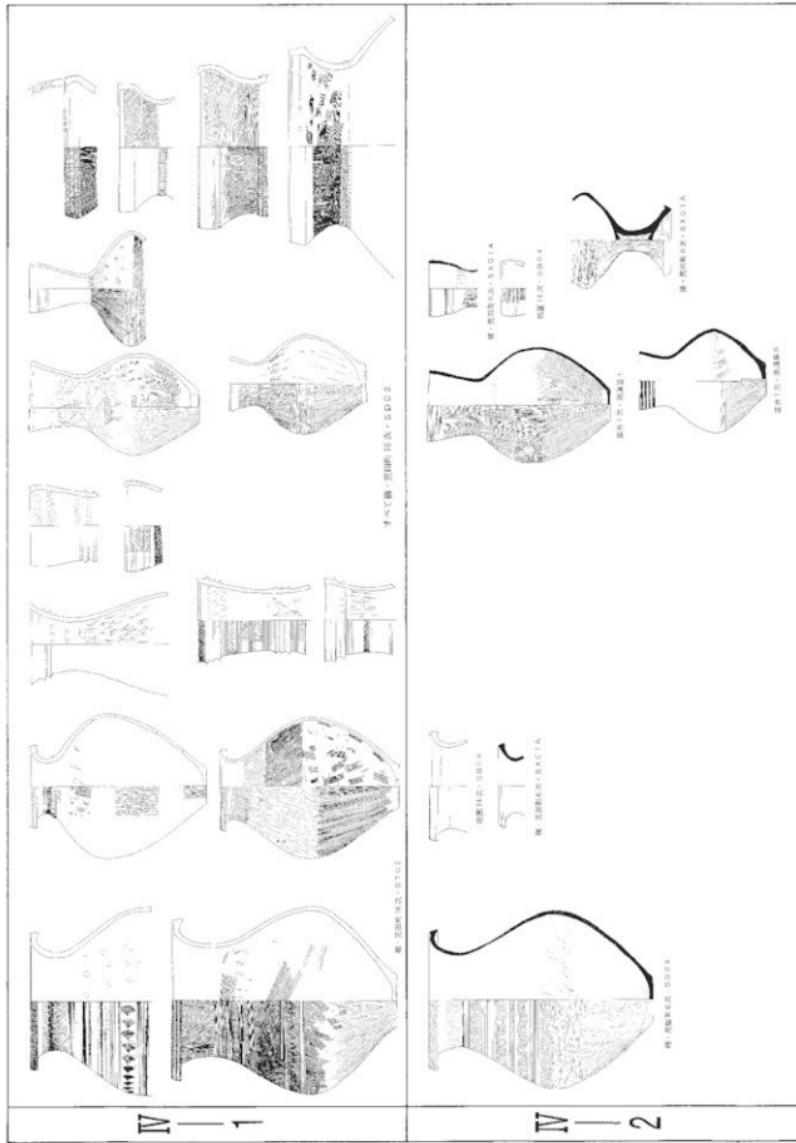


图40. 西周第IV-1、第IV-2様式土器編年図 (2)



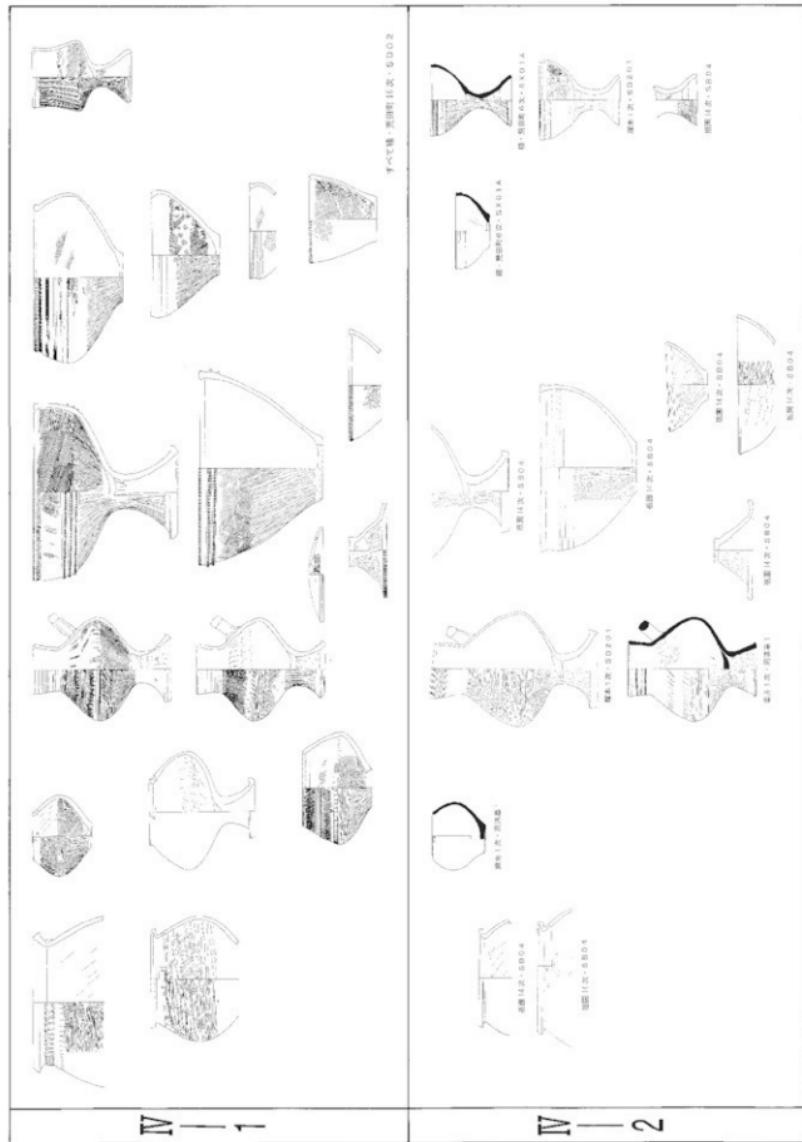


图41. 西周第IV-1、第IV-2号式土器编年图（3）

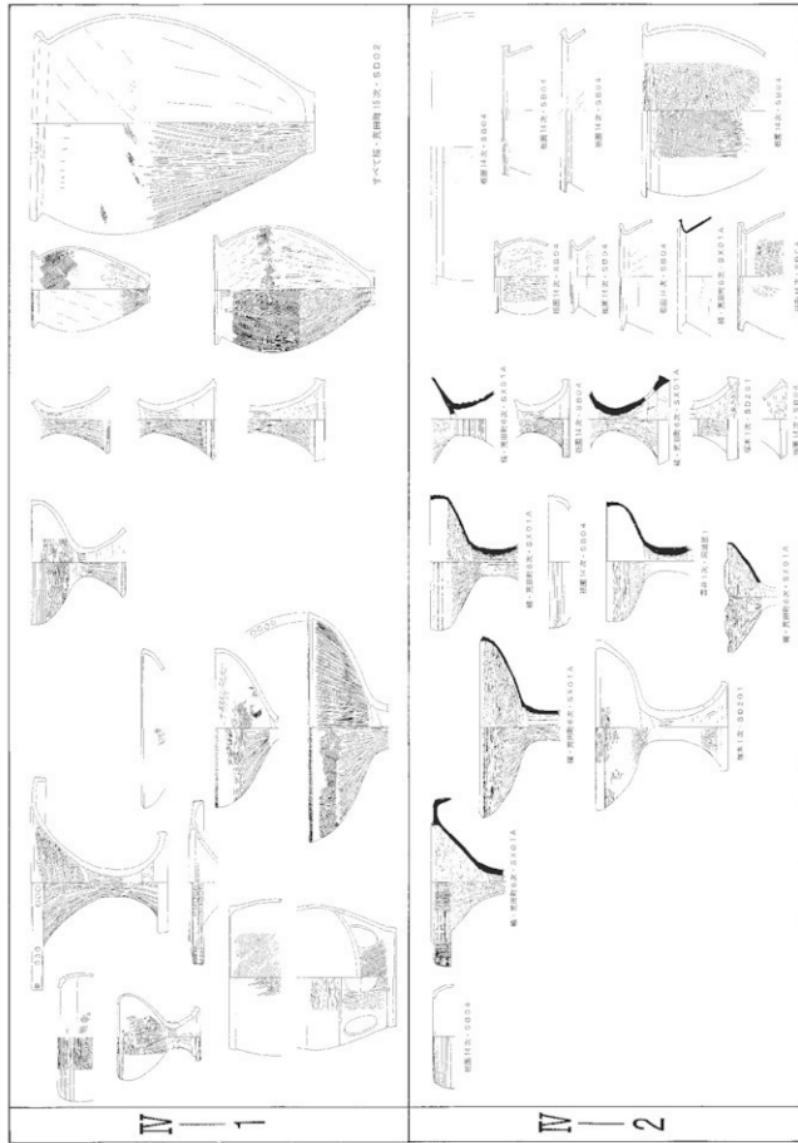
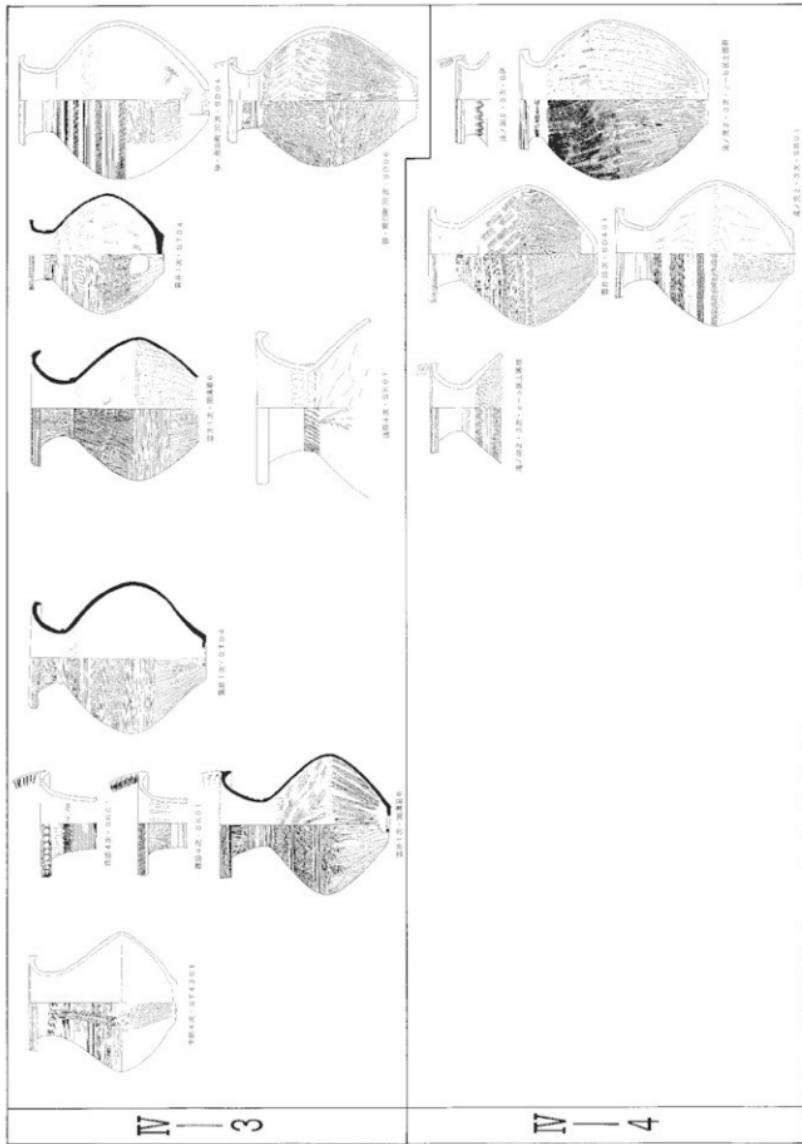


图42 西拱第IV-1、第IV-2様式土器編年図 (4)

图43. 西拱第IV-3、第IV-4様式土器編年図 (1)



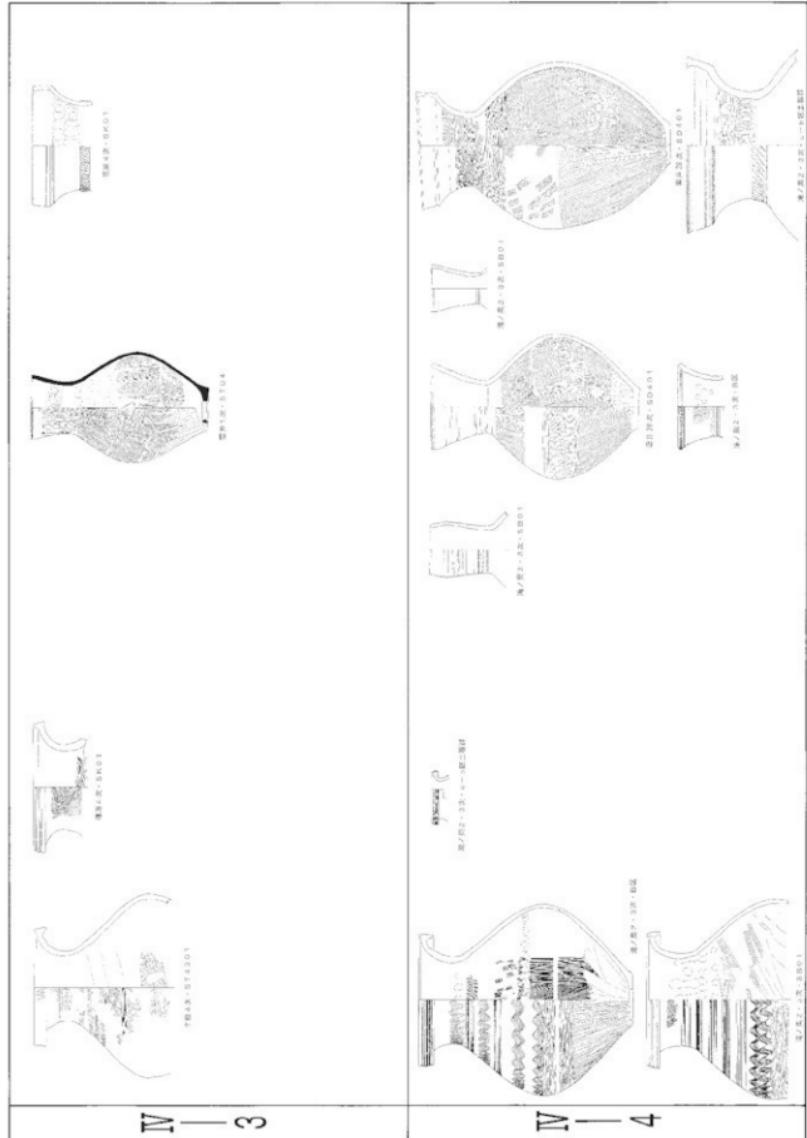


圖44. 西周第IV—3、第IV—4樣式土器編年圖（2）

圖45. 西拱第IV—3、第IV—4樣式土器編年圖 (3)

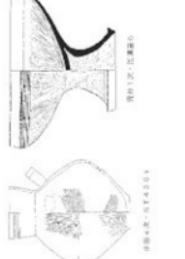
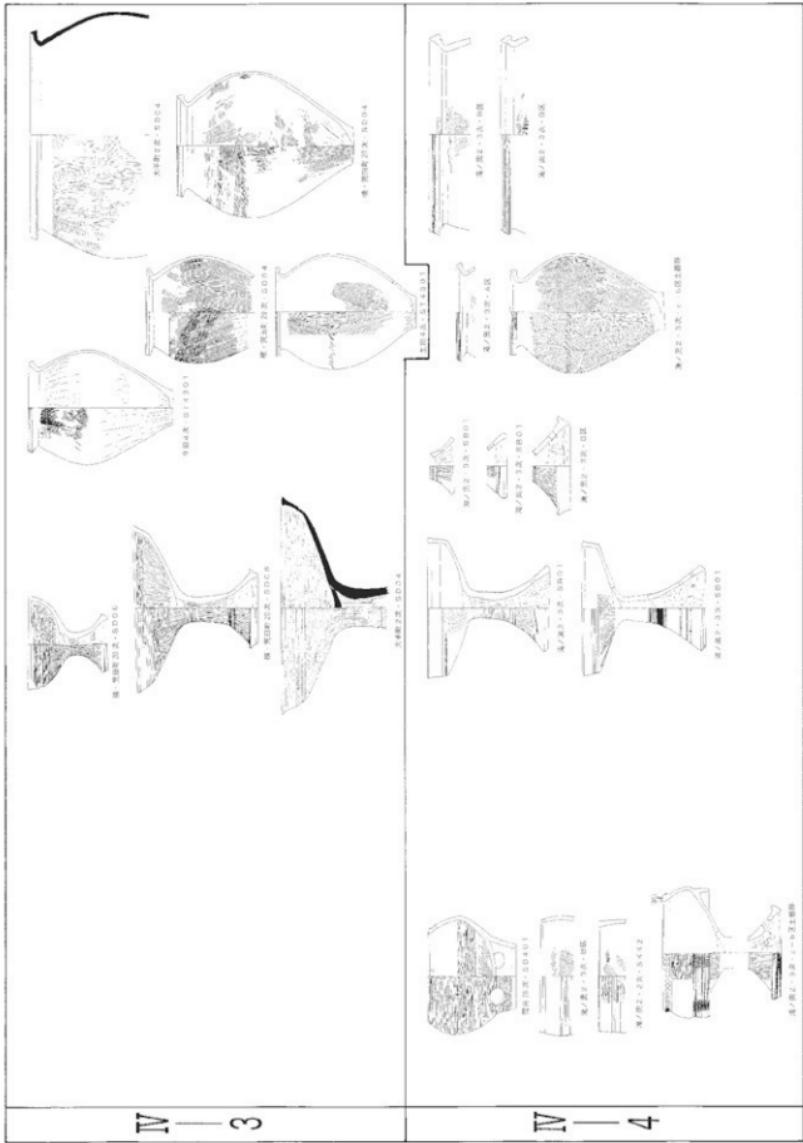
IV—3	IV—4
 <p>基盤 高さ: 1.2cm 幅: 10.0cm 底面 直径: 10.0cm 側面 直径: 10.0cm 厚さ: 0.5cm</p>	
 <p>基盤 高さ: 1.2cm 幅: 10.0cm 底面 直径: 10.0cm 側面 直径: 10.0cm 厚さ: 0.5cm</p>	
 <p>基盤 高さ: 1.2cm 幅: 10.0cm 底面 直径: 10.0cm 側面 直径: 10.0cm 厚さ: 0.5cm</p>	
	 <p>基盤 高さ: 1.2cm 幅: 10.0cm 底面 直径: 10.0cm 側面 直径: 10.0cm 厚さ: 0.5cm</p>

圖46. 西拱第IV—3、第IV—4樣式土器編年圖（4）

比例尺：1:20



V. 明治期の煉瓦構築遺構の性格と刻印瓦

明治時代の煉瓦積の建物基礎や八角形煙突、煙道はこの地にあった美濃社→直木構寸製造所→日本構寸製造株式会社→大同構寸製造株式会社の工場施設の一部である⁽¹⁾。

明治20年代から大正初期の構寸生産額は兵庫県が全国の40~80%を占め、最大の生産地神戸の生産額は全国の40~50%に達していた。日本の明治20年から40年における輸出品全体をみても構寸は輸出額で第7位を占めていた⁽²⁾。これより見ても当時の構寸製造が神戸の基幹産業の1つと認識され、明治時代の神戸のみならず日本の主要産業の1つであった構寸製造業の実態を知る上で、今回の調査は重要な史料を提供するものと考えられる。

I区の八角形煙突の構築時期は使用煉瓦からは判明できなかったが、II区で検出した煙道7に使用されていた煉瓦は、明治20年代末~30年代前半のものと見られる⁽³⁾。構築時にモルタル目地を使用する煙道7は他の煙道とは構造が全く異なり、断面形が内径60cmの円形で、モルタル目地を使用しない煙道が断面四角形を呈するのとは大いに異なっている。また主軸方向も煙突方向に直線的に延びることなどを考慮すれば、煙道7と八角形煙突が当初のものであったと考えるのが自然と思われる。煙道7が八角形煙突に取りつく当初の煙道とするならば、使用された煉瓦の年代観から、煙突の建設時期も明治20年代末から30年代前半を中心とする時期と推定されよう。

I区・II区で検出した煙道はこの煙道7以外モルタル目地を使用せず、単に積み上げただけの構造を探っている。II区の煉瓦積建物基礎は厚さ約40cmのモルタル上に煉瓦を積上げる手法で構築されているが、II区の煙道はこの煉瓦積建物基礎により破壊されるものと、同時に構築されたものがあり、煙道の改修が幾度か行われたことを示している。

従って出土煉瓦や煙道の造り替えも考慮して、煉瓦積建物の時期は明治時代でも30年代後半以降とするのが、現時点では妥当と思われる。

今回出土した遺物の内、煉瓦と共に注目されるものに屋根瓦がある。近代以降と考えられる瓦には狭端部や瓦当面に刻印を打つものがあり、この刻印には明石の地名を持つものが多い。刻印と『工場通覧』などから製造所と創業年が知れるものは、瓦八（生田徳松）の明治25年、山田庄（山田庄太郎）の明治29年、明治34年の瓦安（橋本音吉）そして卯月（服部鶴吉）の明治35年である。出土した瓦が必ずしも創業年に遡らないのは言うまでもないが、刻印瓦の年代の上限を知る上で重要な資料となろう⁽⁴⁾。

江戸時代末から明治時代以降の軒平瓦・平瓦の分析では、凸面のクシ目パターンによる製作年代の推定作業が進められているが⁽⁵⁾、当遺跡で出土した瓦八、山田庄、卯月、瓦安銘の瓦でクシ目パターンが判明するものがなく、各々の年代は確定が困難である。

ただ卯月、瓦弥、瓦浅の3社は瓦当右上隅に三角形の斜面を作る特徴が共通し、さらに瓦弥、瓦浅は「一帯の直線文と菱形文」の凸面文様パターンが一致し技術的交流も推測できる。このことから189の卯月も「一帯の直線文と菱形文」のクシ目パターンである可能性があり、明治35年以降のクシ目パターンが瓦弥、瓦浅と同様のものであったことが推定される。

当教育委員会が平成21年度に調査した旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査⁽⁶⁾ではこの「明石」「卯月」「明石・瓦八」銘の平瓦が出土しており、凸面のクシ目パターンは「一帯の直線文と菱形文」となっている。この遺跡の煉瓦積基礎の建物やそれに伴う瓦類は明治30年以降と考えられており、「明石」「卯月」「明石・瓦八」銘瓦もそれに近い時期と考えられる。

上記より卯月、瓦八の明治30年あるいは35年以降の瓦のクシ目バターンは、「一帯の直線文と菱形文」である可能性が高い。これは今まで推定されていた年代観とは若干の齟齬を生じるが、明石産の瓦に特有の現象であることも考えられ、関連資料の増加を待って結論に至りたい。

また建物基礎により破壊される、会所3の南で検出した瓦敷きの溝の平瓦は、凸面のクシ描きバターンが「菱形文」のみとなり、「一帯の直線文」が省略されたものとなっていることは、煉瓦積み建物の建築時期を、明治でも終わりに近い頃と推定する先の考えを補強するものと言えよう。

さらに、燐寸工場設立当初に近い時期と思われる、八角形煙突および煙道7構築時の関連建物の実態は不明であるが、明治30年代から40年代頃の瓦が多く確認できる事実は、前述した煉瓦積み建物の推定時期とも重なり、当該期間に燐寸工場の整備が進んだことを証明しているとも思われる。

下記の略年表はこの燐寸工場に関する主な事項をまとめたものだが、当初工場は今回の調査地である荒田町2丁目の荒田工場のみであったものが、明治35年頃には3工場、明治36年頃には4工場そして明治40年の合併を経て大正元年には5工場となっている。職工数も明治35年の計727人から大正元年には約1.5倍の計1059人となっており、明治30年代後半から明治末年にかけ、事業規模が急速に拡大していったことを示している。その中でこの荒田工場は最大規模の工場であった事が知れる。今回出土した遺物・遺構の検討から明治30年代以降の工場整備を推定出来たことは、文献資料から復元される事実を証明するものと思われる。

<大同燐寸関連年表>

- i. 明治20（1887）年9月 直木政之介、泉仙、泉政、小西米吉らと「獎拵社」を設立。
『神戸財界開拓者伝』によれば、当時の工場は、
荒田工場…荒田町2丁目の1工場のみ記載されている。
- ii. 明治29（1896）年9月 直木の単独経営となり「直木燐寸製造所」と改称したが、明治30年ころまで「獎拵社」の商号を併用していた。明治36年ころより工場を拡大し4工場となる。
明治35（1902）年刊の『工場通覧』には、以下の3工場が見られる。
本工場…荒田町2丁目（M19年8月創業、職工：男81人・女355人）
第2工場…奥平野村 （M33年2月創業、職工：男48人・女72人）
第3工場…荒田町1丁目（M34年5月創業、職工：男51人・女120人）
その後、明治36年刊の『実業の書』によれば、従業員数は不明であるが、以下の4工場が見られる。
本工場…荒田町2丁目
第2工場…奥平野村
第3工場…明石郡明石村
第4工場…石井村
- iii. 明治40（1907）年 明治社（本多義知）、三井物産と提携し、「日本燐寸製造株式会社」を設立。
大正元（1912）年刊の『神戸市の工業』では、5工場に増加している。

- 湊町工場…湊町3丁目 (M40年1月創業、職工：男40人・女132人)
 石井工場…石井村 (M40年1月創業、職工：男75人・女133人)
 大開工場…大開通5丁目 (M40年1月創業、職工：男30人・女164人)
 荒田工場…荒田町2丁目 (M40年1月創業、職工：男63人・女230人)
 御藏工場…御藏通2丁目 (M40年1月創業、職工：男47人・女145人)
- iv. 昭和2(1927)年 スウェーデン・マッチ社、東洋燐寸株式会社(瀬川儀作)、公益社(小林吉右衛門)と合併し「大同燐寸株式会社」となる。
- v. 昭和7(1932)年 大同燐寸が経営難となり、日産農林株式会社に経営が移るが、社名は「大同燐寸」のままとなる。荒田工場は「日産農林工業神戸支店」となる。
- vi. 昭和48(1973)年 大東燐寸工業株式会社(日本紙軸燐寸製造所→船井燐寸株式会社→大東燐寸と改称)と合併し、ダイドー工業株式会社となる(現本社：神戸市中央区北長狭通)。

註

- (1) 神戸同盟出版社『直木政之助君(神戸)』『兵庫人物評1』公評散史 1892~1893年
 兵庫縣廳内務部第四課『直木燐寸製造所』『實業之譽』1903年
 神戸市役所『神戸市の工業』1912年
 「マッチ王国」の名残り荒田町マッチ工場あと』『歴史と神戸』第7巻第3号 神戸史学会 1968年
 落合重信『明治10年前後の神戸、繩とハサミ』『歴史と神戸』第8巻第2号 神戸史学会 1969年
 田潤好美『マッチ王 直木政之介小伝』『歴史と神戸』第17巻第5号 神戸史学会 1978年
 赤松啓介『燐寸輸出の翫者 直木政之介』『神戸財界開拓者伝』太陽出版 1980年
- (2) 社團法人日本工學會『第二十六章 燐寸工業』『明治工業史 化學工業篇』1925年
 マッチ百年史編集委員会『マッチ産業発達史-誕生から昭和三十一年まで』1974年
 武知京三『第3部第1章マッチ工業の展開過程』『近代中小企業構造の基礎的研究』雄山閣出版 1977年
 なお、当時の燐寸工場の職人の状況については、下記の文献を参照した。
 農商務省商工局『職工事情』1903年
 横山源之助『第3編第2章阪神地方の燐寸工場』『日本の下層社会』岩波文庫109-1 株式会社岩波書店 1949年
- (3) 煉瓦の編年に関しては、下記の報告に基づく。
 水野信太郎『日本煉瓦史の研究』法政大学出版会 1999年
 黒田恭正『御影郷古酒蔵群第4次発掘調査報告書-共同住宅建設に伴う発掘調査-』神戸市教育委員会 2007年
- (4) 井上要『日本瓦業總覽』日本瓦業總覽刊行会 1927年
 『工場通覧』明治42年12月末現在調査 農商務省商工局工務課編 1911年
 兵庫県明石郡役所『明石郡治内容一斑』1915年 『明石市史資料(明治後期編) 第八集(上)』明石市教育委員会 1990年 所収
 ただし、創業年に関しては、上記以外の文献によっては年代が異なっている場合がある。
- (5) 藤原学『登録有形文化財復原自家宅の刻印瓦』『館報』7 吹田市立博物館 2007年
- (6) 千種浩・阿部功『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2011年

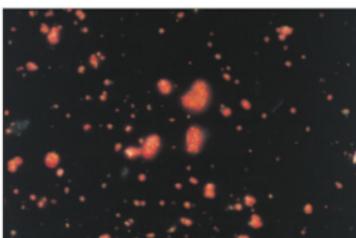
VI. 文化財科学による調査

1. I 区SD01出土壺形土器に付着する赤色顔料

垂下した口縁端部から口縁内面の突帯にかけ、目視による赤色顔料の存在を確認した（挿図写真1）。顔料は櫛描文の内部、円形浮文の接着部の隙間、また器表面に生じた微細なクラックの内部等に辛うじて残っている。微量をサンプリングし、金属顕微鏡下で観察すると、中には $25\mu\text{m}$ と大型の粒子も散見されるが、おおむね直径 $5\mu\text{m}$ の、比較的スケールの揃ったピンク色の粒子が観察できた（挿図写真2）。粒子形状はやや角の取れた角礫状で、整った面を持つ。これは精製された水銀朱粒子と考えられ、クラック等の狭窄部分への滲入状況からは、液状に溶いたものを当該部位に塗布した可能性が示唆される。



挿図写真1

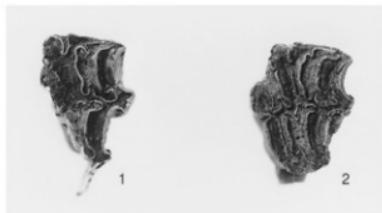


挿図写真2

2. 動物遺存体

今回の第54次調査では、ウマ歯が2点出土している（挿図写真3）。1は出土層位および時期は未詳であるが、2は土坑SK01（灰色細砂層：平安時代）より出土している。どちらも左上頸第2前臼歯であり、少なくとも別個体のウマであることがわかる。残存歯冠高は1が 51.6mm 、2が 37.5mm を測り、年齢は1が3～4歳の若齧馬、2が7～8歳の壯齧馬であることが推定できる（注）。

※歯の生物学的所見については、奈良文化財研究所 客員研究員 丸山真史氏よりご教示いただいた。



挿図写真3

（注）推定馬齧は、西中川駿『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』

平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書の計算式による。

VII.まとめ

今回出土した弥生時代の土器類は、中期後半の西摂第IV-1様式（以前の第III様式新段階）のものと考えられる。検出した遺構としては溝と数基のピットのみではあったが、同時期の遺構・遺物は、今次の調査地から西へ約300m離れた第16次調査で纏まって出土しており、この時期の集落規模を知る上で、貴重な史料が得られた意義は大きい。

この第16次調査地の南約100mに位置する第20次調査地では、西摂第IV-3様式に属す方形周溝墓群を検出している。時期的には第16次調査地の集落とはやや異なるが遺跡推定範囲の西端に近い場所に、1つの居住区と墓地という集落を構成する単位があったことが想定できる。また今次の調査地から南に約100m離れた遺跡推定範囲の南東地域では、第III～IV様式期の方形周溝墓群が見つかっている。さらに今回のSD02の出土土器は完形のものが多く、かつそれに焼成後の穿孔を持つものが多く、方形周溝墓の供獻土器の可能性が高い。

方形周溝墓群が集落を構成する複数の単位集団ごとに営まれるものと仮定すると、今回の調査で当時の集落が少なくとも3つの構成単位によって成立していたことが推定できるようになったのは、大きな成果と言えよう。

平安時代、12世紀後半～末ころの遺物も少量ながら出土し、中に小片ではあるが軒丸瓦・軒平瓦を含むことは、この近辺に瓦葺き建物の存在を予想させる。なお、北側に隣接する第29次調査地でも同時期の軒平瓦の破片が出土している。この楠・荒田町遺跡およびこれより北側に拡がる雪御所遺跡、祇園遺跡は福原京の推定範囲に含まれておらず、当該時期の遺構・遺物もこれらの遺跡で確認されその様相が徐々に解明されつつある。今回出土の瓦類は極めて少量ではあるが、周辺での調査が進展すればその意味もより明確になるものと思われる。

江戸時代については、調査区南辺で自然流路などを検出したに止まるが、流路肩部に杭が打たれていた事や、土坑、井戸なども検出したことは、当時の生活空間がこの周間に広がっていたことを証明している。

明治時代の煉瓦積みの建物基礎や八角形煙突、煙道は明治時代の神戸のみならず日本の主要産業の1つであった煉寸製造業の実態を知る上で、重要な資料を提供するものと考えられる。

中でも煉瓦積みの八角形煙突が発掘によって確認されたのは神戸市域では2例目である。煉瓦煙突は高さ約20m以下は、断面形が四角形のものが主で、高さを増すにつれ六角形や八角形、さらに円形へと変化することが指摘されている。現存する六角形や八角形煙突は高さ15mから30mほどで最高60m（秋田市小坂鉱山、明治35年築）に達するものがある。今回検出した八角形煙突は当初のものと考えられる煙道に使用されていた煉瓦の年代から、明治20～30年代と推定された。高層ビルなどがない明治期の神戸に、近代産業の象徴として高さ20～30mほどの煙突が聳え立っていたものと想像される。

写真図版

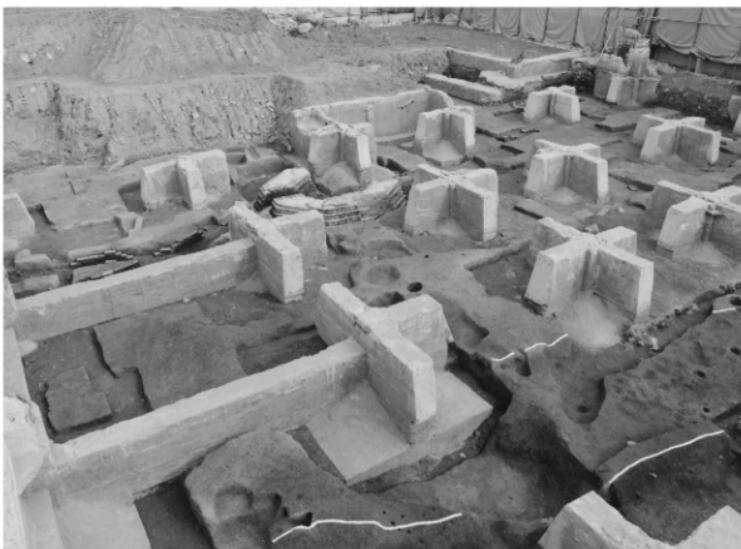


SD02出土土器

写真図版 2



I 区全景（西から）



I 区全景（南西から）



SD01 (東から)



SD01 (西から)



SD01土層断面 (西から)



SK01 土層断面 (北から)

SK01 (東から)

写真図版 4



II区全景（北から）



SD02（東から）



高坏64



壺58
壺62、水差形土器63



SD02土器出土状態（南から）

壺59、壺60・61

写真図版 6



I 区八角形煉瓦煙突・煙道（西から）



I 区八角形煉瓦煙突（西から）



II区煉瓦積建物基礎（東から）



同上（西から）

写真図版 8



II区煙道7（東から）



煙道7残存部分（東から）

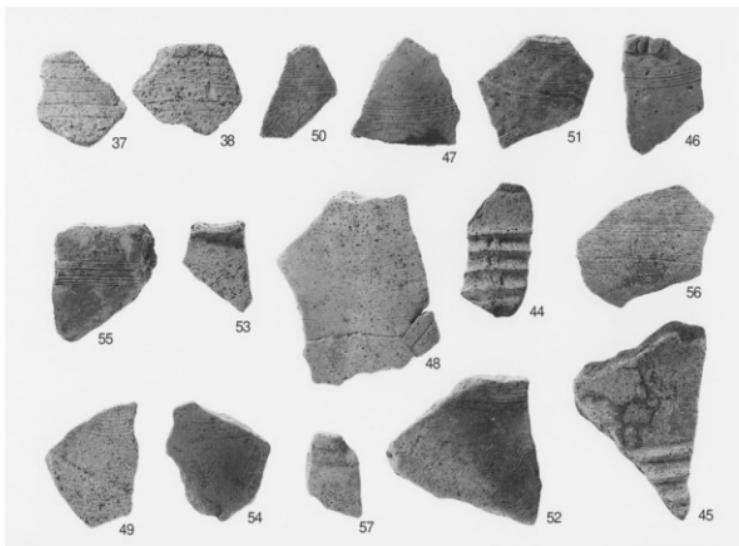
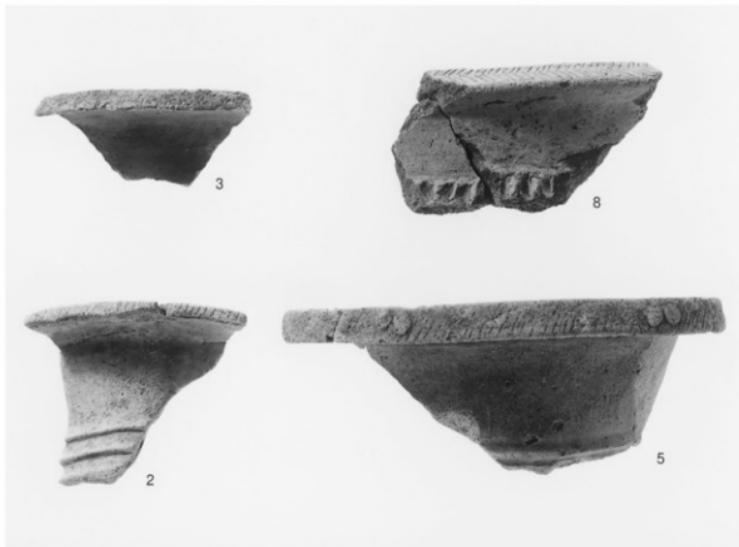


II区建物南辺の基礎及び雨落ち溝（南から）



同上雨落ち溝除去後状態（南から）

写真図版10



SD01出土土器（1）



SD01出土土器（2）



SD02出土土器（1）

写真図版12



SD02出土土器（2）



61

61



63

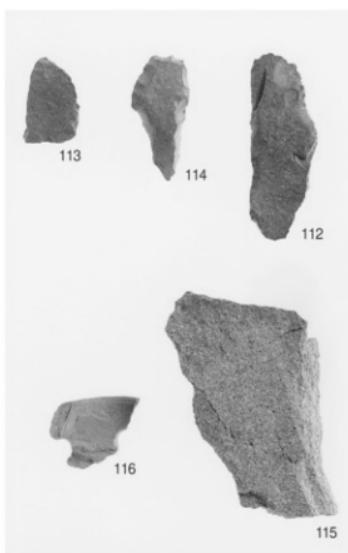
64

SD02出土土器（3）

写真図版14

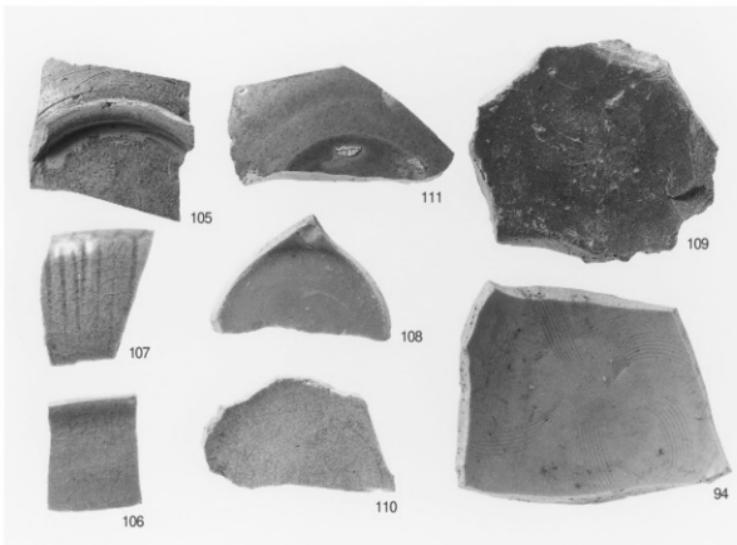


SD02出土土器（4）



SD01出土須恵器

弥生時代中期石器類



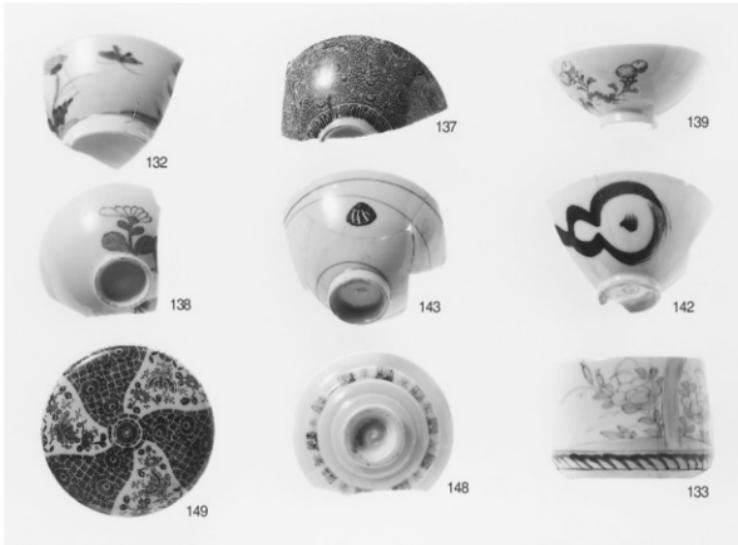
緑釉陶器・青磁・白磁



金属器

平安時代軒瓦

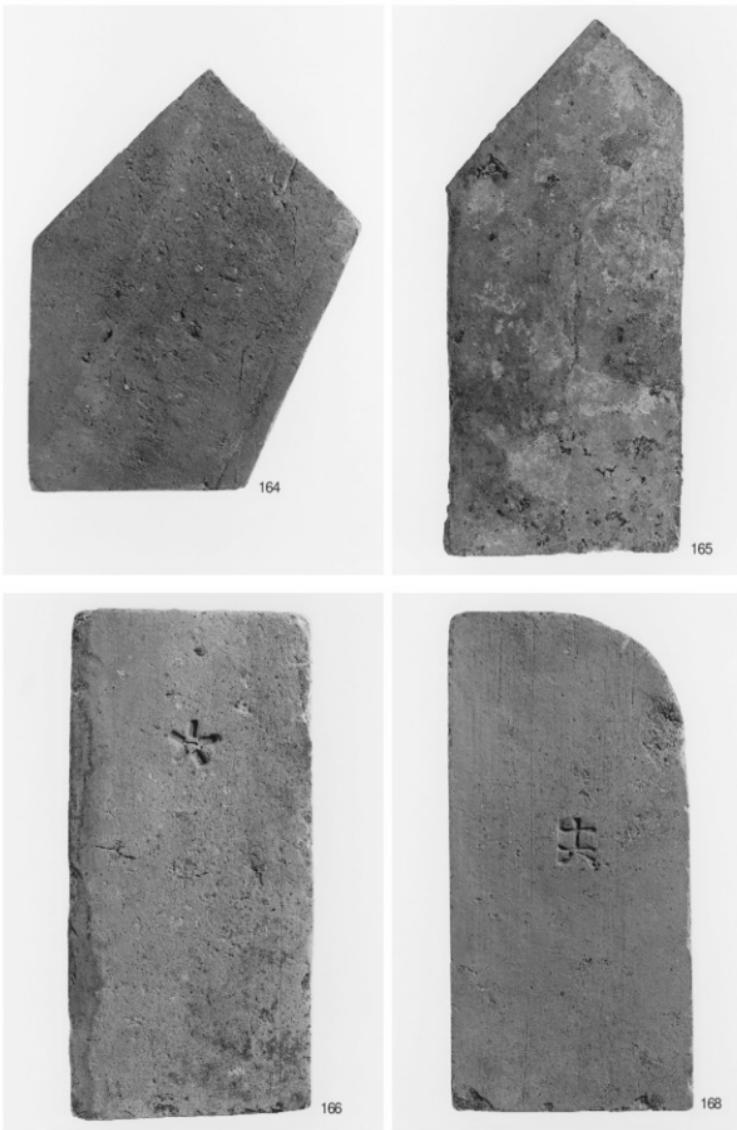
写真図版16



近世・近代磁器



タイル



煉瓦（1）

写真図版18



煉瓦（2）

報告書抄録

ふりがな	くすのきあらたちょういせきだい54じはつくちょうさほうこくしょ					
書名	楠・荒田町遺跡 第54次発掘調査報告書					
副書名						
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	黒田恭正(編)・井尻格・中村大介					
編著機関	神戸市教育委員会					
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 Tel.078-322-6480					
発行年月日	平成26(2014)年3月14日					
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査原因 記録保存調査
		市町村	遺跡番号			
楠・荒田町遺跡	兵庫県神戸市 兵庫区荒田町	281051	4-23	34° 40' 58"	135° 10' 11"	医療センター建設工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
楠・荒田町遺跡	集落跡	弥生時代中期 明治時代	溝・ピット 八角形煙突、煙道	弥生土器 煉瓦など		
要約						
弥生時代中期では、方形周溝墓の可能性が高い溝などを検出し、当時の集落規模が東西約300mに及ぶことを確認した。明治時代の遺構はマッチ工場跡で、当時の神戸の主要産業の1つであったマッチ産業の実態を知る上で貴重な資料が得られた。						

楠・荒田町遺跡

第54次発掘調査報告書

2014.3.14

発行 神戸市教育委員会文化財課
〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1-1
TEL 078-371-7000